

ダンテ『神曲』地獄篇対訳（上）

藤 谷 道 夫

はじめに

本作はダンテ『神曲』地獄篇の最新訳である。ちなみに『神曲』という題名は、1891年に森鷗外がこの作品を日本に初めて紹介したときに付した翻訳である。直訳すれば、『神聖喜劇 *La Divina Commedia*』となることを鷗外が見事に『神曲』と訳してくれたおかげで、日本人のみならず、中国人もこの題名を今なお踏襲している。ところで、*La Divina Commedia* というタイトルはダンテが付けたものではない。当時の書物には題名をつける習慣がなかったため、16世紀まで『ダンテの幻想』、『夢』、『喜劇』、『三韻句詩』、『地獄、煉獄、天国』など様々に呼ばれていた。ダンテ自身はこの作品をギリシャ語アクセントで『喜劇 *Comedia*』^{コメディーア}（地獄篇第16歌128；第21歌2）と呼び、『カングランデ宛ての手紙』でも同様にラテン語で『喜劇 *Comoedia*』と呼んでいる。これに形容詞「神聖な *divina*」が冠せられるようになったのは1555年のヴェネツィア版からであり、以後、これが題名として定着し、普及した。

大正時代以来、『神曲』の日本語訳は数多出版されてきたが、現在容易に入手できる訳書は、①平川祐弘訳（河出書房新社）②寿学文章訳（集英社）③山川丙三郎訳（岩波書店）である。③は比較的誤訳が少ないが、大正時代の訳であり、日本語として古すぎるため現代の読者には通読は困難である。②は英訳（Singleton）からの重訳であり、誤訳は勿論のこと、訳者の基本的なイタリア語の知識の欠如から言葉のニュアンスがまったく無視され、奇妙・珍妙な日本語が多数散見される。①は最も読みやすく、通読可能な唯一の訳書であるが、これらのどれよりも誤訳が多い。明治以来、ダンテ研究を専門としない一般の訳者が翻訳を手掛けてきたため、問題だらけの訳書しかないのが現状である。このため正確で平易な訳書は急務であり、今回、これらの欠点を補うべく訳出したものが、本作である。

CANTO I

1 Nel mezzo del cammin di nostra vita
2 mi ritrovai per una selva oscura,
3 che la diritta via era smarrita.
4 Ahi quanto a dir qual era è cosa dura
5 esta selva selvaggia e aspra e forte
6 che nel pensier rinova la paura!
7 Tant' è amara che poco è più morte;
8 ma per trattar del ben ch'ì vi trovai,
9 dirò de l'altre cose ch'ì v'ho scorte.
10 Io non so ben ridir com' i' v'intrai,
11 tant' era pien di sonno a quel punto
12 che la verace via abbandonai.
13 Ma poi ch'ì fui al piè d'un colle giunto,
14 là dove terminava quella valle
15 che m'avea di paura il cor compunto,
16 guardai in alto e vidi le sue spalle
17 vestite già de' raggi del pianeta
18 che mena dritto altrui per ogni calle.
19 Allor fu la paura un poco queta,
20 che nel lago del cor m'era durata
21 la notte ch'ì passai con tanta pietà.
22 E come quei che con lena affannata,
23 uscito fuor del pelago a la riva,
24 si volge a l'acqua perigliosa e guata,
25 così l'animo mio, ch'ancor fuggiva,

第1歌

- 1 人の生の道^よなかば、
3 ふと気がつくと、私は正しき道の失われた
2 暗き森の中をさまよっていた。
4 ああ、そこがどのようなものだったかを語るのは
5 いかに辛いことか、鬱蒼と茨に満ちたこの野生の森を
6 思い返すだに、恐怖が甦る。
7 その余りの苦しさは死にも劣らぬ。
8 だが、そこで見出した善きことを述べるために
9 そこで眼にした他^{ほか}のことから話そう。
10 私が、どうやってそこに入り込んだか、うまくは口にできない。
12 真^{まこと}の道を棄てたその時、
11 私は深い眠りに浸っていた。
15 だが、私の心を恐怖で貫いていた
14 あの谷が終わりを告げる
13 とある丘の麓にたどり着いたときのことだった。
16 私が高きを仰ぐと、すでに丘の両肩が、
18 あらゆる道を通じて他の諸人^{もろびろ}を正しく導く
17 惑星〔太陽〕の光によって包まれているのが見えた。
21 張り裂けんばかりの苦悶とともに過ごした夜の間じゅう
20 私の心の奥底まで捉えて放さなかった
19 恐怖が、この時、いくぶん和らぐのを覚えた。
23 ちょうど、大海原からかろうじて逃れ出て、
22 息も絶え絶えに、岸にたどり着いた者が
24 振り返っては、おののきながら危険な海を見つめるように、
25 私は、まだ逃げおおせようとしている心を

26 si volse a retro a rimirar lo passo
27 che non lasciò già mai persona viva.
28 Poi ch'èi posato un poco il colpo lasso,
29 ripresi via per la piaggia diserta,
30 sì che 'l piè fermo sempre era 'l più basso.
31 Ed ecco, quasi al cominciar de l'erta,
32 una lonza leggera e presta molto,
33 che di pel macolato era coverta;
34 e non mi si partia dinanzi al volto,
35 anzi 'mpediva tanto il mio cammino,
36 ch'ì fui per ritornar più volte vòlto.
37 Temp' era dal principio del mattino,
38 e 'l sol montava 'n sù con quelle stelle
39 ch'eran con lui quando l'amor divino
40 mosse di prima quelle cose belle;
41 sì ch'a bene sperar m'era cagione
42 di quella fiera a la gaetta pelle
43 l'ora del tempo e la dolce stagione;
44 ma non sì che paura non mi desse
45 la vista che m'apparve d'un leone.
46 Questi pareo che contra me venisse
47 con la test' alta e con rabbiosa fame,
48 sì che pareo che l'aere ne tremesse.
49 Ed una lupa, che di tutte brame
50 sembiava carca ne la sua magrezza,
51 e molte genti fé già viver grame,
52 Questa mi porse tanto di gravezza
53 con la paura ch'uscia di sua vista,

- 27 来し方へ向け、生き身のま^{なんびと}ま何人も
28 出られた^{ため}例^{から}しのない道のりを眺めた。
28 疲れた身体を少し休めた後、
29 ふたたび道を取り、人^{ひと}気^けのない丘陵^{よぎ}を横切^{よぎ}って行った、
30 動かない脚の方を常に下にしながら。
31 すると、登り坂が始まろうとするその所で、
32 身のこなしの軽い、とても敏捷な豹が一頭現れた。
33 斑^{まだら}の皮で覆われたその豹は、
34 私と面と向かい合ったまま離れようとはしなかった。
35 それどころか、私の行く手を遮ろうとするので、
36 私は引き返そうかと、幾度も後ろを振り返った。
37 折しも時は、朝の始まりを告げていた。
39 かつて神がその愛で
40 あの美しき星たちを初めて動かしたときにも、
38 一緒にあった牡羊座を従えて、太陽は空へと昇っていた。
43 それで私は、この朝という時刻、甘美な季節から、
42 あの斑^{まだら}目^めの皮をした獣など
41 恐れるには足らぬと思い始めたが、
45 それも束の間、一頭の獅子が私の前に現れるのを
44 眼にして、新たな恐怖に襲われた。
46 獅子は私を目指して進んで来るように思われた、
47 頭を高くもたげ、飢えて怒^ど気^きを放ちながら、
48 そのため大気までもが打ち^{ふる}顫え、恐れおの^{みなぎ}のいているかのようだった。
50 すると、痩せさらばえ、あらゆる飢えを漲^{みなぎ}らせている
49 ように見える一頭の雌狼がいた。
51 これまであまたの人々を悲惨の極みに陥れてきた
53 この雌狼の姿とその眼差しが発する恐怖に
52 押し潰されるあまり、

54 ch'io perdei la speranza de l'altezza.
55 E qual è quei che volontieri acquista,
56 e giugne 'l tempo che perder lo face,
57 che 'n tutti suoi pensier piange e s'attrista;
58 tal mi fece la bestia senza pace,
59 che, venendomi 'ncontro, a poco a poco
60 mi ripigneva là dove 'l sol tace.
61 Mentre ch'ì rovinava in basso loco,
62 dinanzi a li occhi mi si fu offerto
63 chi per lungo silenzio parea fioco.
64 Quando vidi costui nel gran deserto,
65 "*Miserere* di me", gridai a lui,
66 "qual che tu sii, od ombra od omo certo!".
67 Rispuosemi: "Non omo, omo già fui,
68 e li parenti miei furon lombardi,
69 mantoani per patria ambedui.
70 Nacqui *sub Iulio*, ancor che fosse tardi,
71 e vissi a Roma sotto 'l buono Augusto
72 nel tempo de li dèi falsi e bugiardi.
73 Poeta fui, e cotai di quel giusto
74 figliuol d'Anchise che venne di Troia,
75 poi che 'l superbo Ilión fu combusto.
76 Ma tu perché ritorni a tanta noia?
77 perché non sali il diletto monte
78 ch'è principio e cagion di tutta gioia?".
79 "Or se' tu quel Virgilio e quella fonte
80 che spandi di parlar sì largo fiume?",
81 rispuos' io lui con vergognosa fronte.

- 54 私は高きへ向かう望みを失った。
- 55 人は、手に入れるときは喜び勇んでいながらも、
- 56 失わされるときがやって来ると、
- 57 思いのたけを限りに嘆き悲しむものだが、まさに私は
- 58 休みなき獣によって、そうした気持ちを味わされていた。
- 59 獣は私に向かって、一歩また一歩と迫り来て、
- 60 私を、太陽が黙するところへ、ふたたび追いやっていった。
- 61 私がその低き地〔暗い森〕へと堕ちて行っていたそのとき、
- 62 長き沈黙のために朧気に見える人が
こつぜん 忽然と私の目に映った。
- 64 誰もいない荒涼とした地で、人を見た私は
- 65 彼に向かって叫んだ、「どうか私をお助け下さい、
- 66 あなたがどなたであろうと、亡霊であれ、本当の人であれ。」
- 67 その人は答えて言った。「私は今は人ではないが、かつては人だった。
- 68 わが両親はロンバルディーアの者、
- 69 故郷は二人ともマントヴァだった。
- 70 私が生まれたのは、ユリウス・カエサルの治下、その晩年であった。
- 71 賢帝アウグストゥスの御代にローマに生きたが、
みよ
- 72 それは嘘と偽りの神々を奉じる時代だった。
- 75 詩人であった私は、誇り高きイーリオンの都が焼け落ちた後、
- 74 トロイアからやって来たアンキーセースの、
- 73 あの正しき息子〔アエネアース〕を歌った。
- 76 だが、どうしておまえはあの苦悶の中へ舞い戻ろうとしている？
- 77 どうして喜びの山に登ろうとしない、
- 78 すべての喜びの始まりであり、源であるあの山に？」
- 79 「されば、あなたはあのウェルギリウスですか、かくも大きな
- 80 言葉の川を生み出す源流となられた？」
- 81 私は驚き打たれ、うやうや 恭しく面を下げながら、おもて 答えた。

82 “O de li altri poeti onore e lume,
83 vagliami 'l lungo studio e 'l grande amore
84 che m'ha fatto cercar lo tuo volume.
85 Tu se' lo mio maestro e 'l mio autore,
86 tu se' solo colui da cu' io tolsi
87 lo bello stilo che m'ha fatto onore.
88 Vedi la bestia per cu' io mi volsi;
89 aiutami da lei, famoso saggio,
90 ch'ella mi fa tremar le vene e i polsi”.
91 “A te convien tenere altro viaggio”,
92 rispuose, poi che lagrimar mi vide,
93 “se vuo' campar d'esto loco selvaggio;
94 ché questa bestia, per la qual tu gride,
95 non lascia altrui passar per la sua via,
96 ma tanto lo 'mpedisce che l'uccide;
97 e ha natura sì malvagia e ria,
98 che mai non empie la bramosa voglia,
99 e dopo 'l pasto ha più fame che pria.
100 Molti son li animali a cui s'ammoglia,
101 e più saranno ancora, infin che 'l veltro
102 verrà, che la farà morir con doglia.
103 Questi non ciberà terra né peltro,
104 ma sapienza, amore e virtute,
105 e sua nazione sarà tra feltro e feltro.
106 Di quella umile Italia fia salute
107 per cui morì la vergine Cammilla,
108 Eurialo e Turno e Niso di ferute.
109 Questi la cacerà per ogne villa,

- 82 「おお、すべての詩人を照らす光であり、誉れよ、
83 長き精魂を傾け、ひたすらあなたの詩集を愛し、
84 紐^{ひも}解いてきた私に、今こそ情けをお掛け下さい。
85 あなたこそが私の師であり、鑑^{かがみ}なのですから。
87 私に誉れをもたらしした美しい文体は
86 ただ一人、あなたから受け継いだものなのです。
88 その獣を見て下さい。私が後戻りしているのはこいつのせいなのです。
90 高名な賢者よ、総身^{そうしん}の血を震え上がらせる
89 この獣から私を救って下さい。」
92 私の涙顔を見て、彼はこう答えた、
91 「この野生の地から抜け出したいなら、
93 おまえは別の道を旅する必要がある。
94 なぜなら、おまえがどんなに叫んだとて、この獣は
95 他の者が自分の道を通るのを決して許しはない、
96 それどころか、散々邪魔だてした挙句、最後は殺してしまうからだ。
97 生まれつき、かくも邪悪で、罪深い性^{さが}のため
98 飽くなきその貪欲が満たされることは決してない。
99 食べた後の方が、食べる前よりも腹が減るという奴だ。
100 こいつが番^{つが}う動物は数知れぬ。
101 それ故、これからまだまだ増えゆくだろうが、それもヴェルトロ
102 が来るまでだ。この獵犬^{ヴェルトロ}があいつを悶え死にさせてくれよう。
103 この獵犬^{ヴェルトロ}は塵や悪貨を食べることなく、
104 ただ叡智と愛と徳を糧とする。
105 その生まれはフェルトロとフェルトロの間となろう。
106 そして、あの惨めなイタリアの救いとなる。
107 このイタリアのために、かつて乙女のカミッラが、
108 エウリュアルスが、トゥルヌスやニーススが命^{なげう}を擲った。
109 この獵犬は都市という都市からあの獣を狩り立て、

110 fin che l'avrà rimessa ne lo 'nferno,
111 là onde 'nvidia prima dipartilla.
112 Ond' io per lo tuo me' penso e discerno
113 che tu mi segui, e io sarò tua guida,
114 e trarrotti di qui per loco eterno;
115 ove udirai le disperate strida,
116 vedrai li antichi spiriti dolenti,
117 ch'a la seconda morte ciascun grida;
118 e vedrai color che son contenti
119 nel foco, perché speran di venire
120 quando che sia a le beate genti.
121 A le quai poi se tu vorrai salire,
122 anima fia a ciò più di me degna:
123 con lei ti lascerò nel mio partire;
124 ché quello imperador che là sù regna,
125 perch' i' fu' ribellante a la sua legge,
126 non vuol che 'n sua città per me si vegna.
127 In tutte parti impera e quivi regge;
128 quivi è la sua città e l'alto seggio:
129 oh felice colui cu' ivi elegge!".
130 E io a lui: "Poeta, io ti richeggio
131 per quello Dio che tu non conoscesti,
132 acciò ch'io fugga questo male e peggio,
133 che tu mi meni là dov' or dicesti,
134 sì ch'io veggia la porta di san Pietro
135 e color cui tu fai cotanto mesti".

136 Allor si mosse, e io li tenni dietro.

- 110 ついには、地獄へと送り返すだろう、
111 《^{ルチーフエロ}最初の嫉妬》が解き放った場所へと。
112 それで、おまえにとって最善のことを慮^{おもんばか}って言うが、
113 私の後に従うがよい、私がおまえを導いてやろう。
114 おまえをここから救い出し、永劫の地へと連れ行こう。
115 その地で、おまえは耳にしよう、希望なき嘆き声を。
116 おまえは眼にしよう、苦しみにむせぶ、古の魂^{いにしえ}たち皆が
117 第二の死を乞い求めて、叫んでいるのを。
118 また、おまえは見るだろう、炎の中で満足の笑みを浮かべている
120 人々を。それは、いつの日か至福の人々の中に加えられる時の
119 来ることを待ち望んでいるからだ。
121 その後、もしこの至福の人々の許^{もと}に昇りたいとおまえが願うならば、
122 私よりもそれを為すにふさわしい魂がおられるから、
123 おまえをその方に預けて、私は立ち去ろう。
124 なぜなら、天に君臨し給うかの皇帝〔神〕は、
125 私がかつてその掟に背いたことがあるゆえ、
126 私のような者がその王国〔天国〕に入ることをお望みにならぬからだ。
127 かの方の力が及ばぬところ、全宇宙のどこにもないが、統治しておら
128 れるのは、天界のみ。そこに、かの方の王国と高き玉座がある。
129 かの方に選ばれて、そこに行く者は幸^{さいわ}いなり。」
130 それで、私は言った、「詩人よ、お願いでございます、
131 あなたの知ることのなかったその神の御名^{みな}において、
132 私がこの悪やさらなる悪を逃れることができますよう、
133 今おっしゃった所へ私をお連れ下さい。
134 サン・ピエトロの門〔煉獄〕や、お話しになった
135 かくも悲嘆に暮れる人たち〔地獄〕をお見せ下さい。」

136 すると、彼は歩き出し、私はその後に従った。

CANTO II

1 Lo giorno se n'andava, e l'aere bruno
2 toglieva li animai che sono in terra
3 da le fatiche loro; e io, sol uno,
4 m'apparechiava a sostener la guerra
5 sì del cammino e sì de la pietate,
6 che ritrarrà la mente che non erra.

7 O Muse, o alto ingegno, or m'aiutate;
8 o mente che scrivesti ciò ch'io vidi,
9 qui si parrà la tua nobilitate.

10 Io cominciai: «Poeta che mi guidi,
11 guarda la mia virtù s'ell' è possente,
12 prima ch'a l'alto passo tu mi fidi.

13 Tu dici che di Silvio il parente,
14 corruttibile ancora, ad immortale
15 secolo andò, e fu sensibilmente.

16 Però se l'avversario d'ogne male
17 cortese i fu, pensando l'alto effetto
18 ch'uscir dovea di lui, e 'l chi e 'l quale,
19 non pare indegno ad omo d'intelletto;
20 ch'e' fu de l'alma Roma e di suo impero
21 ne l'empireo ciel per padre eletto:
22 la quale e 'l quale, a voler dir lo vero,
23 fu stabilita per lo loco santo

第2歌

- 1 日は暮れて、暗い大気^{とぼり}の帳が
2 地上に棲む生き物たちを その労苦から
3 解き放っていた。だが、私一人だけ
4 出会う旅路の苦難と哀れみの情との
5 戦い〔試練〕に向けて身構えていた。
6 わが記憶は、それを誤りなく、呼び起こしてくれよう。
- 7 おお、詩神^{ムーサ}たちよ、高き詩才よ、今こそわれを助け給え。
8 おお、わが見しことを書き記してきた記憶よ、
9 ここに、汝の高貴さ〔完全性〕を示せ。
- 10 私はこう話しかけた。「私を導いてくださる詩人よ、
11 私の能力で本当にできるでしょうか、
12 どうか私を陰しき道のりに委ねられる前に、それをお教え下さい。
- 13 あなたは（『アエネーイス』の中で）語っておいでです、
14 シルウィウスの父〔アエネーアース〕がまだ生きているうちに
15 不死の国に赴き、生き身のままだことを。
- 16 ですから、すべての悪に敵対する方〔神〕が、
17 彼に惜しめない好意を注がれたとしても、彼が源となって生まれた
18 崇高な結果や、彼の人となりと、その徳を考えるならば、
19 それはまさに道理にかなったものに思われます。
- 20 彼は至高天において〔神によって〕聖なるローマと
21 その帝国の父に選ばれたのですから。
- 22 その都とその帝国は、真実を言えば、
24 第一の使徒ピエトロを継ぐ者〔教皇〕の住まう

24 u' siede il successor del maggior Piero.
25 Per quest' andata onde li dai tu vanto,
26 intese cose che furon cagione
27 di sua vittoria e del papale ammanto.
28 Andovvi poi lo Vas d'elezione,
29 per recarne conforto a quella fede
30 ch'è principio a la via di salvazione.
31 Ma io, perché venirvi? o chi 'l concede?
32 Io non Enëa, io non Paulo sono:
33 me degno a ciò né io né altri 'l crede.
34 Per che, se del venire io m'abbandono,
35 temo che la venuta non sia folle.
36 Se' savio; intendi me' ch'ì non ragiono".
37 E qual è quei che disvuol ciò che volle
38 e per novi pensier cangia proposta,
39 sì che dal cominciar tutto si tolle,
40 tal mi fec' io 'n quella oscura costa,
41 perché, pensando, consumai la 'mpresa
42 che fu nel cominciar cotanto tosta.
43 "S'ì ho ben la parola tua intesa",
44 rispuose del magnanimo quell' ombra,
45 "l'anima tua è da viltade offesa;
46 la qual molte fiate l'omo ingombra
47 sì che d'onrata impresa lo rivolve,
48 come falso veder bestia quand' ombra.
49 Da questa téma acciò che tu ti solve,
50 dirotti perch' io venni e quel ch'io 'ntesi
51 nel primo punto che di te mi dolse.

- 23 聖なる場所として定められました。あなたは
25 （詩の中で）冥界の旅の誉れを^{アエネーアース}彼にお与えになっていますが、
27 彼は、この旅を通して、何が（未来における）自身の
26 勝利と教皇の権威の^{もと}原因となるかを、学びました。
28 ^{のち}後に、選ばれし器〔聖パウロ〕もそこへ赴きました。
30 救いの道の始源であるあの信仰の支えを
29 そこから持ち帰るために。しかし、私のような者が
31 なぜそこへ行くのでしょうか。一体、誰がそれを許すでしょう。
32 私は、アエネーアースでもなければ、パウロでもありません。
33 私にそんな資格があろうとは、私も世間も思いもよらぬ事です。
34 それ故、もし私がこのまま旅に出るとしたら、
35 それは狂気の沙汰となりましょう。
36 賢者であるあなたには、私の危惧がよくお解りと存じます。」
37 かつて望んでいたことを望まなくなり、
38 最初の志を変えて、新たな思いへと移り、
39 始めたことをすっかり^{ひるがえ}翻す人のように、
40 私はあの暗い丘陵で考えを変えたのだった。
42 というのも、私は考えるたびに、あれほど^{はや}逸る気持ちで
41 始めた企てを掻き消していったからである。
43 「私におまえの言葉がよく解ったとしたなら」
44 と、その偉大な魂は答えた。
45 「おまえの魂は小心さで縮こまっていることになる。そうした
46 精神の卑小さ〔怯懦^{きょうだ}〕そのものが、人の障害となることがよくある。
48 ちょうど獣〔馬〕がありもしないものに怯えて踵を返すように、怯懦は
47 （ありもしない障害を見させ）誉れある事業から人^{ひるがえ}を翻させてしまう。
49 この懸念からおまえを解き放つために話しておこう、
50 なぜ私がここにやって来たのか、そして、何を聞いて
51 おまえに初めて心痛めた〔憐れみの情を覚えた〕のかを。

52 Io era tra color che son sospesi,
53 e donna mi chiamò beata e bella,
54 tal che di comandare io la richiesi.
55 Lucevan li occhi suoi più che la stella;
56 e cominciommi a dir soave e piana,
57 con angelica voce, in sua favella:
58 «O anima cortese mantoana,
59 di cui la fama ancor nel mondo dura,
60 e durerà quanto 'l mondo lontana,
61 l'amico mio, e non de la ventura,
62 ne la diserta piaggia è impedito
63 sì nel cammin, che volt' è per paura;
64 e temo che non sia già sì smarrito,
65 ch'io mi sia tardi al soccorso levata,
66 per quel ch'ì ho di lui nel cielo udito.
67 Or movi, e con la tua parola ornata
68 e con ciò c'ha mestieri al suo campare,
69 l'aiuta, sì ch'ì ne sia consolata.
70 I' son Beatrice che ti faccio andare;
71 vegno del loco ove tornar disio;
72 amor mi mosse, che mi fa parlare.
73 Quando sarò dinanzi al signor mio,
74 di te mi loderò sovente a lui».
75 Tacette allora, e poi comincia' io:
76 «O donna di virtù sola per cui
77 l'umana spezie eccede ogne contento
78 di quel ciel c'ha minor li cerchi sui,
79 tanto m'aggrada il tuo comandamento,

- 52 私が中間状態に置かれた〔リンボの〕者たちの間にいたとき、
53 私は貴い女性に呼ばれた。美と至福の溢れ出るその姿を見るなり、
54 私は、何なりと言いつけ下さるよう、申し出ずにはいらなかった。
55 その女性の眼は、星よりもきらめき、
56 慎ましく甘美に、
57 天使のような声で、私に話し始めになった。
58 『おお、惜しみなきマントヴァの高貴な魂よ、
59 あなたの名声は、今なお、世に語り継がれておりますが、
60 それは遙か世の終わりまで続くことでしょう。
61 幸運の友ではなく、私の友が、
62 荒涼とした丘陵で、道を阻まれるあまり、
63 恐怖にかられて後戻りしています。
66 私が天上で彼の消息を聞いたところでは、
64 あまりに深く迷いに陥っているため、
65 助けに駆けつけるのが遅すぎたのではないかと危ぶんでいます。
67 さあどうか、あなたの光彩に満ちた言葉と
68 彼の救いに必要なものすべてをもって
69 彼を助け、私をお慰め〔喜ばせ〕下さい。
70 あなたを遣わそうとする私は、ベアトリーチェです。
71 戻りたいと私が願うところ〔天上〕より参りました。
72 愛が私を動かし、愛が私に話させるのです。
73 わが主の前にまかり出るおりには、
74 主にあなたのことを繰り返し讃え申し上げます。』
75 こう言うと、彼女は口をつぐみ、次に、私が答えた。
76 『おお、徳に満ちた高貴な女性よ、あなたの徳によってのみ、
78 人間は、最も小さな円周を持つあの天〔月星天〕が
77 その内に包むすべてのものに優るのですから、あなたの
79 ご命令に従うことは私にとって喜び以外の何ものでもありません。

80 che l'ubidir, se già fosse, m'è tardi;
81 più non t'è uo' ch'aprimi il tuo talento.
82 Ma dimmi la cagion che non ti guardi
83 de lo scender qua giuso in questo centro
84 de l'ampio loco ove tornar tu ardi».
85 «Da che tu vuo' saver cotanto a dentro,
86 dirotti brevemente», mi rispuose,
87 «perch' i non temo di venir qua entro.
88 Temer si dee di sole quelle cose
89 c'hanno potenza di fare altrui male;
90 de l'altre no, ché non son paurose.
91 I' son fatta da Dio, sua mercé, tale,
92 che la vostra miseria non mi tange,
93 né fiamma d'esto 'ncendio non m'assale.
94 Donna è gentil nel ciel, che si compiangi
95 di questo 'mpedimento ov' io ti mando,
96 sì che duro giudicio là sù frange.
97 Questa chiese Lucia in suo dimando
98 e disse: 'Or ha bisogno il tuo fedele
99 di te, ed io a te lo raccomando'.
100 Lucia, nimica di ciascun crudele,
101 si mosse, e venne al loco dov' i' era,
102 che mi sedea con l'antica Rachele.
103 Disse: 'Beatrice, loda di Dio vera,
104 ché non soccorri quei che t'amò tanto
105 ch'uscì per te de la volgare schiera?
106 Non odi tu la pieta del suo pianto?
107 non vedi tu la morte che 'l combatte

80 すでにご下命に服していたとしても、遅きに過ぎるほどです。
81 ご要望をお口にされるほか、何も必要ありません。それよりも、
82 あなたが恐れもなくここに降りて来られたその訳をお聞かせ下さい、
83 なぜお戻りになるのを切望されている広き所〔至高天〕から
84 敢えてこの（宇宙の）中心〔地獄〕へと参られたのかを。』
85 『あなたがそれほどまでにお知りになりたいのならば、
86 手短かに申し上げます、どうして私が恐れもなくこの深奥まで
87 やって来たのか』と、お答えになった。
88 『恐れは、人に悪〔害〕をなすことができるものに
89 対してのみ、感じるもの。それ以外は、
90 恐れるに足らないものですから、恐怖を覚える必要がないのです。
91 私は、神のお恵み〔ご加護〕により、
92 あなた方の悲惨に染まることも、
93 この（地獄の）業火に焼かれることもないようにできております。
94 貴き女性^{かた}が天上におわしますが、この優しき女性^{かた}は天上で峻厳な
95 判決を破棄なさるほどに彼の受ける障害に心を痛めておいでです。
96 それで、その障害から彼を救い出すために、私はあなたを遣わすのです。
97 この女性^{かた}はルチアをお呼びになり、命じて、こう言われました、
98 《あなたに変わらぬ信心を捧げる者が今あなたを必要としています。
99 それ故、彼のことを宜しくお頼み申しますよ。》
100 ルチアは、あらゆる残酷さを憎まれる方ですが、
101 すぐに立ち上がって、私のいる所にやって来られたのです。
102 私は旧約の女性ラケルとともに座っていましたが、ルチアは
103 こう仰いました。《神の真^{まこと}の誉れ、ベアトリーチェよ、
104 なぜあなたは、かくもあなたを愛した者を助けに駆けつけぬのですか、
105 あなたを愛したおかげで、俗の群から出でたあの者を？
106 彼の苦悶の嘆きが聞こえないのですか？
108 海も凌駕し得ない激しい流れのそばで

108 su la fiumana ove 'l mar non ha vanto?'
109 Al mondo non fur mai persone ratte
110 a far lor pro o a fuggir lor danno,
111 com' io, dopo cotai parole fatte,
112 venni qua giù del mio beato scanno,
113 fidandomi nel tuo parlare onesto,
114 ch'onora te e quei ch'udito l'hanno».
115 Poscia che m'ebbe ragionato questo,
116 li occhi lucenti lacrimando volse,
117 per che mi fece del venir più presto;
118 E venni a te così com' ella volse:
119 d'inanzi a quella fiera ti levai
120 che del bel monte il corto andar ti tolse.
121 Dunque che è? perché, perché restai,
122 perché tanta viltà nel core allette,
123 perché ardire e franchezza non hai,
124 poscia che tai tre donne benedette
125 curan di te nella corte del cielo,
126 e 'l mio parlar tanto ben t'impromette?".
127 Quali fioretti dal notturno gelo
128 chinati e chiusi, poi che 'l sol li 'mbianca,
129 si drizzan tutti aperti in loro stelo,
130 tal mi fec' io di mia virtude stanca,
131 e tanto buono ardire al cor mi corse,
132 ch'i' cominciai come persona franca:
133 "Oh pietosa colei che mi soccorse!
134 e te cortese, ch'ubidisti tosto
135 a le vere parole che ti porse!

- 107 彼を襲う死が見えないのですか？》
- 109 かつてこの世に、自分の利益を求めるに^{びん}敏な者も、
- 110 自身の災いを避けるに疾く^と者も、
- 111 この言葉を聞いた私ほど速やかな者はいませんでした。
- 113 あなただけでなく、あなたの教えを聴いた者みな^のの誉れとなる
- 114 あなたの気高い言葉を^{たの}恃んで、
- 112 私は至福の座からここに降りて来たのです。』
- 115 このように語り終えると、
- 116 彼女は涙に光るその眼を私に向けられた。
- 117 その涙が私の心をいっそう早らせ、
- 118 こうして、その願い通り、おまえ^{もと}の許にやって来た。
- 120 そして、美しき山への近道を妨げる
- 119 あの獣からおまえを助け出したのだ。
- 121 それ故、どうだ、これでもまだぐずぐずするというのか？
- 122 なぜおまえはそんなにも怯^{きようだ}懦を心に誘い込む。
- 123 なぜおまえには勇気がない、なぜ自分に自信が持てぬ、
- 124 至福の三人の女性〔マリーア・ルチア・ベアトリーチェ〕が、
- 125 天の宮廷でおまえのことを慮^{おもんばか}って下さり、私の言葉は
- 126 かくも大きな善をおまえに約束しているというのに？」
- 127 夜の寒さにうなだれ、花びらを閉じた
- 128 けなげな花たちが、陽の光に白く染め抜かれるや、
- 129 いっせいに花びらを開いて、茎の上にすっと起きあがるように、
- 130 私の萎れていた力も真っ直ぐに伸び上がり、
- 131 みなぎる勇気が溢れんばかりに心に入り込んできた。
- 132 （あらゆる懸念から）解き放たれた人のように私は言った、
- 133 「おお、私のために駆けつけて下さった慈愛深き^{かた}女性よ！
- 135 そして惜しみなき方よ、あなたは、あなたに語られた
- 134 その真実の言葉にすぐさま従って下さいました！

136 Tu m'hai con disiderio il cor disposto
137 sì al venir con le parole tue,
138 ch'i' son tornato nel primo proposto.
139 Or va, ch'un sol volere è d'ambedue:
140 tu duca, tu signore, e tu maestro".
141 Così li disti; e poi che mosso fue,
142 intrai per lo cammino alto e silvestro.

- 137 あなたが、その言葉で、私の心に行きたいという思いを
136 吹き込んで下さったおかげで、
138 私は最初の志に立ち返ることができました。
139 さあ、参りましょう、意思は二人で一つです。
140 あなたこそ真の導き手、わが主、わが師です。」
141 こう私が言うと、彼は歩き出し、
142 私は険しい森の道へと入って行った。

CANTO III

1 «PER ME SI VA NE LA CITTÀ DOLENTE,
2 PER ME SI VA NE L'ETTERNO DOLORE,
3 PER ME SI VA TRA LA PERDUTA GENTE.
4 GIUSTIZIA MOSSE IL MIO ALTO FATTORE;
5 FECEMI LA DIVINA PODESTATE,
6 LA SOMMA SAPIENZA E 'L PRIMO AMORE.
7 DINANZI A ME NON FUOR COSE CREATE
8 SE NON ETTERNE, E IO ETTERNO DURO.
9 LASCIATE OGNE SPERANZA, VOI CH' INTRATE».

10 Queste parole di colore oscuro
11 vid' io scritte al sommo d'una porta;
12 per ch'io: "Maestro, il senso lor m'è duro".
13 Ed elli a me, come persona accorta:
14 "Qui si convien lasciare ogne sospetto;
15 ogne viltà convien che qui sia morta.
16 Noi siam venuti al loco ov' i' t'ho detto
17 che tu vedrai le genti dolorose
18 c'hanno perduto il ben de l'intelletto".
19 E poi che la sua mano a la mia puose
20 con lieto volto, ond' io mi confortai,
21 mi mise dentro a le segrete cose.
22 Quivi sospiri, pianti e alti guai
23 risonavan per l'aere senza stelle,
24 per ch'io al cominciar ne lagrimai.

第3歌

- 1 『われを過ぎる者、苦患^{くげん}の都市^{くし}に入る。
- 2 われを過ぎる者、永劫^{えいせつ}の呵責^{かしゃく}に入る。
- 3 われを過ぎる者、滅び^{めい}の民に伍^ごする。
- 4 正義は高き創り主を動かし、
- 5 神威は、至高の智は、
- 6 始源の愛は、われを作る。
- 7 永遠に創られしもののほか、わが前に
- 8 創られしものなく、われは無窮に立つ。
- 9 われを過ぎんとする者、すべての望みを捨てよ。』
- 10 この黒々とした言葉が
- 11 門の頂きに彫られているのを眼にした私は尋ねた、
- 12 「師よ、その意味するところ、私には計りがたく思われます。」
- 13 すると師は、言葉の裏を見透かす人のように、答えた、
- 14 「ここでは、すべての疑念は打ち捨てねばならない。
- 15 ここでは、心の弱さはことごとく打ち殺さねばならない。
- 16 私が以前おまえに話した所に、われわれはやって来たのだ。
- 17 そこでおまえは眼にしよう、知性の恩恵を失った者たちが
- 18 苦しみ懊悩するさまを。」
- 19 そして、師は微笑みながら、
- 20 私の手を握った。私はそれに力づけられ、
- 21 秘密の世界へと導かれて行った。
- 22 ここではうめき声、泣き声、甲高い悲鳴が
- 23 星のない空にこだましていた。
- 24 その余りに悲惨な音に、私は、ただそれだけで、落涙した。

25 Diverse lingue, orribili favelle,
26 parole di dolore, accenti d'ira,
27 voci alte e fioche, e suon di man con elle
28 facevano un tumulto, il qual s'aggira
29 sempre in quell' aura senza tempo tinta,
30 come la rena quando turbo spira.
31 E io ch'avea d'error la testa cinta,
32 dissi: "Maestro, che è quel ch'ì' odo?
33 e che gent' è che par nel duol sì vinta?".
34 Ed elli a me: "Questo misero modo
35 tegnon l'anime triste di coloro
36 che visser senza 'nfamia e senza lodo.
37 Mischiate sono a quel cattivo coro
38 de li angeli che non furon ribelli
39 né fur fedeli a Dio, ma per sé fuoro.
40 Caccianli i ciel per non esser men belli,
41 né lo profondo inferno li riceve,
42 ch'alcuna gloria i rei avrebber d'elli".
43 E io: "Maestro, che è tanto greve
44 a lor, che lamentar li fa sì forte?".
45 Rispuose: "Dicerolti molto breve.
46 Questi non hanno speranza di morte,
47 e la lor cieca vita è tanto bassa,
48 che 'nvidiosi son d'ogne altra sorte.
49 Fama di loro il mondo esser non lassa;
50 misericordia e giustizia li sdegna:
51 non ragioniam di lor, ma guarda e passa".
52 E io, che riguardai, vidi una 'nsegna

- 25 様々な異郷の言語、ぞっとする奇声、
26 苦しみの言葉、怒声、叫声、
27 押し殺した声、それらに混じって手で打^{ちやうちやく}擲する音、
28 これらが騒然とした一大音響となり、時のない
29 黒ずんだ大気の中を、旋風に舞いあげられた
30 砂塵^{さじん}のように、果てしなく回っている。
31 疑問が私の頭に幾重にも巻き付くのを感じて、私は言った、
32 「師よ、私の耳^{ろう}を聳する音は何ですか？ 苦しみにかくも打ち
33 のめされているように見えるこの人々はどんな人たちですか？」
34 すると師は、私に答えて言った、「この惨めな様^{さま}に
36 あるのは、謗^{そし}りもなく誉れもなく生きた
35 恥ずべき魂たちだ。
39 彼らは、神に逆らうでも、仕えるでもなく、
38 ただ自分のためだけに存在した
37 あの卑怯な天使の群に混じっている。
40 天は、美しさが損なわれるために、この者たちを追ひ払う。
41 地獄の深淵も、同じく、受け入れはしない、
42 悪党たちがある種の誉れを感じるからだ。」
43 それで私は尋ねた、「師よ、何故^{なにゆえ}にこの者たちの罪はかくも重い
44 のですか、こんなに激しく嘆き悲しまねばならないほど？」
45 師は答えて言った、「手短に言おう。
46 この者たちには死の望みがないからだ、そして、
47 その盲目の生が低劣極まるゆえに、今の運命以外なら、
48 どんな運命〔罰〕さえも羨ましく感じるためだ。
49 この世は彼らの名が残ることを許しはしない。
50 慈悲も正義も、彼らを蔑む。
51 彼らの話はもう止めよう。ただ見て、通り過ぎよ。」
52 それで、目を凝らしてみると、一旒^{りゅう}の旗が見えた。

53 che girando correva tanto ratta,
54 che d'ogne posa mi pareva indegna;
55 e dietro le venìa sì lunga tratta
56 di gente, ch'i' non avrei creduto
57 che morte tanta n'avesse disfatta.
58 Poscia ch'io v'ebbi alcun riconosciuto,
59 vidi e conobbi l'ombra di colui
60 che fece per viltade il gran rifiuto.
61 Incontanente intesi e certo fui
62 che questa era la setta d'i cattivi,
63 a Dio spiacenti ed a' nemici sui.
64 Questi sciaurati, che mai non fur vivi,
65 erano ignudi, stimolati molto
66 da mosconi e da vespe ch'eran ivi.
67 Elle rigavan lor di sangue il volto,
68 che, mischiato di lagrime, a' lo piedi
69 da fastidiosi vermi era ricolto.
70 E poi ch'a riguardare oltre mi diedi,
71 vidi genti a la riva d'un gran fiume;
72 per ch'io dissi: "Maestro, or mi concedi
73 ch'i' sappia quali sono, e qual costume
74 le fa di trapassar parer sì pronte,
75 com' i' discerno per lo fioco lume".
76 Ed elli a me: "Le cose ti fier conte,
77 quando noi fermerem li nostri passi
78 su la trista riviera d'Acheronte".
79 Allor con li occhi vergognosi e bassi,
80 temendo no 'l mio dir li fosse grave,

- 53 それは巡りながら凄まじい速さで走っていたので、
54 いかなる停止も我慢できないかのように見えた。
55 その後を、人々の列が長々と続いていたが、
56 （その余りの数を目にしなかったなら）死がかくも^{おびただ}夥しい人を
57 滅ぼしたとは信じられはしなかっただろう。
58 何人か見覚えのある者をそこに目にした後、
59 私は一人の魂を見たが、それが
60 ^{きょうだ}怯懦のために大いなる^{くらい}位を棄てた者だと判った。
61 即座に了解し、私は納得した、
62 これが、神にも神の敵〔悪魔〕にも嫌われている
63 卑怯な群であることを。
64 一度も生きたことの無いこの卑しむべき者たちは
65 真っ裸で、そこにいる^{あぶ}虻や蜂の大群に
66 刺しまくられていた。
67 このため、幾筋もの血が彼らの顔をつたい、
68 涙と混じり合って、足元で、
69 気味悪い^{うじ}蛆虫たちによって吸い集められていた。
70 次いで、目を向こうにやると、
71 とある大きな川〔アケローン〕の岸辺に人々が見えたので、
72 私は尋ねた、「師よ、教えて下さいませんか、
73 彼らは何者なののでしょうか。また、^{ほの}仄かな光を通して窺う限り、
74 彼らは向こう岸へ渡りたくて堪らないように見えるのですが、
75 それはいかなる定めによるのでしょうか。」
76 すると師は私に言った、「それは、われわれが
77 アケローンの悲愁の川に、歩を止めるとき
78 はっきりと判るだろう。」
79 こう言われて、私は恥ずかしさの余り、目を伏せた。
80 私の言葉が先生の気に障るのを懼れて、

81 infino al fiume del parlar mi trassi.
82 Ed ecco verso noi venir per nave
83 un vecchio, bianco per antico pelo,
84 gridando: “Guai a voi, anime prave!
85 Non ispirate mai veder lo cielo:
86 i’ vegno per menarvi a l’altra riva
87 ne le tenebre etterne, in caldo e ’n gelo.
88 E tu che se’ costì, anima viva,
89 pàrtiti da cotesti che son morti”.
90 Ma poi che vide ch’io non mi partiva,
91 disse: “Per altra via, per altri porti
92 verrai a piaggia, non qui, per passare:
93 più lieve legno convien che ti porti”.
94 E ’l duca lui: “Caròn, non ti crucciare:
95 vuolsi così colà dove si puote
96 ciò che si vuole, e più non dimandare”.
97 Quinci fuor quete le lanose gote
98 al nocchier de la livida palude,
99 che ’ntorno a li occhi avea di fiamme rote.
100 Ma quell’ anime, ch’eran lasse e nude,
101 cangiar colore e dibattero i denti,
102 ratto che ’nteser le parole crude:
103 bestemmiaavano Dio e lor parenti,
104 l’umana spezie e ’l loco e ’l tempo e ’l seme
105 di lor semenza e di lor nascimenti.
106 Poi si ritrasser tutte quante insieme,
107 forte piangendo, a la riva malvagia
108 ch’attende ciascun uom che Dio non teme.

- 81 川に着くまで、話すのを差し控えた。
- 82 すると突然、（川岸にいる）私たちに向かって一人の老翁が
- 83 船で近づいて来た。^{せいそう}星霜により髪も髭も白いその老翁は
- 84 怒鳴った、「諦めろ、邪悪な魂たちめ。
- 85 天を仰げるなど、ゆめゆめ思うな。
- 86 わしがやって来たのは、おまえらを向こう岸の、
- 87 常世の闇へ、炎熱と氷寒の中へと連れ行くためだ。
- 88 おい、おまえ！ なぜそこにいる、生きた魂のくせに。
- 89 死んでいるそいつらから離れろ。」
- 90 しかし、私が立ち去らないのを見て、
- 91 言った、「おまえは他の道を通り、他の港を通って、
- 92 浜辺〔煉獄〕に着こうぞ。おまえが渡るのはここではない。
- 93 もっと軽やかな船がおまえを渡してくれるはずだ。」
- 94 すると師はカローンに言った、「青筋を立てるな、カローンよ、
- 95 望まれることすべてが可能となる所〔至高天〕の
- 96 ^{おぼめ}思し召し〔神の意志〕なのだ、それ故、何も問うな。」
- 97 この言葉を聞くや、髭もじゃの頬（の動き）は静まったが、
- 98 ^{にびいろ}鈍色の沼の渡し守の
- 99 両目の周りには^{ほのお}焰の輪が燃え立っていた。
- 100 一方、打ちひしがれた裸の魂たちは、
- 102 カローンの情け容赦ない言葉を聞くや、
- 101 顔色を変え、歯をカタカタと鳴らした。
- 103 彼らは神を呪い、自分たちの始祖を、
- 104 人類を、生まれた場所と時を、
- 105 彼らの種の種〔祖父母〕を、自分たちを生んだ^{ののし}両親を罵っていた。
- 107 やがて、彼らは激しく泣きながら、
- 108 神を畏れぬ者すべてを待ちかまえる
- 106 邪悪の岸へと一人残らず寄り集った。

109 Caron dimonio, con occhi di bragia
110 loro accennando, tutte le raccoglie;
111 batte col remo qualunque s'adagia.
112 Come d'autunno si levan le foglie
113 l'una appresso de l'altra, fin che 'l ramo
114 vede a la terra tutte le sue spoglie,
115 similmente il mal seme d'Adamo
116 gittansi di quel lito ad una ad una,
117 per cenni come augel per suo richiamo.
118 Così sen vanno su per l'onda bruna,
119 e avanti che sien di là discese,
120 anche di qua nuova schiera s'auna.
121 "Figliuol mio", disse 'l maestro cortese,
122 "quelli che muoion ne l'ira di Dio
123 tutti convegnon qui d'ogne paese;
124 e pronti sono a trapassar lo rio,
125 ché la divina giustizia li sprona,
126 sì che la téma si volve in disio.
127 Quinci non passa mai anima bona;
128 e però, se Caron di te si lagna,
129 ben puoi sapere omai che 'l suo dir suona".
130 Finito questo, la buia campagna
131 tremò sì forte, che de lo spavento
132 la mente di sudore ancor mi bagna.
133 La terra lagrimosa diede vento,
134 che balenò una luce vermiglia
135 la qual mi vinse ciascun sentimento;
136 e caddi come l'uom cui sonno piglia.

- 109 悪魔のカローンは、その炭火のように赤々とした目で
110 彼らに合図を送り、皆を（舟の上に）集め、
111 ぐずぐずする者があるのを見ると、誰であれ、權で叩く。
112 ちょうど秋の葉が一ひら、また一ひらと剥がれ落ち、
113 最後には、自身の脱いだ衣がすっかり
114 地面に落ちているのを枝が目にするように、
115 その、アダムの悪しき種たちは、一人また一人と、
116 ^{たかじょう}鷹匠の呼び掛けに従う鳥のように、
117 その岸から、合図に応じて、飛び降りる。
118 こうして魂たちが暗い水の上を去ってゆき、
119 向こう岸に降りきらぬうちに、
120 再びこちらの岸には新たな群が集まる。
121 「息子よ」と、師は優しく言った、
122 「神の怒りのうちに死んでいく者は
123 世界のどこにしようと皆ここへ集まって来る。
124 そして、川を渡ろうと心急^せくが、それは
125 神の正義が彼らに拍車をかけ、
126 そのために、恐れが望みに転化するからだ。
127 ここを善き魂が渡ることは決してない。
128 それ故、カローンがおまえのことで文句を言おうとも、
129 その言葉の意味するところはおまえにもよく解るはずだ。」
130 師がこのように言い終えるや、漆黒の広野が
131 突如として激しく揺れた。その余りの恐怖を
132 思い返すだけで、今もなお、全身が汗でにじむ。
133 涙に濡れた大地は、風を起こし、
134 その風の中で朱の光が^{きら}煌めいた。
135 その稲光に私のすべての感覚は圧倒され、
136 眠りに捕らわれた者のように私は倒れ伏した。

CANTO IV

1 Ruppemi l'alto sonno ne la testa
2 un greve truono, sì ch'io mi riscossi
3 come persona ch'è per forza desta;
4 e l'occhio riposato intorno mossi,
5 dritto levato, e fiso riguardai
6 per conoscer lo loco dov' io fossi.
7 Vero è che 'n su la proda mi trovai
8 de la valle d'abisso dolorosa
9 che 'ntrono accoglie d'infiniti guai.
10 Oscura e profonda era e nebulosa
11 tanto che, per ficcar lo viso a fondo,
12 io non vi discerneva alcuna cosa.
13 “Or discendiam qua giù nel cieco mondo”,
14 cominciò il poeta tutto smorto.
15 “Io sarò primo, e tu sarai secondo”.
16 E io, che del color mi fui accorto,
17 dissi: “Come verrò, se tu paventi
18 che suoli al mio dubbiare esser conforto?”.
19 Ed elli a me: “L'angoscia de le genti
20 che son qua giù, nel viso mi dipigne
21 quella pièta che tu per téma senti.
22 Andiam, ché la via lunga ne sospigne”.
23 Così si mise e così mi fé intrare
24 nel primo cerchio che l'abisso cigne.
25 Quivi, secondo che per ascoltare,

第4歌

- 1 激しい雷鳴が私の頭の中の
2 深い眠りを破った。それで私は、無理やり
3 起こされた人のように、意識を取り戻した。
4 再び見えるようになった目を辺りに配りながら
6 立ち上がり、自分がどこにいるのか
5 知ろうと眼を凝らした。
7 私がいたのは、まさに深淵〔地獄〕の
8 苦悶の谷の縁だった。
9 そこには果てしない阿鼻^{あびきようかん}叫喚^{とどろ}が収められ、轟いていた。
10 谷は暗く、深く、（闇は）余りに濃密であった
11 ため、どんなに谷底を覗き見ても、
12 何一つ見分けることはできなかった。
13 「さあ、下へ、盲目の世界へと降りるとしよう」
14 と、生気をすっかり失って、詩人が話した、
15 「私が最初に行くから、おまえは後について来るがいい。」
16 私は師の顔色に気づいて
17 言った、「どうやって私が行けるでしょう、私が怖じ気づくと、
18 いつも励まして下さる先生が危惧されていらっしゃるなら？」
19 すると師は私に言った、「ここにいる人々の
20 苦しみが私の顔に、その憐憫^{れんぴん}の色を塗り、
21 それをおまえは恐れと取り違えたのだ。
22 さあ行こう、長き道のりがわれらを待っている。」
23 こう言って、師は先に立ち、地獄の深淵を取り巻く
24 最初の圏へと私を引き入れた。
25 ここで聞こえてくるものと言えば、

26 non avea pianto mai che di sospiri
27 che l'aura eterna facevan tremare;
28 ciò avvenia di duol senza martìri,
29 ch'avean le turbe, ch'eran molte e grandi,
30 d'infanti e di femmine e di viri.
31 Lo buon maestro a me: "Tu non dimandi
32 che spiriti son questi che tu vedi?
33 Or vo' che sappi, innanzi che più andi,
34 Ch'ei non peccaro; e s'elli hanno mercedi,
35 non basta, perché non ebber battesimo,
36 ch'è porta de la fede che tu credi;
37 e s'e' furon dinanzi al cristianesimo,
38 non adorar debitamente a Dio:
39 e di questi cotai son io medesimo.
40 Per tai difetti, non per altro rio,
41 semo perduti, e sol di tanto offesi
42 che senza speme vivemo in disio".
43 Gran duol mi prese al cor quando lo 'ntesi,
44 però che gente di molto valore
45 conobbi che 'n quel limbo eran sospesi.
46 "Dimmi, maestro mio, dimmi, signore",
47 comincia' io per volere esser certo
48 di quella fede che vince ogni errore:
49 "uscicci mai alcuno, o per suo merto
50 o per altrui, che poi fosse beato?".
51 E quei che 'ntese il mio parlar coverto,
52 rispuose: "Io era nuovo in questo stato,
53 quando ci vidi venire un possente,

- 26 悲嘆の声ではなく、永遠の大気を打ち震わせる
27 溜息ばかりであった。
30 その溜息は、幼児や女や男の
29 数々の群れにいる夥しい人々の、
28 呵責^{かしやく}を伴わない苦しみから発せられていた。
31 優れた師は私に言った、「おまえは尋ねないのか、
32 今眼にしているこれらの人々がどんな霊なのか。
33 先に進む前におまえに教えておこう、
37 彼らは罪を犯さなかった。しかし、たとえどんな功績があっても、
36 それだけでは十分ではない。なぜなら洗礼を受けなかったからだ。
35 洗礼こそがおまえの信じる（キリスト教）信仰の門であるのに。
39 彼らは、キリスト教以前に生き、
38 しかるべき仕方^{かた}で神を崇めなかった者たちだが、
37 私もこうした者たちの一人だ。
40 何か他の罪のためではなく、ただこれら〔信仰と洗礼〕を欠いたために
41 われらは滅びた。それで、受ける苦しみはただ一つ、
42 希望なく、ただ願望の中に生きている。」
43 師のこの言葉を聞いた時、私の胸は大いなる苦しみで締め付けられた。
44 非常に価値ある人々があのリンボで
45 宙づりにされているのを知ったからだ。
46 「先生、教えて下さい、わが師よ、どうか話して下さい」
47 と、すべての疑念を打ち払う
48 あの信仰について確信を得たい一心に、私は尋ねた、
49 「かつてここから出て、至福者となった人はいないのですか、
50 自身の功德^{くどく}で、あるいは、他の人のお陰^{ほか}で？」
51 すると、私の言葉の裏に隠された意味を理解して、
53 師は答えた、「私がここに来て間もなくの頃、
54 その頭^{こうべ}が勝利のしるしに包まれた

54 con segno di vittoria coronato.
55 Trasseci l'ombra del primo parente,
56 d'Abèl suo figlio e quella di Noè,
57 di Moïse legista e ubidente;
58 Abraàm patriarca e David re,
59 Israèl con lo padre e co' suoi nati
60 e con Rachele, per cui tanto fé,
61 e altri molti, e feceli beati.
62 E vo' che sappi che, dinanzi ad essi,
63 spiriti umani non eran salvati".
64 Non lasciavam l'andar perch' ei dicessi,
65 ma passavam la selva tuttavia,
66 la selva, dico, di spiriti spessi.
67 Non era lunga ancor la nostra via
68 di qua dal sonno, quand' io vidi un foco
69 ch'emisperio di tenebre vincia.
70 Di lungi n'eravamo ancora un poco,
71 ma non sì ch'io non discernessi in parte
72 ch'orrevol gente possedeo quel loco.
73 "O tu ch'onori scienzia ed arte,
74 questi chi son, c'hanno cotanta onranza,
75 che dal modo de li altri li diparte?".
76 E quelli a me: "L'onrata nominanza
77 che di lor suona sù ne la tua vita,
78 grazia acquista in ciel che sì li avanza".
79 Intanto voce fu per me udita:
80 "Onorate l'altissimo poeta;
81 l'ombra sua torna, ch'era dipartita".

- 52 権能あるお方〔キリスト〕がここへ来られるのを眼にした。
- 55 その方は、ここから（人類の生みの親である）最初の父〔アダム〕、
- 56 その息子アベル、そしてノアや
- 57 神の僕^{しもべ}にして律法者モーセ、
- 58 （モーセ以前の）父祖アブラハムや王ダヴィデ、
- 59 ヤコブとその父〔イサク〕や（十二人の）息子たち、
- 60 彼女と結婚するためにヤコブが多くの労を積んだラケル、
- 61 その他多くの魂を連れ出し、彼らを至福者にされた。
- 62 それで、おまえに知っておいてもらいたいのは、彼らよりも先に
- 63 人間の魂で救われたものはないということだ。」
- 64 師が話している間も、私たちは歩を止めることなく、
- 65 そのまま森を通り続けていた。
- 66 森と言ったのは、鬱蒼と茂る森のように霊がひしめいていたからだ。
- 67 私が眠りに落ちたところからまだそれほど長く
- 68 道を進んでいたわけではないが、この時、光明が闇に打ち勝ち
- 69 （闇の中に）半円球を形作っているのを目にした。
- 70 そこまで、まだもう少し距離があったが、
- 71 その場所を占めているのが誉れある人々であることが、
- 72 完全とは言えぬまでも、見分けられないほどではなかった。
- 73 「学知と芸術に誉れをなす師よ、
- 74 この者たちは誰なのですか、かくも偉大な名誉を有し、
- 75 他の（リンボの）者たちの状態^{たもと}と袂を分かつこの人たちは？」
- 76 すると師は私に言った、「おまえの生きる地上に
- 77 こだます彼らの榮え^はある名声は
- 78 天上の恵みを得て、このような格別の境遇を彼らに与えている。」
- 79 この時、次のような声が私に聞こえてきた。
- 80 「崇高なる詩人を褒め称えよ。
- 81 私たちから離れた彼の魂が戻ってくる。」

82 Poi che la voce fu restata e queta,
83 vidi quattro grand' ombre a noi venire:
84 sembianz' avevan né trista né lieta.
85 Lo buon maestro cominciò a dire:
86 "Mira colui con quella spada in mano,
87 che vien dinanzi ai tre sì come sire:
88 Quelli è Omero poeta sovrano;
89 l'altro è Orazio satiro che vene;
90 Ovidio è 'l terzo, e l'ultimo Lucano.
91 Però che ciascun meco si convene
92 nel nome che sonò la voce sola,
93 fannomi onore, e di ciò fanno bene".
94 Così vid' i' adunar la bella scola
95 di quel segnor de l'altissimo canto
96 che sovra li altri com' aquilla vola.
97 Da ch'ebber ragionato insieme alquanto,
98 volsersi a me con salutevol cenno,
99 e 'l mio maestro sorrise di tanto;
100 e più d'onore ancor assai mi fenno,
101 ch'e' sì mi fecer de la loro schiera,
102 sì ch'io fui sesto tra cotanto senno.
103 Così andammo infino a la lumera,
104 parlando cose che 'l tacere è bello,
105 sì com' era 'l parlar colà dov' era.
106 Venimmo al piè d'un nobile castello,
107 sette volte cerchiato d'alte mura,
108 difeso intorno d'un bel fiumicello.
109 Questo passammo come terra dura;

82 声が止んで、静かになった後、
83 私たちに向かって四人の大いなる魂がやって来るのを目にしたが、
84 その表情には悲しげな様子も嬉しげな様子も見えなかった。
85 優れた師は話し始めた、
86 「手に剣^{つるぎ}を持って、
87 王者のように他の三人の前を進むかの人を見るがいい。
88 あの方は至高の詩人ホメーロス、
89 二番目にやって来るのが風刺詩人ホラーティウス、
90 三番目がオウィディウス、そして最後がルーカーヌスだ。
91 彼らは皆、かの一つの声が呼び掛けた名称を私とともに
92 分かち合っているからこそ、私に敬意を表している。
93 この意味で、彼らの行為は、誠にふさわしいものだ。」
96 鷺のように、他のどれよりも高く^{あまかけ}天翔る
95 最も崇高な歌〔悲劇的文体：叙事詩体〕の王者^{ホメーロス}が率いる
94 美しい詩派が一つになるのをこのように私は目にしたのであった。
97 彼らはしばしともに語らった後、
98 私の方を向いて挨拶を送ったが、
99 これを見て、わが師は微笑んだ。
100 それだけでなく、彼らは身に余る誉れを私に授けてくれた。
101 というのも、彼らは私をその仲間に迎え入れてくれたのだ。
102 かくして私はかくも大いなる賢者たちの六人目に加わることとなった。
103 私たちは連れ添って、光明^{もと}の下まで歩いていったが、
104 その間の談笑については、その会話が為されていた
105 場所ではふさわしかったが、今はふさわしくないため、黙しておこう。
107 私たちは高貴な城の麓にやって来た。
108 高い城壁が七重に取り巻き、
106 周囲はうるわしい一本の小川によって護られていた。
109 この流れを私たちは固い土を踏むように渡り、

110 per sette porte intrai con questi savi:
111 giugnemmo in prato di fresca verdura.
112 Genti v'eran con occhi tardi e gravi,
113 di grande autorità ne' lor sembianti:
114 parlavan rado, con voci soavi.
115 Traemmoci così da l'un de' canti,
116 in loco aperto, luminoso e alto,
117 sì che veder si potien tutti quanti.
118 Colà dritto, sopra 'l verde smalto,
119 mi fuor mostrati li spiriti magni,
120 che del vedere in me stesso m'essalto.
121 I' vidi Elettra con molti compagni,
122 tra ' quai conobbi Ettòr ed Enea,
123 Cesare armato con li occhi grifagni.
124 Vidi Camilla e la Pantasilea;
125 da l'altra parte vidi 'l re Latino
126 che con Lavina sua figlia sedea.
127 Vidi quel Bruto che cacciò Tarquino,
128 Lucrezia, Iulia, Marzìa e Corniglia;
129 e solo, in parte, vidi 'l Saladino.
130 Poi ch'innalzai un poco più le ciglia,
131 vidi 'l maestro di color che sanno
132 seder tra filosofica famiglia.
133 Tutti lo miran, tutti onor li fanno:
134 quivi vid' ò Socrate e Platone,
135 che 'nnanzi a li altri più presso li stanno;
136 Democrito che 'l mondo a caso pone,
137 Diogenès, Anassagora e Tale,

- 110 七つの門をこの賢者たちともに私はくぐって、
111 みずみずしい緑の草原にたどり着いた。
112 そこには悠然として厳かな目をした人々がいた。
113 彼らの姿形には威厳が溢れ、
114 ゆったりと話す彼らの声は優しく穏やかだった。
115 それから私たちは一方の側に移動し、
117 全員を見渡すことができるよう、
116 見通しのよい、光に溢れた、一段高い場所に立った。
118 向こうに相対して、一面つややかに輝く緑の上にいる、
119 大いなる精神たちが私に指し示されたが、
120 彼らを見ただけで、私は身内が熱くなるのを感じた。
121 私は多くの子孫を引き連れたエーレクトラーを目にした。
122 その供たちの中に、ヘクトールやアエネーアース、そして
123 射貫くような目をした將軍カエサル^{いぬ}のいるのが判った。
124 カミッラやペンテシレイアを目にした。
125 別なところには、ラティーンヌス王が娘の
126 ラウイーニアとともに座っているのが見えた。
127 （傲岸不遜王）タルクイニウスを追い払ったブルトゥスや、
128 ルクレティア、ユーリア、マルキア、コルネーリア、
129 そして離れて一人きりのサラディンも見えた。
130 眼を少し上に上げると、
132 哲学の家族の中に知者たちの巨匠
131 [アリストテレス] が座っているのが見えた。
133 全員が賛嘆の面もちで彼を見つめ、全員が彼に誉れを注いでいた。
134 その人々の中に私はソークラテースやプラトーンを目にした。
135 この二人は、他の誰よりも前にあって、彼の一番近くにいた。
136 世界の偶成を説いたデーモクリトス、
137 デイオゲネース、アナクサゴラス、タレース、

138 Empedoclès, Eraclito e Zenone;
139 e vidi il buono acciglitòr del quale,
140 Diascòride dico; e vidi Orfeo,
141 Tullio e Lino e Seneca morale;
142 Euclide geomètra e Tolomeo,
143 Ipocràte, Avicenna e Galieno,
144 Averois, che 'l gran comento féo.
145 Io non posso ritrar di tutti a pieno,
146 però che sì mi caccia il lungo tema,
147 che molte volte al fatto il dir vien meno.

148 La sesta compagnia in due si scema:
149 per altra via mi mena il savio duca,
150 fuor de la queta, ne l'aura che trema;
151 E vegno in parte ove non è che luca.

- 138 エンペドクレース、ヘーラクレイトス、ゼーノーシ、
139 そして薬草の特性をよく調べ上げた分類家、
140 すなわちディオスコリデースが見えた。また、オルフェウス、
141 キケロー、リノス、道徳家のセネカを目にした。
142 幾何学者のエウクレイデース〔ユークリッド〕とプトレマイオス、
143 ヒッポクラテース、アヴィケンナ〔イブン・スィナー〕、ガレーノス、
144 偉大な注釈を施したアヴェロエス〔イブン・ルシュド〕を見た。
145 だが、こうした人々すべてについて存分に述べる余裕はない。
146 扱う主題の多さにせき立てられるあまり、
147 出来事に幾度も言葉足らずにならざるを得ないのだ。
- 148 六人の仲間は二人だけになった。
149 賢き導者〔ウェルギリウス〕は新しい別の道を通して、静寂の大気から
150 外へ出て、溜息で打ち震える大気の中へと私を導いた。
151 そして再び、私は、光を放つものが何もない場所へとやって来た。

CANTO V

1 Così discesi del cerchio primaio
2 giù nel secondo, che men loco cinghia
3 e tanto più dolor, che punge a guaio.
4 Stavvi Minòs orribilmente, e ringhia:
5 essamina le colpe ne l'intrata;
6 giudica e manda secondo ch'avvinghia.
7 Dico che quando l'anima mal nata
8 li vien dinanzi, tutta si confessa;
9 e quel conoscitor de le peccata
10 vede qual loco d'inferno è da essa;
11 cignesi con la coda tante volte
12 quantunque gradi vuol che giù sia messa.
13 Sempre dinanzi a lui ne stanno molte:
14 vanno a vicenda ciascuna al giudizio,
15 dicono e odono, e poi son giù volte.
16 “O tu che vieni al doloroso ospizio”,
17 disse Minòs a me quando mi vide,
18 lasciando l'atto di cotanto offizio,
19 “guarda com' entri e di cui tu ti fide;
20 non t'inganni l'ampiezza de l'intrare!”.
21 E 'l duca mio a lui: “Perché pur gride?
22 Non impedir lo suo fatale andare:
23 vuolsi così colà dove si puote
24 ciò che si vuole, e più non dimandare”.
25 Or incomincian le dolenti note

第5歌

- 1 かくして私は第一の圏から、下の第二の圏へと降りた。
2 それが取り巻く空間は、第一圏よりも小さいが、
3 苦痛は遙かに大きく、（人々に）悲鳴を上げさせるほどであった。
4 そこでは身の毛もよだつミーノースが、牙をむき出して吼^ほえていた。
5 ミーノースは入り口で（魂たちの）罪を検査し、
6 判決を下し、巻き付く回数に応じて（圏へと）送り込む。
7 つまり、悪しく生まれた魂は
8 このミーノースの前にやって来ると、余すことなく罪を白状するが、
9 罪に通曉するこの裁判官は、
10 地獄のどの圏がその魂にふさわしいかを見て取り、
11 その魂が落ちてゆくべき段と同じ数だけ、
12 自身の尾を自らの身体に巻き付ける。
13 ミーノースの前には、常に、大勢の者たちが群れなし、
14 一人また一人と順番に裁判にかけられてゆく。
15 （罪を）告白すると同時に（判決を）聴き、深淵へと向かう。
16 「おお、苦患^{くげん}の宿にやって来たおまえよ」
17 ミーノースは私を目にすると、
18 重大な職務の遂行を中断して、私に言った。
19 「気を付けろ、おまえがどうやって入り込んでいるか、
20 誰を頼みにしている。門の広さに惑わされるな。」
21 すると、わが導師はミーノースに言った、「なぜ空しく声を荒げる。
22 運命によって進む道を邪魔だてするな。
23 望まれることすべてが可能となるところ〔至高天〕で、
24 このように望まれているのだ。これ以上、尋ねるな。」
25 今や、再び苦患^{くげん}の調べが私の耳に

26 a farmisi sentire; or son venuto
27 là dove molto pianto mi percuote.
28 Io venni in loco d'ogne luce muto,
29 che mugghia come fa mar per tempesta,
30 se da contrari venti è combattuto.
31 La bufera infernal, che mai non resta,
32 mena li spirti con la sua rapina;
33 voltando e percotendo li molesta.
34 Quando giungon davanti a la ruina,
35 quivi le strida, il compianto, il lamento;
36 bestemmian quivi la virtù divina.
37 Intesi ch'a così fatto tormento
38 enno dannati i peccator carnali,
39 che la ragion sommettono al talento.
40 E come li stornei ne portan l'ali
41 nel freddo tempo, a schiera larga e piena,
42 così quel fiato li spiriti mali
43 di qua, di là, di giù, di sù li mena;
44 nulla speranza li conforta mai,
45 non che di posa, ma di minor pena.
46 E come i gru van cantando lor lai,
47 facendo in aere di sé lunga riga,
48 così vid' io venir, traendo guai,
49 ombre portate da la detta briga;
50 per ch'ì dissi: "Maestro, chi son quelle
51 genti che l'aura nera sì gastiga?".
52 "La prima di color di cui novelle
53 tu vuo' saper", mi disse quelli allotta,

- 26 聞こえ始めた。今や私は、膨大な嘆き声が
27 私を打つところへとやって来た。
28 あらゆる光が沈黙する場所へ、
30 嵐の海が相反する風に叩きつけられてうなりをあげるように、
29 ^{ほうこう}咆哮する場所へと私は着いた。
31 永遠に休むことなく吹きすさぶ地獄の暴風は、
32 霊たちを荒々しく拉し去り、（あらゆる方向へ）ぐるぐると
33 旋回させては互いにぶつけ合わせて、霊たちを苦しめていた。
34 その破滅の渦を前にすると、魂たちは
35 その瞬間、阿鼻^あ叫喚^{びきょうかん}の叫び、泣き声、嘆きをあげ、
36 その時、神の権能を呪うのだった。
37 私には判った、このような烈しい責め苦に遭っているのは、
39 理性を愛欲の下に従属させて〔理性が愛欲に打ち負かされて〕、
38 肉欲の罪を犯した者たちであると。
41 寒い季節、空一面に広がり、群なす
40 ^{むくどり}掠鳥^{むくどり}たちを、翼が運ぶように、
42 ^{あやま}過^{あやま}てる霊たちを、その烈風は
43 あちらこちら、上へ下へと運び去っていた。
45 休息どころか、呵責^{かしやく}の軽減も、
44 いかなる希望も、彼らを慰めることは決してない。
46 鶴たちが哀歌を歌いつつ、
47 空に長く一筋の列をなして飛んでいくように、
48 あの苦悶の疾風に運ばれて、幾つかの魂が
49 嘆き声を発しながらやって来るのを見た。
50 それで私は尋ねた、「師よ、漆黒^{ひょうふう}の颯風^{ひょうふう}によってこのように
51 ^{さいな}苛^{さいな}まれているあの人々は誰ですか。」
53 すると、師は私に言った、「おまえが話を聞きたがっている
52 あの、群の先頭に行く魂は、かつて

54 “fu imperadrice di molte favelle.
55 A vizio di lussuria fu sì rotta,
56 che libito fé licito in sua legge,
57 per tòrre il biasmo in che era condotta.
58 Ell’ è Semiramìs, di cui si legge
59 che succedette a Nino e fu sua sposa:
60 tenne la terra che ’l Soldan corregge.
61 L’altra è colei che s’ancise amorosa,
62 e ruppe fede al cener di Sicheo;
63 poi è Cleopatràs lussuriosa.
64 Elena vedi, per cui tanto reo
65 tempo si volse, e vedi ’l grande Achille,
66 che con amore al fine combatteo.
67 Vedi Parìs, Tristano”; e più di melle
68 ombre mostrommi e nominommi a dito,
69 ch’amor di nostra vita dipartille.
70 Poscia ch’io ebbi ’l mio dottore udito
71 nomar le donne antiche e ’ cavalieri,
72 pietà mi giunse, e fui quasi smarrito.
73 I’ cominciai: “Poeta, volontieri
74 parlerei a quei due che ’nsieme vanno,
75 e paion sì al vento esser leggeri”.
76 Ed elli a me: “Vedrai quando saranno
77 più presso a noi; e tu allor li priega
78 per quello amor che i mena, ed ei verranno”.
79 Sì tosto come il vento a noi li piega,
80 mossi la voce: “O anime affannate,
81 venite a noi parlar, s’altri nol nega!”.

- 54 多くの言語を話す国〔バビロニア地方〕の女王だった。
- 55 情欲の虜となり果てたこの者は
- 56 各自が好きなことを行うは合法であると法に謳^{うた}った。
- 57 こうして自ら招いた世の非難を消そうとしたのだ。
- 58 彼女の名前はセミーラミスだ。物の本によれば、
- 59 彼女はニノス王の後であつたが、王の死後、その後を継ぎ、
- 60 今、スルタンが支配している地域を治めた。
- 61 次に見えるのは、愛ゆえに、自害した女性だ、
- 62 (夫) シュカエウスの遺灰に誓った操^{みさお}を破って。
- 63 その後にやって来るのは、愛欲のクレオパトラ。
- 64 ヘレネーも見えるだろう。彼女のために、長き禍難の
- 65 時が巡った。また、偉大なるアキレウスが見えよう。
- 66 彼も、最後には、愛と闘^{たお}って斃れた。
- 67 パリスやトリスタンも見える。」こうして師は、
- 68 千余の魂を私に指で示しては、愛がこの世から
- 69 引き離れた者たちの名前を私に語った。
- 70 博学の師が、古^{いにしえ}の貴女や騎士の名を
- 71 挙げるのを聞き終えると、
- 72 私は、憐憫の情に気圧されて、気を失わんばかりだった。
- 73 私は口を切った、「詩人よ、もしできることならば、
- 74 相離れずともに進み、風に対してかくも軽やかに見える
- 75 あの二人とぜひ話をしてみたいのですが。」
- 76 すると師は私に言った、「彼らが私たちの方へ近づいて来る時を
- 77 見はからって、その機に、懇願してみるがいい、
- 78 彼らを引いてゆくあの愛の名にかけて、彼らは来てくれよう。」
- 79 風が私たちの方へ曲がるやいなや、
- 80 私は声をかけた、「おお、苦患^{くげん}に苛^{さい}まれし魂たちよ、私たちと
- 81 話しに来てくれまいか。かの方〔神〕がお禁じにならないなら。」

82 Quali colombe dal disio chiamate
83 con l'ali alzate e ferme al dolce nido
84 vegnon per l'aere, dal voler portate;
85 cotali uscir de la schiera ov' è Dido,
86 a noi venendo per l'aere maligno,
87 sì forte fu l'affettüoso grido.
88 "O animal grazioso e benigno
89 che visitando vai per l'aere perso
90 noi che tignemmo il mondo di sanguigno,
91 se fosse amico il re de l'universo,
92 noi pregheremmo lui de la tua pace,
93 poi c'hai pietà del nostro mal perverso.
94 Di quel che udire e che parlar vi piace,
95 noi udiremo e parleremo a voi.
96 mentre che 'l vento, come fa, ci tace.
97 Siede la terra dove nata fui
98 su la marina dove 'l Po discende
99 per aver pace co' seguaci sui.
100 Amor, ch'al cor gentil ratto s'apprende,
101 prese costui de la bella persona
102 che mi fu tolta; e 'l modo ancor m'offende.
103 Amor, ch'a nullo amato amar perdona,
104 mi prese del costui piacer sì forte,
105 che, come vedi, ancor non m'abbandona.
106 Amor condusse noi ad una morte.
107 Cain attende chi a vita ci spense".
108 Queste parole da lor ci fuor porte.
109 Quand' io intesi quell' anime offense,

82 鳩たちは、（巢に残した雛鳥の）願望に呼ばれると、
83 翼を広げたまま羽ばたかず、大気の中をよぎって愛^{いと}おしい
84 巢へと、自らの意志に運ばれて［いとも軽やかに］向かうが、
85 ちょうどそのように、二人はディードーのいる群から離れ、
86 邪悪な「地獄の」大気をよぎって私たちのところへやって来た。
87 情愛を込めた呼び掛けはかくも強いものであった。
88 「おお、慈悲深い、生き身の方よ、
89 あなたは暗き^{しこん}紫紺の大気を通して、
90 現世を朱に染めた私たちを、優しくも、お訪ね下さいました。
93 私たちの道ならぬ罪に憐れみをかけて下さったのですから、
91 もし宇宙の王が私たちに好意をお寄せであったなら、
92 あなたの平安を願って、かの方に、お祈り致しますものを。
96 今、風が私たちに黙していますから、その間に、
94 あなた方がお聞きになり、お話しになりたいことを
95 私たちはお聞きし、あなた方にお話し致しましょう。
97 私が生まれた土地^{まち}は、ポー川が
99 供^{とも}のもの「支流」たちを引き連れ、平安を求めて
98 降りゆく「流れ込む」海^{ほとり}の辺に憩っております。
100 愛は、高貴な心に、たちまちのうちに点ずるもの、
101 恋^{ほむら}の炎は、私の美しい身体^{からだ}によって、この人を捉えたのです。
102 その身は奪い去られましたが、今もその激しい愛は私を貫いています。
103 愛は、愛される者が愛し返さぬことを許さぬもの。
104 私は、この人の悦びにかくも強く囚^{とら}われたあまり、
105 ご覧の如く、その愛は、今も私を捉えて放さないのです。
106 愛は、私たち二人を、同じ一つの死へと導きました。
107 カインは、私たちから命を消し去った者を待ち受けています。」
108 こうした言葉が、二人から、私たちに注がれた。
109 愛に圧倒され、苦しめられた魂たちの話を聞き終えると、

110 china' il viso, e tanto il tenni basso,
111 fin che 'l poeta mi disse: "Che pense?".
112 Quando rispuosi, cominciai: "Oh lasso,
113 quanti dolci pensier, quanto disio
114 menò costoro al doloroso passo!".
115 Poi mi rivolsi a loro e parla' io,
116 e cominciai: "Francesca, i tuoi martiri
117 a lagrimar mi fanno tristo e pio.
118 Ma dimmi: al tempo d'i dolci sospiri,
119 a che e come concedette amore
120 che conosceste i dubbiosi disiri?".
121 E quella a me: "Nessun maggior dolore
122 che ricordarsi del tempo felice
123 ne la miseria; e ciò sa 'l tuo dottore.
124 Ma s'a conoscer la prima radice
125 del nostro amor tu hai cotanto affetto,
126 dirò come colui che piange e dice.
127 Noi leggevamo un giorno per diletto
128 di Lancialotto come amor lo strinse;
129 soli eravamo e senza alcun sospetto.
130 Per più fiate li occhi ci sospinse
131 quella lettura, e scolorocci il viso;
132 ma solo un punto fu quel che ci vinse.
133 Quando leggemmo il disiato riso
134 esser basciato da cotanto amante,
135 questi, che mai da me non fia diviso,
136 la bocca mi basciò tutto tremante.
137 Galeotto fu 'l libro e chi lo scrisse:

- 110 私は目を伏せ、いつまでも、うつむいていた。
111 それでとうとう ^{ウエルギリウス}詩人 が口を切った、「何を想い悩んでいる。」
112 私は答えて言おうとした、「ああ、何ということでしょう。
113 言い知れぬ何と甘美な想いが、何という熱き願いが
114 二人を痛ましい道へと誘ってしまったのでしょうか！」
115 二人の方へ振り向き、今度は、私が話し始めた。
116 「フランチェスカよ、あなたの受けた苦しみは
117 私の心を悲しみと憐れみで包み、涙させます。
118 ですが、どうか教えて下さい。未だ甘い吐息を洩らしていた頃、
119 何をきっかけに、また、どのように、愛（神）に許されて、
120 互いの、確信なき不安な願いに気づいたのですか。」
121 すると、彼女は私に答えて言った、「惨めな時にあって、
122 ^{しあわせ}幸福の時を思い起こすことほど辛いことはございません。
123 それはあなたの師もよくご存じです。
124 しかし、私たちの愛の、最初のきっかけを
125それほどまでにお知りになりたいと願われるならば、
126泣きながら語る者のようにお話し致しましょう。
127ある日のこと、私たちは慰みにランスロットの物語を、
128どのように愛が彼を捕らえたかについて、読んでおりました、
129二人きり、どんな危惧も抱かずに。
130読み進むうち、その物語に誘われて、幾度となく私たちは
131眼と眼を交わし、そのたびに、顔色を変えましたが、
132あの刹那、ただあの一節が私たちを打ち負かしてしまったのです。
133恋人が、かくも深く愛し、かくも長く焦がれた、あの
134 ^え笑みこぼれる唇に、口づけする ^{くだり}条を読んだとき、
135私から永遠 ^{とわ}に離れることのない、この人は
136ふるえつつ私の唇に ^{くちづけ}接吻したのです。
137その本とその本の作者がガレオットでございました。

138 quel giorno più non vi leggemmo avante”.

139 Mentre che l'uno spirto questo disse,

140 l'altro piangëa; sì che di pietade

141 io venni men così com' io morisse.

142 E caddi come corpo morto cade.

138 その日、私たちは、もうそれ以上、先を読みませんでした。」

139 一方の魂が、このように、語る^ま間に

140 もう一方の魂は泣いていた。憐れみのあまり、

141 自分が死んでいくような気がした。私は意識を失い、

142 そして、死体がくずおれるように倒れた。

CANTO VI

1 Al tornar de la mente, che si chiuse
2 dinanzi a la pietà d'i due cognati,
3 che di trestizia tutto mi confuse,
4 novi tormenti e novi tormentati
5 mi veggio intorno, come ch'io mi mova,
6 e ch'io mi volga, e come che io guati.
7 Io sono al terzo cerchio, de la piovra
8 eterna, maladetta, fredda e greve;
9 regola e qualità mai non l'è nova.
10 Grandine grossa, acqua tinta e neve
11 per l'aere tenebroso si riversa;
12 pute la terra che questo riceve.
13 Cerbero, fiera crudele e diversa,
14 con tre gole caninamente latra
15 sovra la gente che quivi è sommersa.
16 Li occhi ha vermigli, la barba unta e atra,
17 e 'l ventre largo, e unghiate le mani;
18 graffia li spirti ed iscoia ed isquatra.
19 Urlar li fa la pioggia come cani;
20 de l'un de' lati fanno a l'altro schermo;
21 volgonsi spesso i miseri profani.
22 Quando ci scorse Cerbero, il gran vermo,
23 le bocche aperse e mostrocci le sanne;
24 non avea membro che tenesse fermo.
25 E 'l duca mio distese le sue spanne,

第6歌

- フランチェスカ　バオロ
2　義姉と義弟に対する憐憫の情が
3　私の心すべてを、悲しみでかき乱したために
1　閉じてしまった意識が戻ると、
4　どこに身を動かそうとも、どこを振り向いても、
5　どこに視線をやろうと、私の周りに見えるのは、
6　新たな責め苦と新たな責め苦に苦しむ者たちばかりだった。
7　私は今や第三の圏にいた。ここでは、(氷のように)
8　冷たく重い永劫の雨が、呪いの如く打ちつけ、
9　その規則性も量も決して変わることはない。
24　大粒の雹^{ひょう}、黒い雨と雪が、
25　暗黒の大気を通して降り注がれ、
26　それを受ける大地はひどい腐臭を放っている。
27　奇怪にも三つの頭が合体した獰猛な怪物ケルベロスが
15　ここに沈み込んだ者たちの上を
14　三つの喉で、犬の如く、吼^ほえたてる。
16　目は血走り、髭は黒く脂ぎって、
17　腹は大きく膨らみ、手の鉤爪^{かぎづめ}で
18　霊たちを引っ掻き、皮を剥ぎ、千々に引き裂く。
19　雨の痛打は、彼らを犬のように吼^ほえ喚^{わめ}かせ、
20　惨^{とくしん}めな瀆神者たちは、(泥濘^{でいねい}の上で) 雨を避けようと
21　一方の脇腹を下へ上へと変えて、絶え間なく、のたうち回っている。
22　ケルベロスは私たちに気がつくと、この巨大な蛆は
23　三つの口を開き、私たちに向けて牙をむき、その身体^{からだ}の
24　何一つとして(抑えがたい欲望に) 身震いせずにはいなかった。
25　ウエルギリウス^{ウエルギリウス}わが導き手は、両の手を伸ばして、

26 prese la terra, e con piene le pugna
27 la gittò dentro a le bramose canne.
28 Qual è quel cane ch'abbaiando agogna,
29 e si racqueta poi che 'l pasto morde,
30 ché solo a divorarlo intende e pugna,
31 cotai si fecer quelle facce lorde
32 de lo demonio Cerbero, che 'ntrona
33 l'anime sì, ch'esser vorrebber sorde.
34 Noi passavam su per l'ombre che adona
35 la greve pioggia, e ponavam le piante
36 sovra lor vanità che par persona.
37 Elle giacean per terra tutte quante,
38 fuor d'una ch'a seder si levò, ratto
39 ch'ella ci vide passarsi davante.
40 "O tu che se' per questo 'nferno tratto",
41 mi disse, "riconoscimi, se sai:
42 tu fosti, prima ch'io disfatto, fatto".
43 E io a lui: "L'angoscia che tu hai
44 forse ti tira fuor de la mia mente,
45 sì che non par ch'i' ti vedessi mai.
46 Ma dimmi chi tu se' ch' 'n sì dolente
47 loco se' messo, e hai sì fatta pena,
48 che, s'altra è maggio, nulla è sì spiacente".
49 Ed elli a me: "La tua città, ch'è piena
50 d'invidia sì che già trabocca il sacco,
51 seco mi tenne in la vita serena.
52 Voi cittadini mi chiamaste Ciacco:
53 per la dannosa colpa de la gola,

- 26 手のひらで土を^{すく}掘り取り、^{こぶし}両拳一杯の土を
27 飢えた三つの食道の中へと^{ほう}抛ってやった。
28 餌をせがんで吠える犬が、
30 餌にありつくと、ガツガツと夢中に
29 ^{むさぼ}貪って、静かになるように、
33 なれるものならつんぽになりたいと魂たちが願うほど
32 耳をつんざく悪魔ケルベロスの
31 三つの汚れた顔も、同じようになった。
34 私たちは、重い雨に（打たれて地面に）ねじ伏せられた
35 魂たちの上を通していった、肉体のように見える
36 彼らの虚ろな^{からだ}身体の上に足をのせながら。
37 魂たちはみな地面に横たえていたが、
39 一人の魂だけは、私たちがその前を通していくのを見るや、
38 突如、身をもたげて、座った。
40 「おお、この地獄の中を導かれてゆく君よ」と、
41 その魂は私に言った、「私が誰だか判るか、見覚えがあるはずだが。
42 私が死ぬ前に、君はすでに生まれていたのだから。」
43 それで、私は彼に答えた、「君の受ける苦痛で顔かたちが
44 変わったせいか、私には君が誰なのか判らない。
45 一度も会ったことがないように思える。
46 それで、君が誰なのか教えてくれないか、かくも痛ましい
47 場所に入れられ、かくもひどい目にあうとは。
48 更なる^{かしやく ほか}呵責が他にあるとしても、これほど不快な罰はない。」
49 すると、魂は私に言った、「君の街は、かくも嫉妬に満ちるあまり、
50 もはや限度を超えて溢れ出さんばかりだが、
51 私の^{はぐく}晴朗な人生を育んだのもその街^{まち}〔フィレンツェ〕だ。
52 私は、君ら市民がチャッコと呼んでいた者だ。
53 食悦の大罪によって地獄に^お堕ち、

54 come tu vedi, a la pioggia mi fiacco.
55 E io anima trista non son sola,
56 ché tutte queste a simil pena stanno
57 per simil colpa". E più non fé parola.
58 Io li rispuosi: "Ciaccio, il tuo affanno
59 mi pesa sì, ch'a lagrimar mi 'nvita;
60 ma dimmi, se tu sai, a che verranno
61 li cittadin de la città partita;
62 s'alcun v'è giusto; e dimmi la cagione
63 per che l'ha tanta discordia assalita".
64 E quelli a me: "Dopo lunga tencione
65 verranno al sangue, e la parte selvaggia
66 cacerà l'altra con molta offensione.
67 Poi appresso convien che questa caggia
68 infra tre soli, e che l'altra sormonti
69 con la forza di tal che testé piaggia.
70 Alte terrà lungo tempo le fronti,
71 tenendo l'altra sotto gravi pesi,
72 come che di ciò pianga o che n'aonti.
73 Giusti son due, e non vi sono intesi;
74 superbia, invidia e avarizia sono
75 le tre faville c'hanno i cuori accesi".
76 Qui puose fine al lagrimabil suono.
77 E io a lui: "Ancor vo' che mi 'nsegni
78 e che di più parlar mi facci dono.
79 Farinata e 'l Tegghiaio, che fuor sì degni,
80 Iacopo Rusticucci, Arrigo e 'l Mosca
81 e li altri ch'a ben far puoser li 'ngegni,

- 54 見ての通り、雨に打たれ、地に^{しお}萎れてる。
- 55 この惨めな憂き目にあっている魂は、私だけではない。
- 56 ここにいる者たちはみな同じ罪を犯したために、
- 57 同じ罰を受けている。」こう言うと、口をつぐんで話すのを止めた。
- 58 私は答えて言った、「チャッコ、君の受ける苦しみが
- 59 私の心を重く^{あつ}圧するあまり、私を涙へと誘う。
- 60 だが、もし知っているなら、教えてくれ、
- 62 派閥に分裂したその街の^{まち}市民たちがこの先どうなるのか。
- 62 また、正しき人が誰かいるのかどうかを、そして、いかなる原因に
- 63 よってかくも大きな不和が街を襲ったのかを。」
- 64 するとチャッコは私に言った、「長い^{いさか}静いの後、
- 65 血を見ることになるだろう。そして、田舎者の党〔白派〕が
- 66 行き過ぎた損害を与えて、一方の党〔黒派〕を追い払う。
- 67 そこから必然的に、今から三年も経たずして、
- 68 白派は没し、黒派が昇ってくるだろう、
- 69 今、巧みに天秤載せをしている者〔ボニファーティウス八世〕の
- 71 威を借りて。黒派は、白派に^{くびき}重き軛をかけて、
- 70 長きの間、^ず頭を高くして支配権をふりかざすだろう、
- 72 白派の者たちがどれほどその重荷に^{ひ ふんこうがい}悲憤慷慨しようとも。
- 73 正しき者は二人しかおらず、その地で彼らに耳を傾ける者はいない。
- 74 高慢、嫉妬、貪欲、これらが
- 75 人心に（不和の）火を付けた三つの火花だ。」
- 76 こう言って、チャッコは痛ましい響き〔言葉〕を閉じた。
- 77 私は彼に言った、「まだ教えてもらいたいことがある。
- 78 もっと言葉の恩恵を私に授けてはくれないか。
- 79 （市民として）大いなる称賛に値したファリナータやテグギアーヨ、
- 81 また、自らの才を善政へと傾けたヤーコボ・ルスティクッチや、
- 80 アッリーゴとモスカ、その他の者たちは

82 dimmi ove sono e fa ch'io li conosca;
83 ché gran disio mi stringe di sapere
84 se 'l ciel li addolcia o lo 'nferno li attosca".
85 E quelli: "Ei son tra l'anime più nere;
86 diverse colpe giù li grava al fondo:
87 se tanto scendi, là i potrai vedere.
88 Ma quando tu sarai nel dolce mondo,
89 priegoti ch'a la mente altrui mi rechi:
90 più non ti dico e più non ti rispondo".
91 Li diritti occhi torse allora in biechi;
92 guardommi un poco e poi chinò la testa:
93 cadde con essa a par de li altri ciechi.
94 E 'l duca disse a me: "Più non si desta
95 di qua dal suon de l'angelica tromba,
96 quando verrà la nimica podesta:
97 ciascun rivederà la trista tomba,
98 ripiglierà sua carne e sua figura,
99 udirà quel ch'in eterno rimbomba".
100 Sì trapassammo per sozzo mistura
101 de l'ombre e de la pioggia, a passi lenti,
102 toccando un poco la vita futura;
103 per ch'io dissi: "Maestro, esti tormenti
104 crescerann' ei dopo la gran sentenza,
105 o fier minori, o saran sì cocenti?".
106 Ed elli a me: "Ritorna a tua scienza,
107 che vuol, quanto la cosa è più perfetta,
108 più senta il bene, e così la doglienza.
109 Tutto che questa gente maladetta

- 82 今どこにいるのか、彼らの運命を私に知らせてくれないか。
84 彼らを天が甘美に包んでいるのか、それとも地獄の毒気が彼らを
83 苦しめているのか、知りたくて胸が締め付けられる思いがするのだ。」
85 チャッコは言った、「彼らはもっと黒く汚れた魂たちの中にいる。
86 異なる罪が彼らを下へ^お圧して、底へと引き落とすからだ。
87 もっと下へ降りたならば、そこで彼らを目にするだろう。
88 ところで、もし君があのだ甘美な世界〔地上〕へ帰り着いたなら、
89 どうか、他の者たちの記憶の中に私を連れ戻して欲しい。
90 もうこれ以上、私は話しも答えもしない。」
91 それまで（下から上へと）まっすぐ私を見ていた視線は傾斜した。
92 すがめつつしばらく私を見つめたかと思うと、やがて頭を垂れ、
93 他の盲目の魂たちと同じ高さ〔泥土〕に、頭ともども倒れ込んだ。
96 すると導師は私に言った、「もはや彼はふたたび起き上がることはない、
95 天使の喇叭が鳴り響くまでは。
94 その時、（悪に）敵対する^{キリスト}審判者がやって来ると、
97 各人は惨めな墓を見つけ、
98 自身の肉体と自身の姿形をふたたびまとして、
99 永遠に鳴り渡るあの（最終）判決を聞くことになるのだ。」
101 こうして、私たちは、魂たちと雨とが汚く混じり合った中を
100 越えて進んだ。遅々とした足取りで、
102 しばしの間、死後の（魂の）生〔運命〕について触れながら。
103 それで私は言った、「師よ、この責め苦は
104 最後の審判の後、増大するのでしょうか、小さくなるのでしょうか、
105 それとも変わらず烈しいままなのでしょうか。」
106 すると師は私に言った、「おまえの学問に帰れ、それが証^{あか}すように、
107 事物は完全になればなるほど、それに比例して
108 （天国では）善を感じ、また（地獄では）懊惱^{おのう}を感じるのだ。
109 この呪われし者たちは、（至福者におけるような）真の意味での完成

110 in vera perfezion già mai non vada,

111 di là più che di qua essere aspetta”.

112 Noi aggirammo a tondo quella strada,

113 parlando più assai ch’i non ridico;

114 venimmo al punto dove si digrada:

115 quivi trovammo Pluto, il gran nemico.

110 には決して到達しえないが、（同じく）審判の後に、より（十全な）
111 存在を待ち受けるのであるから、受苦も最大となる。」

112 私たちは円周をなす道を辿りながら、
113 ずいぶんと話したが、今は語らぬことにしよう。
114 やがて、私たちは下へと降りてゆく地点に達したが、
115 そこには大いなる敵、プルーターが待ち受けていた。

CANTO VII

- 1 *“Pape Satàn, pape Satàn, aleppe!”*
2 cominciò Pluto con la voce chioccia;
3 e quel savio gentil, che tutto seppe,
4 disse per confortarmi: “Non ti nocchia
5 la tua paura; ché, poder ch’elli abbia,
6 non ci torrà lo scender questa roccia”.
7 Poi si rivolse a quella ’nfiata labbia,
8 e disse: “Taci, maledetto lupo!
9 consuma dentro te con la tua rabbia.
10 Non è senza cagion l’andare al cupo:
11 vuolsi ne l’alto, là dove Michele
12 fé la vendetta del superbo strupo”.
13 Quali dal vento le gonfiate vele
14 caggion avvolte, poi che l’alber fiacca,
15 tal cadde a terra la fiera crudele.
16 Così scendemmo ne la quarta lacca,
17 pigliando più de la dolente ripa.
18 che ’l mal de l’universo tutto insacca.
- 19 Ahi giustizia di Dio! tante chi stipa
20 nove travaglie e pene quant’ io viddi?
21 e perché nostra colpa sì ne scipa?
- 22 Come fa l’onda là sovra Cariddi,
23 che si frange con quella in cui s’intoppa,

第7歌

- 1 「パペ・サタン、パペ・サタン、アレッペ」
2 プルートーは^{しわが}嘆れた声で話し始めた。
3 すると、すべてを了解した優しき賢者は
4 私を励まして言った、「自身の恐怖で自分を損なうでない。
5 この者がいかなる力を備えようと、
6 われらがこの懸崖^{けんがい}を降りる邪魔立てなどできるはずはない。」
7 それから、あの膨れあがった唇に向かって
8 言った、「静まれ、^い忌まわしい狼よ！
9 自分の怒りで自分の心を焦^こがすがいい。
10 私たちが深淵へと行くは、理由^{わけ}あつてのことだ。
11 高きところでそのように望まれている。そこは、おまえたちが高慢にも
12 神に暴行を働いた報いに大天使ミカエルが^{てんちゆう}天誅を下された場所だ。」
13 風で満々と膨れあがった帆が、
14 船のマストの折れるや、^{しほ}萎んで^{から}絡み落ちてくるように
15 その残忍な獣「プルートー」は地面に倒れた。
16 かくて私たちは第四の窟^くみ^{けんがい}「圏」に降り、
17 苦患^{くげん}の懸崖^{けんがい}をさらに下へ
18 宇宙のすべての悪を集めた袋の中へ入って行った。
- 19 ああ、神の正義よ！ いったい誰がかくも集め得よう、
20 私が眼にしたほど多くの、かつてない苦悶と責め苦を？
21 なぜ、われわれは罪によって、かくも損なわれるのか？
- 22 メッシーナ海峡のカリュブデイスでは、波と波とがぶつかり合って
23 砕けるが、そこで生じる渦巻さながら

24 così convien che qui la gente riddi.
25 Qui vid' i' gente più ch'altrove troppa,
26 e d'una parte e d'altra, con grand' urli,
27 voltando pesi per forza di poppa.
28 Percotéansi 'ncontro; e poscia pur lì
29 si rivolgea ciascun, voltando a retro,
30 gridando: "Perché tieni?" e "Perché burli?".
31 Così tornavan per lo cerchio tetro
32 da ogne mano a l'oppòsito punto,
33 gridandosi anche loro ontoso metro;
34 poi si volgea ciascun, quand' era giunto,
35 per lo suo mezzo cerchio a l'altra giostra.
36 E io, ch'avea lo cor quasi compunto,
37 dissi : "Maestro mio, or mi dimostra
38 che gente è questa, e se tutti fuor cherchi
39 questi chercuti a la sinistra nostra".
40 Ed elli a me : "Tutti quanti fuor guerci
41 sì de la mente in la vita primaia,
42 che con misura nullo spendio ferci.
43 Assai la voce lor chiaro l'abbaia,
44 quando vegnono a' due punti del cerchio
45 dove colpa contraria li dispaia.
46 Questi fuor cherchi, che non han coperchio
47 Piloso al capo, e papi e cardinali,
48 in cui usa avarizia il suo soperchio."
49 E io : "Maestro, tra questi cotali
50 dovre' io ben riconoscere alcuni
51 che furo immondi di cotesti mali".

- 24 ここの者たちも、円〔渦〕を描きながら踊らされている。
- 25 他の圏よりも遙かに多くの人々がここににいるのに気づいた。
- 26 彼らは、一方の側からと他方の側から、大きな叫び声をあげ、
- 27 胸を押し当て、重りを転がしていた。
- 28 両側から互いに進み来て、一点でぶつかり合うと、
- 29 各自は向きを変え、後ろに重りを転がしながら
- 30 罵声^{ばせい}を浴びせあうのだった、「なぜ貯める?」「なぜ棄てる?」と。
- 31 このようにして彼らは、暗鬱とした円〔圏〕に沿い
- 32 両方の側から互いに対蹠点^{たいしよ}まで戻っていく、
- 33 罵りあいの繰り言^{リトルネツロ}をふたたび叫びながら。
- 34 やがて対蹠点^{たいしよ}に着くと、各自は踵を返して、
- 35 半円を描きながら、再度、馬上槍試合〔反対の衝突点〕へと向かう。
- 36 （この光景に）胸を痛めた私は
- 37 尋ねた、「師よ、どうか説明して下さい、
- 38 ここにいる人々は誰なのですか、左手にいる
- 39 この坊主頭の者たちはみな聖職者なのですか。」
- 40 すると師は私に答えて言った、「ここににいる者はみな
- 41 現世にあったとき、心がひどく歪んでいたため、
- 42 節度〔中庸〕をもって金を使うことができなかった。
- 43 彼らは互いに正反対の罪によって圏の二点で
- 44 二つに分かたれているが、その分岐点にやって来たとき
- 43 発していた彼らの吠え声から、そのことがはっきりと
- 46 判ただろう。頭に毛の覆いのないこの者たちは
- 47 みな聖職者だ、法王や枢機卿たちもいる。
- 48 こうした者たちの間でこそ、貪欲はその極みに達するのだ。」
- 49 それで私は言った、「師よ、この連中の中で
- 51 こうした悪に染まって穢^{けが}れた者の
- 50 何人かは、私にもはっきりと見分けがつくはずです。」

52 Ed elli a me : “Vano pensiero aduni:
53 la sconoscente vita che i fé sozzi,
54 ad ogne conoscenza or li fa bruni.
55 In etterno verranno a li due cozzi:
56 questi resurgeranno del sepulcro
57 col pugno chiuso, e questi coi crin mozzi.
58 Mal dare e mal tener lo mondo pulcro
59 ha tolto loro, e posti a questa zuffa:
60 qual ella sia, parole non ci appulcro.
61 Or puoi, figliuol, veder la corta buffa
62 d'i ben che son commessi a la fortuna,
63 per che l'umana gente si rabuffa;
64 ché tutto l'oro ch'è sotto la luna
65 e che già fu, di quest' anime stanche
66 non potrebbe farne posare una”.
67 “Maestro mio”, diss' io, “or mi di anche:
68 questa fortuna di che tu mi tocche,
69 che è, che i ben del mondo ha sì tra branche?”.
70 E quelli a me : “Oh creature sciocche,
71 quanta ignoranza è quella che v'offende!
72 Or vo' che tu mia sentenza ne 'mbocche.
73 Colui lo cui saver tutto trascende,
74 Fece li cieli e diè lor chi conduce
75 sì, ch'ogne parte ad ogne parte splende,
76 distribuendo igualmente la luce.
77 Similemente a li splendor mondani
78 ordinò general ministra e duce
79 che permutasse a tempo li ben vani

- 52 すると師は私に言った、「そのようなことを考えても無駄だ。
53 （金銭に）見境のない生活が、生前、彼らを黒く汚したように、
54 今ではどんな見分けもつかないほどに、彼らを黒く塗り潰している
55 からだ。この者たちは永遠に二つの点でぶつかり合う。
56 そして（最後の審判の日に）墓から蘇るだろう、
57 一方は拳を固く握りしめ、他方は髪を剃り取られて。
58 不正に投げ与え、不正に貯め込んだために、至上の美の世界〔天国〕を
59 取り上げられ、こうして角突き合う羽目になったのだ。
60 その喧嘩がどのようなものか美辞を添えても、浪費となるだけだ。
61 ^{フォルトゥーナ}偶 運 の手に握られている富が、いかに
62 束の間の戯れ〔風のそよぎ〕に過ぎぬか、今や、息子よ、
63 判つたろう、人間は富をめぐるかくも争いあいを演じる。
64 月下の領域〔地上〕にある、過去と現在
65 すべての黄金〔富〕も、この疲れた魂たちの
66 ただの一人にさえ、安らぎを与えることはできぬからだ。」
67 「わが師よ」と私は言った、「もっとお教え下さい、
68 今お触れになったこのフォルトゥーナとは何ですか、
69 現世の善を、このようにそのかぎ爪に収めているものとは？」
70 すると師は私に言った、「おお、愚かな生き物たちよ、
71 汝ら人間は、なんという無知蒙昧に損なわれていることか！
72 さあ、私の説明をよく咀嚼^{そしやく}して食べるがよい。
73 すべてを超越し、すべてをみそなわすかの方〔神〕が
74 諸天をお造りになり、各天にそれを導く者〔天使〕を任命された。
75 かくて天の各部分〔各天使〕はそれぞれ自身の部分〔天球〕
76 を輝かせ、（応分の）光を一様に分かち与える。
77 それと同様に、地上の輝き〔地上善〕に対して
78 それを導き統べる管理^す者を、かの方〔神〕が据え給うたのだ。
79 彼女は、然るべき時に、空しき（地上）善を

80 di gente in gente e d'uno in altro sangue,
81 oltre la difension d'i senni umani;
82 per ch'una gente impera e l'altra langue,
83 seguendo lo giudicio di costei,
84 che è occulto come in erba l'angue.
85 Vostro saver non ha contasto a lei:
86 Questa provvede, giudica, e persegue
87 suo regno come il loro li altri dèi.
88 Le sue premutazion non hanno triegue:
89 necessità la fa esser veloce;
90 sì spesso vien chi vicenda consegue.
91 Quest' è colei ch'è tanto posta in croce
92 pur da color che le dovrien dar lode,
93 dandole biasmo a torto e mala voce;
94 ma ella s'è beata e ciò non ode:
95 con l'altre prime creature lieta
96 volge sua spera e beata si gode.
97 Or discendiamo omai a maggior pieta;
98 già ognè stella cade che saliva
99 quand' io mi mossi, e 'l troppo star si vieta".

100 Noi ricidemmo il cerchio a l'altra riva
101 sovr' una fonte che bolle e riversa
102 per un fossato che da lei deriva.
103 L'acqua era buia assai più che persa;
104 e noi, in compagnia de l'onde bige,
105 intrammo giù per una via diversa.
106 In la palude va c'ha nome Stige

80 民から民へ、一族から一族へと移し替える、
81 それに^{あらが}抗う人間の思慮を踏み越えて。
82 その結果、彼女の裁量に従って、
82 ある者たちが栄え、ある者たちは萎れるが、その裁決は、
84 草むらに潜む蛇のように、（人間の目には）隠されている。
85 汝らの知で、彼女の邪魔立てなどではせぬ。
87 彼女は、他の神的存在〔天使たち〕が自身の職務に専心する如く、
86 先を見越して手はずを整え、判決を下し、勅令を施行する
88 彼女は休みなく移り変わるが、
89 それは、素早くある以外には存在し得ないからだ。
90 有為^{ういてんべん}転変を経験する者が、かくも多いのはこのためである。
91 これが謂^{いわ}れなく呪詛^{じゅそ}されている《運》という女性だ。
92 本来なら彼女を褒め称えて然るべき人たちからさえも、
93 不当に^{とが}咎められ、汚名を着せられている。
94 だが、彼女は至福に浴し、怨嗟^{えんさ}の声を耳にすることもない。
95 他の最初の被造物〔天使〕たちと共に、喜ばしげに
96 自身の球を巡らし、至福の中で自らの幸を楽しんでいる。
97 さあ、今や更なる憐れみを催すところへと降りゆこう。
98 私が歩みを始めた時、昇りつつあったすべての星が
99 すでに沈み始めた。長居は許されぬ。」

100 私たちは圏を横切り、向こう岸〔端〕の
101 湧き立つ泉のほとりにたどり着いた。泉から水が
102 溢れ、溝の中へと流れ込む。
103 水は紫紺^{しこん}よりも遙かに暗かった。
104 私たちは、黒く濁ったその水の流れに沿って
105 降り、道ならぬ道へと分け入った。
106 この陰鬱な溪流は、邪悪な〔地獄の〕灰色の崖を

107 questo tristo ruscel, qunad' è disceso
108 al piè de le maligne piagge grige.
109 E io, che di mirare stava inteso,
110 vidi genti fangose in quel pantano,
111 ignude tutte, con sembiante offeso.
112 Queste si percotean non pur con mano,
113 ma con la testa e col petto e coi piedi,
114 troncandosi co' denti a brano a brano.
115 Lo buon maestro disse: "Figlio, or vedi
116 l'anime di color cui vinse l'ira;
117 e anche vo' che tu per certo credi
118 che sotto l'acqua è gente che sospira,
119 e fanno pullular quest' acqua al summo,
120 come l'occhio ti dice, u' che s'aggira.
121 Fitti nel limo dicon: «Tristi fummo
122 ne l'aere dolce che dal sol s'allegra,
123 portando dentro accidioso fummo:
124 or ci attristiam ne la belletta negra».
125 Quest' inno si gorgolian ne la strozza,
126 ché dir nol posson con parola intègra".
127 Così girammo de la lorda pozza
128 grand' arco, tra la ripa secca e 'l mézzo,
129 con li occhi vòlti a chi del fango ignozza.
130 Venimmo al piè d'una torre al da sezzo.

- 107 流れ落ち、その麓で
108 ステュックスという名の沼となっている。
109 私が驚嘆しながらその沼をじっと眺めていると、
110 その中に泥まみれの人々が見えた。
111 みな真っ裸で、顔には怒氣^{どき}が溢れている。
112 この者たちは、手で殴り合うだけでは飽き足らず、
113 頭突き、足蹴り、胸でぶつかりあい、
114 歯で相手を一片また一片と噛みちぎっていた。
115 優れた師は言った、「息子よ、今おまえが見ているのは、
116 怒情に打ち負かされた者たちの魂だ。
117 また、おまえに疑念なく信じてもらいたいのは、
118 この水面の下にも溜息をついている者たちがいるということだ。
119 そのため、どこを向いても、目がおまえに教えてくれるように、
120 水面にあぶくが立っている。
121 沼底の泥の中に打ち込まれ、彼らはこう発している。『俺たちの心は
122 いつも鬱^{ふさ}いでいた。陽光を受けて、喜びにわく甘美な大気の中に
123 あっても、心中、鬱怒^{うつど}の煙^{くすぶ}が燻っていた。
124 それで今も、黒い泥濘^{でいねい}の中で、鬱々としている』と。
125 彼らがこうした連禱^{れんとう}を喉の中でブクブクと唱えるのも、
126 言葉をはっきりとまるまる話すことができぬためだ。」
127 こうして、泥を呑み込む者たちに目を向けながら、
128 私たちは乾いた崖と泥沼の間を歩んだ。
129 汚濁^{おだく}の沼が描く広大な円弧を廻るうち、
130 やがて、とある塔の下に行き当たった。

CANTO VIII

1 Io dico, seguitando, ch'assai prima
2 che noi fossimo al piè de l'alta torre,
3 li occhi nostri n'andar suso a la cima
4 per due fiammette che i vedemmo porre,
5 e un'altra da lungi render cenno,
6 tanto ch'a pena il poeta l'occhio tòrre.
7 E io mi volsi al mar di tutto 'l senno;
8 dissi: "Questo che dice? e che risponde
9 quell' altro foco? e chi son quei che 'l fenno?".
10 Ed elli a me: "Su per le sucide onde
11 già scorgere puoi quello che s'aspetta,
12 se 'l fummo del pantan nol ti nasconde".
13 Corda non pinse mai da sé saetta,
14 che sì corresse via per l'aere snella,
15 com' io vidi una nave piccioletta
16 venir per l'acqua verso noi in quella,
17 sotto 'l governo d'un sol galeoto,
18 che gridava: "Or se' giunta, anima fella!".
19 "Flegiàs, Flegiàs, tu gridi a vòto",
20 disse lo mio signore, "a questa volta:
21 più non ci avrai che sol passando il lóto".
22 Qual è colui che grande inganno ascolta
23 che li sia fatto, e poi se ne rammarca,
24 fecesi Flegiàs ne l'ira accolta.
25 Lo duca mio discese ne la barca,

第8歌

- 1 話の続きを語ろう。
2 高き塔の下に着くかなり前のこと、
3 私たちの眼は、上に、塔の頂きへと注がれた。
4 というのも、そこに赤々とした炎が二つ灯されると、
6 目でやっと識別できるほど遙か遠くから、
5 もう一つの炎が、その明かりに合図を返すのを目にしたからである。
7 それで私は、全知の大海（とでも言うべき師）に向かって
8 言った、「この灯りは何を意味するのですか？向こうの火は何と
9 応^{こた}えているのですか？一体この合図を交わしたのは何者なのですか？」
10 すると師は私に答えて言った、「濁った水の上を、合図を
11 受けた者がやって来るのが、おまえにも、もうじき判るはずだ、
12 沼を覆う靄^もがその姿を隠しさえしなければ。」
13 弓^{ゆづる}弦から解き放たれた矢でも
14 決してこれほど速く大気を横^{よぎ}切ったためしはなかった、
15 その時、私の眼にした小さな船が水面を横^{よぎ}切って
16 私たちへと向かって来るほどには。
17 船を操っていたのは船頭一人であったが、
18 その男は叫んだ、「おまえはもう我が手中にある、性^{しょう}悪^{わる}の魂め。」
19 「プレギューアース、プレギューアースよ、喚^{わめ}いたとて無駄だ、
20 今度ばかりは」と、わが主は言った。「おまえがわれらを手中に収めて
21 いられるのも、おまえが（われらを乗せて）泥の沼を渡る間だけだ。」
22 詐欺に引っかけり、自分が完全に騙^{だま}されていたと聞かされた者が
23 悔しがって地団駄を踏むように、
24 プレギューアースはやり場のない怒りを溜め込んだ。
25 わが先^{せん}達^{だつ}は小舟に降り立ち、

26 e poi mi fece intrare appresso lui;
27 e sol quand' io fui dentro parve carca.
28 Tosto che 'l duca e io nel legno fui,
29 segando se ne va l'antica prora
30 de l'acqua più che non suol con altrui.

31 Mentre noi corravam la morta gora,
32 dinanzi mi si fece un pien di fango,
33 e disse: "Chi se' tu che vieni anzi ora?".
34 E io a lui: "S'i' vegno, non rimango;
35 ma tu chi se', che sì se' fatto brutto?".
36 Rispuose: "Vedi che son un che piango".

37 E io a lui: "Con piangere e con lutto,
38 spirito maladetto, ti rimani;
39 ch'i' ti conosco, ancor sie lordo tutto".

40 Allor distese al legno ambo le mani;
41 per che 'l maestro accorto lo sospinse,
42 dicendo: "Via costà con li altri cani!".

43 Lo collo poi con le braccia mi cinse;
44 basciommi 'l volto e disse: "Alma sdegnosa,
45 benedetta colei che 'n te s'incinse!

46 Quei fu al mondo persona orgogliosa;
47 bontà non è che sua memoria fregi:
48 così s'è l'ombra sua qui furiosa.

49 Quanti si tegnon or là sù gran regi
50 che qui staranno come porci in bago,
51 di sé lasciando orribili dispregi!".

52 E io: "Maestro, molto sarei vago

- 26 次いで私を、自身の後に導き入れたが、
27 私が乗ったとたん、小舟は初めて荷を積んだようにかしいだ。
28 師と私が舟に乗り込むや
29 古色蒼然とした舳先は、他の亡者たちを運ぶ
30 常よりも深く、水を切って進み出した。
- 31 私たちが、死んだ〔淀んだ〕水路〔沼〕を渡っていると、
32 私の前に、突然、泥だらけの男が姿を見せて
33 言った、「おまえは誰だ、まだその時でもないくせに来る奴は？」
34 それに私は答えた、「私は来ても、留まりはしない。
35 それより誰だ、こんな汚い姿に成り果てたおまえこそ？」
36 「判らないのか、俺は（ここで）泣いている者だ」と、返ってきた。
37 それで私は言った、「泣こうが、悲しもうが、
38 罰当たりは、ここに留まれ。
39 どれほど泥にまみれようと、おまえが誰か俺には判るぞ。」
40 すると男は船縁へもろ手を差し伸ばした。
41 それに気づいた師は、すぐさま男を突き落としながら言った、
42 「他の犬どもと、泥の中へ消え失せろ。」
43 そして、私の首に腕を巻き付け、
44 頬に口づけしながら言った、「悪を蔑み返す魂よ、
45 おまえを身籠もられたかの方〔母〕に祝福あれ。
46 あの男は、現世で、傲慢な輩^{やから}だった。
47 現世の記憶を飾る善行など何一つない。
48 そのため、ここでも奴の魂は怒り狂っている。
49 今、王様気取りで威張っている者が上の世界に何と多いことか。
51 こうした輩は、おぞましいほど軽蔑すべき不評を後に残し、
50 将来ここで、豚のように泥濘^{ぬかるみ}に転がり暮らすことになる。」
52 私は言った、「師よ、私たちがこの沼から出る前に

53 di vederlo attuffare in questa broda
54 prima che noi uscissimo del lago”.
55 Ed elli a me: “Avante che la proda
56 ti si lasci veder, tu sarai sazio:
57 di tal disio convien che tu goda”.
58 Dopo ciò poco vid’ io quello strazio
59 far di costui a le fangose genti,
60 che Dio ancor ne lodo e ne ringrazio.
61 Tutti gridavano: “A Filippo Argenti!”;
62 e ’l fiorentino spirito bizzarro
63 in sé medesimo si volvea co’ denti.
64 Quivi il lasciammo, che più non ne narro;
65 ma ne l’orecchie mi percosse un duolo,
66 per ch’io avante l’occhio intento sbarro.
67 Lo buon maestro disse: “Omai, figliuolo,
68 s’appressa la città c’ha nome Dite,
69 coi gravi cittadin, col grande stuolo”.
70 E io: “Maestro, già le sue meschite
71 là entro certe ne la valle cerno,
72 vermiglie come se di foco uscite
73 fossero”. Ed ei mi disse: “Il foco eterno
74 ch’entro l’affoca le dimostra rosse,
75 come tu vedi in questo basso inferno”.
76 Noi pur giugnemmo dentro a l’alte fosse
77 che vallan quella terra sconsolata:
78 le mura mi parean che ferro fosse.
79 Non senza prima far grande aggirata,
80 venimmo in parte dove il nocchier forte

- 53 奴がこの泥汁に漬け込まれるのを
54 是非とも見届けたいのですが。」
55 すると師は私に言った、「向こう岸がおまえに見えてくる前に、
56 その望みは十二分に満たされよう。また、
57 おまえがそうした欲求に喜びを覚えるのは正しいことだ。」
58 そのしばらく後、泥まみれの者たちが
59 寄ってたかってこいつを責め苛むのが見えた。
60 それで今も私は、これに対し神を称え、神に感謝している。
61 全員が「フィリッポ・アルジェンティにかかれ！」と叫んでいた。
62 すると、そのフィレンツェの手に負えない痼癩^{かんしゃく}持ちの霊は
63 自身の身体^{からだ}に歯で噛みついていてた。
64 私たちはこの男をそこに捨て置いたので、彼のことはもう語るまい。
65 だが、その時、阿鼻叫喚が束となって私の耳^じを打った。
66 それで、私は目を大きく見開き、前方をまじまじと見つめた。
67 優れた師は私に告げた、「さあ、息子、いよいよ
68 デース「ルチーフェロの別名」という名の都市^{まち}が近づいてきた。
69 そこには重罪人たちと悪魔の大軍が控えている。」
70 私は言った、「師よ、もう（回教寺院の）尖塔の数々が
71 あの中、（第六圏をなす）谷の中にはっきりと見えます。
72 まるで炎から取り出したばかりの（灼熱の鉄の）ように
73 真っ赤です。すると師は私に言った、
75 「この下層地獄の中でおまえの目にする通り、内側で
74 燃えさかる永劫の火が、尖塔を赤々と染め上げているのだ。」
76 こうして私たちはようやく奥深い堀へとたどり着いた。
77 堀はあの慰めのない国^{デース}の周りを幾重にも防柵のように取り巻き、
78 城壁は私には鉄でできているように思われた。
79 私たちが随分と巡ったあと、やっと
80 ある地点に着くと、船頭^{プレギューアス}は語気を強めて

81 “Usciteci”, gridò: “qui è l'intrata”.
82 Io vidi più di mille in su le porte
83 da ciel piovuti, che stizzosamente
84 dicean: “Chi è costui che senza morte
85 va per lo regno de la morta gente?”.
86 E 'l savio mio maestro fece segno
87 di voler lor parlar segretamente.
88 Allor chiusero un poco il gran disdegno
89 e disser: “Vien tu solo, e quei sen vada
90 che sì ardito intrò per questo regno.
91 Sol si ritorni per la folle strada:
92 pruovi, se sa; ché tu qui rimarrai,
93 che li ha' iscorta sì buia contrada”.

94 Pensa, lettor, se io mi sconfortai
95 nel suon de le parole maladette,
96 ché non credetti ritornarci mai.

97 “O caro duca mio, che più di sette
98 volte m'hai sicurtà renduta e tratto
99 d'alto periglio che 'ncontra mi stette,
100 non mi lasciar”, diss' io, “così disfatto;
101 e se 'l passar più oltre ci è negato,
102 ritroviam l'orme nostre insieme ratto”.

103 E quel signor che lì m'avea menato,
104 mi disse: “Non temer; ché 'l nostro passo
105 non ci può tòrre alcun: da tal n'è dato.
106 Ma qui m'attendi, e lo spirito lasso

- 81 怒鳴った。「降りろ、ここが（ディースの）入り口だ。」
83 天から降^ふってきた者〔悪魔〕たちが、門の上に、千以上も
82 見えた。皆かんかんになって口々に怒声を発していた。
84 「誰だ、まだ死んでもいないくせに
85 死者の王国をうろついている奴は。」
86 この時、わが智慧ある師は悪魔たちに合図を送り、
87 一人だけで彼らと話を付けたい旨を伝えた。
88 すると、悪魔たちは怒り狂った蔑みを幾らか閉じて、
89 言い放った。「おまえ独りで来い。そしてあいつを立ち去らせろ、
90 おこがましくもこの王国にのこのこと入り込むとは。
91 そいつにはたった独りで帰らせろ、狂気の沙汰の道を通ってな。
92 できるものなら、やらせてみろ。このお先真つ暗の土地を
93 奴のために案内してきたおまえ、おまえはここに残るんだからな。」
- 94 読者よ、思ってもみてほしい。この忌^いまわしい
95 言葉の響きに、私がどんなに狼狽^{うろたえ}たかを。
96 私は、地上へはもう二度と戻れないと思った。
- 97 「おお、親愛なるわが導者よ」 私は言った、「あなたは七度以上も
98 私に安心をもたらし、迫り来る重大な危機から
99 私を救いだして下さいました。ですから、
100 死なんばかりに途方に暮れた私を、どうか見捨てないで下さい。
101 これ以上進むことが否定されるならば、
102 すぐ一緒に、今まで来た跡をたどって戻りましょう。」
103 すると、ここまで私を導いて来たあの偉大な方は
104 私に言った、「怖れるな。私たちの歩みを
106 遮ることは誰にもできはせぬ。かの方〔神〕によって許されている
106 のだから。ともかく、ここで私を待て。そして、萎^なえた意気を

107 conforta e ciba di speranza buona,
108 ch'ì non ti lascerò nel mondo basso".
109 Così sen va, e quivi m'abbandona
110 lo dolce padre, e io rimagno in forse,
111 che sì e no nel capo mi tenciona.
112 Udir non potti quello ch'a lor porse;
113 ma ei non stette là con essi guari,
114 che ciascun dentro a pruova si ricorse.
115 Chiuser le porte que' nostri avversari
116 nel petto al mio signor, che fuor rimase
117 e rivolsesi a me con passi rari.
118 Li occhi a la terra e le ciglia avea rase
119 d'ogne baldanza, e dicea ne' sospiri:
120 "Chi m'ha negate le dolenti case!".
121 E a me disse: "Tu, perch' io m'adiri,
122 non sbigottir, ch'io vincerò la prova,
123 qual ch'a la difension dentro s'aggiri.
124 Questa lor tracotanza non è nova;
125 ché già l'usaro a men segreta porta,
126 la qual senza serrame ancor si trova.
127 Sovr' essa vedestù la scritta morta:
128 e già di qua da lei discende l'erta,
129 passando per li cerchi senza scorta,
130 tal che per lui ne fia la terra aperta".

- 107 明るい希望で養い、元気を出すがいい。
- 109 この下界「地獄界」に決しておまえを置いていきはせぬ。」
- 109 こう言って立ち去った。慈愛溢れる父に置き去りにされた私は、
- 110 ひとり疑念の中に取り残され、『うまくいく、いかない』
- 111 という思いが、頭の中で互いにせめぎ合っていた。
- 112 師が悪魔たちに話しかけている言葉は聞き取れなかったが、
- 113 彼らと長居をすることはなかった。というのも、
- 114 悪魔たちはわれ先にと大慌てで（城壁の中へ走り帰ったからだ。
- 115 あのわれらの敵どもは、わが主の面前で
- 116 城門を閉ざした。独り外に取り残された師は
- 117 足取りも遅く、私の方へ引き返してきた。
- 118 目は地に落ち、眉からは明るさと自信が
- 119 ことごとく消え失せ、溜息をつきながら言った、
- 120 「私が苦患の家に入るのを拒む者がいようとは！」
- 121 そして私に向かって言った、「いいか、私が心痛めようとも、
- 122 決して狼狽するな。私は必ずこの闘いに打ち勝ってみせる、
- 124 あの中でいかなる者が躍起になって邪魔だてしようとも。
- 124 奴らのこの思い上がりは何も目新しいものではない。
- 125 以前にも地獄の門にこの増上慢を働かせ（門を掛け）たことがある。
- 126 それで、今もあの門は門もなく開いたままになっている。
- 127 その上に刻まれた、死を告げる碑銘はおまえの目にしたところだが、
- 128 こうしている今にも、その門を通して（地獄の）斜面を降り、
- 129 圏から圏へと案内もなしにこちらへ向かっておられる方がある。
- 130 その方の御力でこの都市（の門）もわれらに開かれよう。」

CANTO IX

1 Quel color che viltà di fuor mi pinse
2 veggendo il duca mio tornare in volta,
3 più tosto dentro il suo novo ristrinse.
4 Attento si fermò com' uom ch'ascolta;
5 ché l'occhio nol potea menare a lunga
6 per l'aere nero e per la nebbia folta.
7 "Pur a noi converrà vincer la punga",
8 cominciò el, "se non ... Tal ne s'offerse.
9 Oh quanto tarda a me ch'altri qui giunga!".
10 I' vidi ben sì com' ei ricoperse
11 lo cominciar con l'altro che poi venne,
12 che fur parole a le primi diverse;
13 ma nondimen paura il suo dir dienne,
14 perch' io traeva la parola tronca
15 forse a peggior sentenza che non tenne.
16 "In questo fondo de la trista conca
17 discende mai alcun del primo grado,
18 che sol per pena ha la speranza cionca?".
19 Questa question fec' io; e quei "Di rado
20 incontra", mi rispuose, "che di noi
21 faccia il cammino alcun per qual io vado.
22 Ver è ch'altra fiata qua giù fui,
23 congiurato da quella Eritón cruda
24 che richiamava l'ombre a' corpi sui.
25 Di poco era di me la carne nuda,

第9歌

- 2 わが師が踵を返して来るのを目にして、
1 怯懦に囚われた私の心が、その色を外へと押し出してしまうと、
3 師はすぐに常ならぬ自身の顔色を内へと引っ込め、
4 聞き耳を立てる人のように、意識を（沼の上に）凝らして立ち止まった。
6 黒々とした大気は厚い霧に覆われ、
5 視界が遠くに利かなかったからだ。
7 「とにかく、われらはこの戦いにどうしても勝たねばならぬ」と師は
8 話し始めた、「さもなくば…、否、かの方が申し出になったのだ。
9 ああ何と遅く感じるのか、あの方〔天の御使い〕の到着が！」
11 師が、最初の言葉を、続く別の言葉で
10 覆ったことに私ははっきりと気がついた。
12 後の言葉は、最初の言葉とは（意味が）違っていたが、
13 それでも師の言葉に恐怖をかき立てられた。
14 言いかけの言葉から、おそらく実際には無い
15 悪い意味を、私が勝手に汲み取ってしまっていたからだ。
18 「懲罰として、希望が切り取られただけの
17 ^{リンボ}第一圏の者たちの中で、かつて
16 この陰惨な窪みの底〔ディース〕に降りた者はいるのですか？」
19 このように私が尋ねると、師は私に答えた。
20 「われわれの仲間で、私が今歩んでいる
21 この道を行く者は滅多にない。
22 もっとも、私は昔ここに一度来たことがある。あのおどろおどろしい
23 エリクトーが呪い^{まじな}を使って私を無理やり呼び出したからだ。
24 この魔女は、死者の魂を（束の間、地上の）その肉体に呼び戻す。
25 私の肉体が私自身〔魂〕を無くしてまだ間もない頃、

26 ch'ella mi fece intrar dentr' a quel muro,
27 per trarne un spirto del cerchio di Giuda.
28 Quell' è 'l più basso loco e 'l più oscuro,
29 e 'l più lontan dal ciel che tutto gira:
30 ben so 'l cammin; però ti fa sicuro.
31 Questa palude che 'l gran puzzo spira
32 cigne dintorno la città dolente,
33 u' non potemo intrare omai sanz' ira".
34 E altro disse, ma non l'ho a mente;
35 però che l'cchio m'avea tutto tratto
36 ver' l'alta torre a la cima rovente,
37 dove in un punto furon dritte ratto
38 tre furie infernal di sangue tinte,
39 che membra femmine avieno e atto,
40 e con idre verdissime eran cinte;
41 serpentelli e ceraste avien per crine,
42 onde le fiere tempie erano avvinte.
43 E quei, che ben conobbe le meschine
44 de la regina de l'eterno pianto,
45 "Guarda", mi disse, "le feroci Erine.
46 Quest' è Megera dal sinistro canto;
47 quella che piange dal destro è Aletto;
48 Tesifón è nel mezzo"; e tacque a tanto.
49 Con l'unghie si fendea ciascuna il petto;
50 battiensi a palme e gridavan sì alto,
51 ch'i' mi strinsi al poeta per sospetto.
52 "Vegna Medusa: sì 'l farem di smalto",
53 dicevan tutte riguardando in giuso;

- 27 ユダの圈の霊を一人連れ出すために、
26 エリクトーは、私をあの（ディースの）城壁の中へ入らせた。
28 ユダの圈は（地獄の）最下層にあって最も暗く、すべてを包み
29 すべてを巡らす天球〔原動天〕から最も遠くに位置する。
30 私はその道をよく心得ているから、安心するがいい。」
31 凄まじい悪臭を放つこの（ステュックスの）沼が
32 苦患の都市〔ディース〕をくまなく取り巻いている以上、
33 もはや（聖なる）怒りなしにこの中に入ることはできぬ。」
34 師は他にも語られたが、私は覚えていない。
35 眼が私のすべてを
36 高き塔へと吸いつけたからだ。紅蓮^{ぐれん}に輝く
38 その頂きに、突如、地獄の血塗られた憤怒の悪魔たちが
37 三人ともども立ち上がっていた。体つきは
39 女だが、怒りに囚われた女のように感情をむき出しにしていた。
40 腰には真緑の水蛇を巻きつけ、
41 頭からは小さな蛇や（太い）角蛇が髪のように生え出て、
42 見るもおぞましく恐ろしげにとぐろを巻いていた。
43 永劫の悲嘆の女王に仕える
44 侍女たちと、すぐに見て取った師は、
45 私に言った、「見るがいい、獐猛なエリーニユスたちだ。
46 （塔の）左側にメガイラがいる、
47 右側で泣いているのはアーレクトー、
48 テーシポネーは真ん中にいる。」これだけ言って、師は口を噤^{つぐ}んだ。
49 三人とも、爪で胸を掻きむしり、
51 掌で自身を叩き、余りに甲高い声で呼ばれるため、
50 私は怖^おじ氣^けを振るって、詩人にびったりと身を寄せた。
52 「メドゥーサを来させろ。それで奴を石に変えてやろう」と
53 三人はともに（塔の上から）下をのぞき込んで、叫んでいた。

54 “mal non vengiammo in Tesëo l’assalto”.

55 “Volgiti ‘n dietro e tien lo viso chiuso;
56 ché se ‘l Gorgón si mostra e tu ‘l vedessi,
57 nulla sarebbe di tornar mai suso”.

58 Così disse ‘l maestro; ed elli stessi
59 mi volse, e non si tenne a le mie mani,
60 che con le sue ancor non mi chiudessi.

61 O voi ch’avete li ‘ntelletti sani,
62 mirate la dottrina che s’asconde
63 sotto ‘l velame de li versi strani.

64 E già venia su per le torbide onde
65 un fracasso d’un suon, pien di spavento,
66 per cui tremavano amendue le sponde,
67 non altrimenti fatto che d’un vento
68 impetüoso per li avversi ardori,
69 che fier la selva e sanz’ alcun rattento
70 li rami schianta, abbatte e porta fori;
71 dinanzi polveroso va superbo,
72 e fa fuggir le fiere e li pastori.

73 Li occhi mi sciolse e disse: “Or drizza il nerbo
74 del viso su per quella schiuma antica
75 per indi ove quel fummo è più acerbo”.

76 Come le rane innanzi a la nimica
77 biscia per l’acqua si dileguan tutte,
78 fin ch’a la terra ciascuna s’abbica,
79 vid’ io più di mille anime distrutte

54 「地獄を襲ったテーセウスにその報いを与えなかったのが悪かった。」

55 「後ろを向き、眼をしっかりと閉じていろ。

56 もしゴルゴーン〔メドゥーサ〕が現れ、おまえがその顔を見よう

57 ものなら、二度と地上に戻ることはかなわぬぞ。」

58 師はこう告げると、わざわざ自分で

59 私の身体を後ろへ向かせ、私の覆う手に飽きたらず、

60 更に手ずから私の目を覆った。

61 あなた方、（真実を見極める）健全な知性の持ち主よ、

63 この不可思議な詩句のヴェールの下に

62 隠されている意味を見抜き給え。

64 するとまさにこの時、濁った〔陰鬱の〕水^{おもて}の面を伝って

65 凄まじい大音響が押し寄せ、両の岸は世にも恐ろしい

66 どよめきのせいで、ぐらぐらと振動していた。

67 それはちょうど、相反する温度の大気〔寒気と熱気〕が

68 ぶつかり合うとき、烈風が引き起こす轟音に似ていた。

69 この烈風は森を打ち、行く手を遮るいかなる障害ものともせず、

70 枝を折り、木を倒し、（森の）外遠くへ拉し去る。

71 高々と進むその前には埃が巻き上がり、

72 野の獣ら、牧人たちも逃げ失せる。

73 師は私の眼を解いて、言った、「さあ、視神経〔視力〕を

75 研ぎ澄まして、あの太古の水^{みなわ}泡の上をしっかりと見るがいい。

74 靄が、（眼に）いっそう刺^{とげ}々しい〔濃くなっている〕あたりを。」

76 蛙たちは、天敵の蛇が近づくと、

77 みな一目散に水中に消え去り、

78 各自、水底にへばりついて背を丸め、土饅頭と化すが、

81 それと同じように、足裏を濡らすことなく、ステュックスの沼を

80 fuggir così dinanzi ad un ch'al passo
81 passava Stige con le piante asciutte.
82 Dal volto rimovea quell' aere grasso,
83 menando la sinistra innanzi spesso;
84 e sol di quell' angoscia pareva lasso.
85 Ben m'accorsi ch'elli era da ciel messo,
86 e volsimi al maestro; e quei fé segno
87 ch'i' stessi queto ed inchinassi ad esso.
88 Ahi quanto mi pareva pien di disdegno!
89 Venne a la porta, e con una verghetta
90 l'aperse, che non v'ebbe alcun ritegno.
91 "O cacciati del ciel, gente dispetta",
92 cominciò elli in su l'orribil soglia,
93 "ond' esta oltracotanza in voi s'alletta?
94 Perché recalcitrare a quella voglia
95 a cui non puote il fin mai esser mozzo,
96 e che più volte v'ha cresciuta doglia?
97 Che giova ne le fata dar di cozzo?
98 Cerbero vostro, se ben vi ricorda,
99 ne porta ancor pelato il mento e 'l gozzo".
100 Poi si rivolse per la strada lorda,
101 e non fé motto a noi, ma fé sembante
102 d'omo cui altra cura stringa e morda
103 che quella di colui che li è davante;
104 e noi movemmo i piedi inver' la terra,
105 sicuri appresso le parole sante.
106 Dentro li 'ntrammo sanz' alcuna guerra;
107 e io, ch'avea di riguardar disio

- 79 歩いて渡る者が近づくと、千余の魂たちが（恐怖に）
80 ^{あわ}慌てふためいて、逃げ去るのが見えた。
- 83 左手で前をしきりに振り払いながら、
82 立ち上る濃霧を顔から遠ざけていたが、
84 それだけが煩わしく鬱陶^{うつとう}しいようであった。
- 85 私はすぐに、それが天から遣わされた方だと判った。
86 それで私は師の方を向いたが、師は私に
87 黙ってその方にお辞儀するよう合図した。
- 88 ああ何と、蔑みの余り、怒りに満ちて見えたことか。
89 天の使いは門にやって来ると、右手の細い小杖で
90 いとも簡単に、何の抵抗もなく、門を開けた。
- 91 「おお、天から駆逐された者どもよ。（神から）蔑まれた輩よ」
92 天の使いは恐るべき閼^{しきい}の上に立って、口を切った。
93 「一体どこからおまえらはこのような増上慢を進んで招き入れる？」
- 94 かの〔神の〕御意志をなぜ足蹴にする？
95 望まれたその目的が叶えられなかった例^{ため}しは一度もないというのに、
96 しかも、逆らう度^{たび}におまえらの苦痛が増したというのに、
97 至高の運命〔神意〕に角突いて何になろう？
- 98 よもや忘れてはいまい、おまえらのケルベロスが逆らったために、
99 顎と喉の毛が今も抜け落ちたままになっているのを。」
- 100 これだけ言うと、振り向き、泥水の道へと取って返した、
101 私たちに一言かけるでもなく、
103 目の前にいる者に対する気遣いよりも
102 他の事に心奪われ、それが気が気でならない人のように。
- 105 かくして私たちは、聖なる言葉に安んじて
104 ディースの都市^{まち}へ向かって歩き出し、
106 なんら妨害を受けることなく、易々と中へと入って行った。
108 あのような城塞がかたく閉じこめている

108 la condizion che tal fortezza serra,
109 com' io fui dentro, l'occhio intorno invio;
110 e veggio ad ogne man grande camapgna,
111 piena di duolo e di tormento rio.
112 Sì come ad Arli, ove Rodano stagna,
113 sì com' a Pola, presso del Carnaro
114 ch'Italia chiude e suoi termini bagna,
115 fanno i sepulcri tutt' il loco varo,
116 così facevan quivi d'ogne parte,
117 salvo che 'l modo v'era più amaro;
118 ché tra li avelli fiamme erano sparte,
119 per le quali eran sì del tutto accesi,
120 che ferro più non chiede verun' arte.
121 Tutti li lor coperchi eran sospesi,
122 e fuor n'uscivan sì duri lamenti,
123 che ben parean di miseri e d'offesi.
124 E io: "Maestro, quai son quelle genti
125 che, seppellite dentro da quell' arche,
126 si fan sentir coi sospiri dolenti?".
127 E quelli a me: "Qui son li eresiarche
128 con lor seguaci, d'ogne setta, e molto
129 più che non credi son le tombe carche.
130 Simile qui con simile è sepolto,
131 e i monimenti son più e men caldi".
132 E poi ch'a la man destra si fu vòlto,
133 passammo tra i martìri e li alti spaldi.

- 107 内部の様子をかねてから知りたいと願っていた私は、
 109 中に入るや、あたりくまなく眼差しを送ったが、
 110 眼に入るのは、渺茫^{びようぼう}たる広がり^{ひろがり}の至るところに
 112 満ち満ちた、耐え難い呵責^{かしやくくげん}と苦患ばかりであった。
 112 ローヌ川が淀^{よど}んで沼をなす地域にあるアルルの街
 114 （のアリスカンの墓地）やイタリア（の領土）を画し、その国境を洗う
 113 クワルナー口湾近傍のポーラの街（の墓地）では、
 115 夥^{おびただ}しい墓が、一面を起伏なす地形に変えているが、まさにそれと
 116 同じように、ここでも至るところ無数の凹凸が広がっていた。
 117 ただし、その有様^{ありさま}は比較にならぬほど悲痛なものであった。
 118 石棺の周りからは炎がめらめらと吹き出していたからだ。
 119 石棺は炎の熱によってことごとく赤熱し、
 120 もはやいかなる鍛鉄にもこれ以上の灼熱を要さないほどであった。
 121 その蓋はすべて持ち上げられ〔外され〕、
 122 中からは聞くも堪えない呻^{うめ}き声が洩れ出していた。その余りの
 125 痛ましきから、重い劫罰^{こうばつ}に処せられた者たちとすぐに察せられた。
 124 それで私は尋ねた、「師よ、あの者たちはどのような人々なのですか、
 125 あのような棺の中に葬られ、
 126 苦しげな嘆息を通し、自身の存在を明かしているのは？」
 127 すると師は私に言った、「ここにいるのは、異端の創始者たちと
 128 その追従者たちだ。あらゆる派〔異端〕がいるが、どの墓にも
 129 おまえが思っているよりも遙かに多くが詰め込まれている。
 130 ここでは、同類は同類と共に葬られ、
 131 墓標^{あやま}を焼く熱も、過ちの度合いに応じている。」
 132 すると、師は右に曲がり、
 133 私たちは殉教者たちの墓と（ディースの）高き砦の間を過ぎて行った。

CANTO X

1 Ora sen va per un secreto calle,
2 tra 'l muro de la terra e li martìri,
3 lo mio maestro, e io dopo le spalle.

4 “O virtù somma, che per li empi giri
5 mi volvi”, cominciai, “com’ a te piace,
6 parlami, e sodisfammi a’ miei disiri.

7 La gente che per li sepolcri giace
8 potrebbe vedèr? già son levati
9 tutt’ i coperchi, e nessun guardia face”.

10 E quelli a me: “Tutti saran serrati
11 quando di Iosafat qui torneranno
12 coi corpi che là sù hanno lasciati.

13 Suo cimitero da questa parte hanno
14 con Epicuro tutti suoi seguaci,
15 che l’anima col colpo morta fanno.

16 Però a la dimanda che mi faci
17 quinc’ entro satisfatto sarà tosto,
18 e al disio ancor che tu mi taci”.

19 E io: “Buon duca, non tegno riposto
20 a te mio cuor se non per dicer poco
21 e tu m’hai non pur mo a ciò disposto”.

22 “O Tosco che per la città del foco
23 vivo ten vai così parlando onesto,
24 piacciati di restare in questo loco.

25 La tua loquela ti fa manifesto

第10歌

- 2 今や、都市^{デース}の城壁と居並ぶ石棺の間に
1 できた隙間^{あい}を隘路^ろとし、
3 わが師は進み、私もその背後^{うしろ}から付いてゆく。
4 「おお、至高の徳よ」と私は語りかけた、「あなたは、善かれと思う
5 判断に従い、数々の不敬の圈を巡り、私を導いて下さいます。
6 どうか私に教え、私の願いを叶えて頂けませんか。
7 この墓の中に横たわっている人々を
8 見ることはできるのでしょうか。蓋はみな、この通り
9 持ち上げられています。それに、見張りは誰もいません。」
10 すると師は言った、「蓋がすべて閉じられるのは、[最後の審判
12 の日に]（魂たちが）地上に置き去った肉体をまとめて
11 ヨシファトの谷から再びここへ戻ってくる時だ。
13 この辺りの墓地には、
15 肉体とともに魂は死滅すると信じる
14 エピクーロスとその追隨者たちがことごとく収められている。
16 それゆえ、おまえが尋ねる質問は
17 ここの（圈の）中ですぐに満たされよう、
18 そして、おまえが黙っている[口に出さない]願望もな。」
19 それで私は弁解した、「優しく私を導いて下さる先生に心の内[願望]
20 を隠すなど思ってもみません。ただ、前々から口数を慎むよう、
21 先生にご注意を受けていたためです。」
22 「おー、トスカ^{びと}ーナ人よ、炎^まの都市^ちを
23 生き身のまま、かくも恭しい言葉遣いで、通り過ぎていく人よ、
24 もしよければ、どうかここに立ち止まってはくれまいか。
25 その話しぶり[訛り]から、君が

26 di quella nobil patria natio,
27 a la qual forse fui troppo molesto".
28 Subitamente questo suono uscìo
29 d'una de l'arche; però m'accostai,
30 temendo, un poco più al duca mio.
31 Ed el mi disse: "Volgiti! Che fai?
32 Vedi là Farinata che s'è dritto:
33 da la cintola in sù tutto 'l vedrai".
34 Io avea già il mio viso nel suo fitto;
35 ed el s'ergea col petto e con la fronte
36 com' avesse l'inferno a gran dispetto.
37 E l'animose man del duca e pronte
38 mi pinser tra le sepulture a lui,
39 dicendo: "Le parole tue sien conte".
40 Com' io al piè de la sua tomba fui,
41 guardommi un poco, e poi, quasi sdegnoso,
42 mi domandò: "Chi fuor li maggior tui?".
43 Io ch'era d'ubidir disideroso,
44 non gliel celai, ma tutto gliel' aspersi;
45 ond' ei levò le ciglia un poco in suso;
46 poi disse: "Fieramente furo avversi
47 a me e a miei primi e a mia parte,
48 sì che per due fiате li dispersi".
49 "S'ei fur cacciati, ei tornar d'ogne parte",
50 rispuos' io lui, "l'una e l'altra fiata;
51 ma i vostri non appreser ben quell' arte".
52 Allor surse a la vista scoperchiata
53 un'ombra, lungo questa, infino al mento:

- 26 あの高貴な故郷「フィレンツェ」の生まれだと、はっきり判る。
27 だが私は、その故国を余りに苛^{さい}んでしまったかも知れぬ。」
28 突如このような声が、石棺の一つから
29 発し、仰天した私は
30 怖じ気づいて、いっそう導者に身を寄せた。
31 すると師は私に言った、「向くのは向こうだ。何をしている？
32 見ろ、あそこに立ち上がっているファリナータを、
33 腰から上、全部が見えるだろう。」
34 私は、すでに彼の眼差しをじっと見つめていた。
35 彼は胸を張り、頭をもたげ、聳えるように起立していた、
36 あたかも大いなる侮蔑を地獄に投げかけるかのように。
37 私は、導者の両の手から、勇気を素早く吹き込まれながら、
38 墓の合間を押されて、彼のもとまでやって来ると、
39 「言葉遣いをよく弁^わえるように」と忠告された。
40 私が彼の石棺の下に着くや、
41 彼は私をしばし見つめたが、やがて、半ば見下すかのような様子で、
42 私に尋ねた、「おまえの先祖たちは誰だ？」
43 私は、彼に進んで服したいと望んでいたので、
44 何一つ包み隠さず、ありのままを彼に打ち明けた。
45 すると、彼は眉を少しつり上げ、
46 おもむろに言った、「敵ながら手強い相手であった、
47 私のみならず、わが先祖やわが党「皇帝派」にとって。
48 それで私は、二度にわたり、彼らを駆逐したのだ。」
49 「追われたにせよ、彼ら「アリギエーリ家」は四方から舞い戻って
50 きました、一度ならず二度とも」と、私は応じた、
51 「しかし、あなたの家の者はその術^{すべ}をよく心得ていませんでした。」
52 その時いきなり、口の開いた墓から一人の魂「カヴァルカンテ」が起き上がり、
53 ファリナータの傍らに、顎まで姿を見せた。

54 credo che s'era in ginocchie levata.
55 Dintorno mi guardò, come talento
56 avesse di veder s'altri era meco;
57 e poi che 'l sospecciar fu tutto spento,
58 piangendo disse: "Se per questo cieco
59 carcere vai per altezza d'ingegno,
60 mio figlio ov' è? e perché non è teco?".
61 E io a lui: "Da me stesso non vegno:
62 colui ch'attende là, per qui mi mena
63 forse cui Guido vostro ebbe a disdegno".
64 Le sue parole e 'l modo de la pena
65 m'avean di costui già letto il nome;
66 però fu la risposta così piena.
67 Di sùbito drizzato gridò: "Come?
68 dicesti "elli ebbe"? non viv' elli ancora?
69 non fiere li occhi suoi lo dolce lume?".
70 Quando s'accorse d'alcuna dimora
71 ch'io facëa dinanzi a la risposta,
72 supin ricadde e più non parve fora.
73 Ma quell' altro magnanimo, a cui posta
74 restato m'era, non mutò aspetto,
75 né mosse collo, né piegò sua costa;
76 e sé continuando al primo detto,
77 "S'elli han quell' arte", disse, "male appresa,
78 ciò mi tormenta più che questo letto.
79 Ma non cinquanta volte fia raccesa
80 la faccia de la donna che qui regge,
81 che tu saprai quanto quell' arte pesa.

- 54 今思うに、膝で立っていたのであろう。
- 56 彼は、私と一緒にほかに誰かいなか
- 55 探しているかのように、私の周りを見回した。
- 57 そして期待がことごとく消えうせてしまうと、
- 58 泣きながら話し始めた、「もし君が、高き詩才によって
- 59 この盲目の^{れいぎよ}圜圀〔地獄〕を通して行くのであれば、わが息子〔グイート・
- 60 カヴァルカンティ〕はどこにいる？ どうして君と一緒にではないのか？」
- 61 それで私は彼に答えた、「私は自分の力で来たものではありません。
- 62 向こうで待っている方がここを通して導いて下さるのです。
- 63 しかし、あなたのグイードはその方を軽じていたようなのです。」
- 66 私がこのように余すところなく答えたのも、
- 64 彼の言葉とその劫罰の様子、
- 65 それだけで、私には彼の名前が読みとれていたからだだった。
- 67 彼はいきなり立ち上がると、叫んだ。「何と？ 君は
- 68 『いた』と言ったのか？ 息子はもう生きていないと？
- 69 甘美な光はもはや息子の目を射てはいない〔死んでいる〕と？」
- 70 私が少しばかり答えて
- 71 まごついているのを見て取ると、
- 72 彼は仰向けに（再び）倒れ伏し、二度と姿を見せなかった。
- 73 一方、私に足を留めるよう求めた、あの大きいな矜持の持ち主は
- 74 微動だにせず、表情一つ変えることもなければ、
- 75 首を動かすことも、腰を曲げることもなかった。
- 76 そして最初の話に戻って、続けた。
- 77 「わが家の者たちがその（帰還の）^{すべ}術を学び損ねたというなら、
- 78 それはこの（火の）床よりも私を苦しませる。
- 80 だが、ここ〔地獄〕を治める女王〔月〕の顔が
- 79 五十回も光り輝かぬうちに、その術（を学ぶこと）が
- 81 いかに重くのしかかるか君にも判るだろう。

82 E se tu mai nel dolce mondo regge,
83 dimmi: perché quel popolo è sì empio
84 incontr' a' miei in ciascuna sua legge?".
85 Ond' io a lui: "Lo strazio e 'l grande scempio
86 che fece l'Arbia colorata in rosso,
87 tal orazion fa far nel nostro tempio".
88 Poi ch'ebbe sospirando il capo mosso,
89 "A ciò non fu' io sol", disse, "né certo
90 sanza cagion con li altri sarei mosso.
91 Ma fu' io solo, là dove sofferto
92 fu per ciascun di tòrre via Fiorenza,
93 colui che la difesi a viso aperto".
94 "Deh, se riposi mai vostro semenza",
95 prega' io lui, "solvetemi quel nodo
96 che qui ha 'nviluppata mia sentenza.
97 El par che voi veggiate, se ben odo,
98 dinanzi quel che 'l tempo seco adduce,
99 e nel presente tenete altro modo".
100 "Noi veggiam, come quei c'ha mala luce,
101 le cose", disse, "che ne son lontano;
102 cotanto ancor ne splende il sommo duce.
103 Quando s'appressano o son, tutto è vano
104 nostro intelletto; e s'altri non ci apporta,
105 nulla sapem di vostro stato umano.
106 Però comprender puoi che tutta morta
107 fia nostra conoscenza da quel punto
108 che del futuro fia chiusa la porta".
109 Allor, come di mia colpa compunto,

- 82 君が必ずや甘美な世界に帰り着くよう切に願っている。
83 ところで教えてくれないか、なぜあの民はかくも冷酷無情に
84 その法令において、ことごとくわが家の者に敵対するのか？」
86 それで私は彼にこう説いた、「アルビア川を紅に染めた
85 あの殺戮、残忍な大虐殺ゆえに、私たちの
87 寺院〔議会〕はそのような祈禱〔議決〕を行っているのです。」
88 溜息をつきながら、頭を横に振ると、（ファリナータは）
89 言った、「それを行ったのは私だけではない、むしろ
90 何の道理もなく、他の者たちと行動を共にしたのでもない。
91 それどころか私だけだった、フィレンツェを破壊尽くすとの
92 衆議が一致したあの〔エンボリの〕町で、
93 正面切って（反対し、）フィレンツェを擁護したのは。」
94 「ああ、どうかあなたの御子孫に平安が訪れますように」と、彼のため
95 に祈った後、私は尋ねた、「是非、絡まりを解きほぐして下さい。
96 先ほどのお言葉で、どう考えたらよいのか解らなくなりました。
97 お話を聞く限り、あなたがたは
98 時が連れ来るもの〔未来〕を予知なさる一方、
99 現在の事は別の規範に従っていらっしゃるように見えます。」
100 「われわれは、目の悪い〔老眼の〕者たちと同じで、自分たちの
101 遠くにあるものしか見えない。この場合のみ、至高の
102 （光）を導く方〔神〕はわれら（の知性）を今なお照らして下さい。
103 （未来の）物事が近づいてきたり、現在のものとなると、われらの知性は
104 空となり、何の役にも立たなくなる。他の（新しい）魂が知らせを
105 持って来てくれない限り、君たち人間界の現況は何も解らない。
106 従って、今や君も理解できるだろう、
108 未来の扉が閉じる〔最後の審判の終わる〕その瞬間から
107 われわれの認識能力は完全に〔永遠に〕死に絶えてしまうのだ。」
109 その時、自分の犯した罪を悔やむように、心を痛めていた私は

110 dissi: “Or direte dunque a quel caduto
111 che l suo nato è co’ vivi ancor congiunto;
112 e s’i fui, dinanzi, a la risposta muto,
113 fate i saper che l fei perché pensava
114 già ne l’error che m’avete soluto”.
115 E già l maestro mio mi richiamava;
116 per ch’i pregai lo spirto più avaccio:
117 che mi dicesse chi con lu’ istava.
118 Disse mi: “Qui con più di mille giaccio:
119 qua dentro è l secondo Federico
120 e l Cardinale; e de li altri mi taccio”.
121 Indi s’ascose; e io inver’ l’antico
122 poeta volsi i passi, ripensando
123 a quel parlare che mi pareva nemico.
124 Elli si mosse; e poi, così andando,
125 mi disse: “Perché se’ tu sì smarrito?”.
126 E io li sodisfeci al suo dimando.
127 “La mente tua conservi quel ch’udito
128 hai contra te”, mi comandò quel saggio;
129 “e ora attendi qui”, e drizzò l dito.
130 “quando sarai dinanzi al dolce raggio
131 di quella il cui bell’ occhio tutto vede,
132 da lei saprai di tua vita il viaggio”.
133 Appresso mosse a man sinistra il piede:
134 lasciammo il muro e gimmo inver’ lo mezzo
135 per un sentier ch’a una valle fiede,
136 che nfin là sù facea spiacer suo lezzo.

- 110 言った、「それでは、どうかあの倒れた方^{カヴァルカンテ}に是非ともお伝え下さい、
 111 ご子息はまだ生きている人たちと一緒にいると。
 112 そして、先ほど私が返事をせずに黙っていたのも、
 114 今あなたが解いて下さった疑問を、その時
 113 思案していたからだと、お知らせ下さい。」
 115 この時すでに、わが師は戻ってくるよう私を呼んでいた。
 116 そのため私は、ファリナータの霊に
 117 どんな人たちと一緒にいるのか急いで教えてくれるよう懇願した。
 118 彼は私に答えた、「ここで私は千余の者たちと横臥^{おうが}している。この
 119 （墓の）中には、（皇帝）フリードリヒ二世や《枢機卿》（オッタヴィアーノ・
 120 デッリ・ウバルディーニ）がいるが、他の者たちについては黙しておこう。」
 121 こう言い終わると、彼は（墓の中に）姿を消した。私は古代の
 122 詩人の方へと歩を転じながら、私の運命に暗雲を投げかける
 123 あの（ファリナータの）言葉〔予言〕に思いを巡らしていた。
 124 師は歩き始め、進みながら、おもむろに
 125 私に尋ねた、「なぜかくも途方に暮れている？」
 126 師のこの問いに対して、私は余すところなく心の内を打ち明けた。
 127 「自分にとって逆境となる話をおまえは聞いたわけだが、（それはそれで）
 128 記憶によく留めておくが良い」と、賢者は私に諭^{さと}した。
 129 「だが今は、これを心しておくだけで良い」と、人差し指を立てた。
 130 「かの女性^{かた}〔ベアトリーチェ〕の光り輝く甘美な眼差しの前に立つとき、
 131 おまえは、すべてをみそなわすあの清らかな眼の
 132 その女性^{かた}から、自身の人生の旅路を知ることになるだろう。」
 133 こう言うと、師は左手に歩を転じ、
 134 城壁を後にした。私たちは（墓と墓の間の）小径^{みち}を通して
 135 （圏の）中心へと向かった。小径は谷まで続いていたが、
 136 谷の耐え難い腐臭は、その上〔第六圏〕にまで立ち昇っていた。

CANTO XI

1 In su l'estremità d'un'alta ripa
2 che facevan gran pietre rotte in cerchio,
3 venimmo sopra più crudele stipa;
4 e quivi, per l'orribile soperchio
5 del puzzo che 'l profondo abisso gitta,
6 ci raccostammo, in dietro, ad un coperchio
7 d'un grand' avello, ov' io vidi una scritta
8 che dicea: 'Anastasio papa guardo,
9 lo qual trasse Fotin de la via dritta'.

10 “Lo nostro scender conviene esser tardo,
11 sì che s'ausi un poco in prima il senso
12 al tristo fiato; e poi no i fia riguardo”.
13 Così 'l maestro; e io “Alcun compenso”,
14 dissi lui, “trova che 'l tempo non passi
15 perduto”. Ed elli: “Vedi ch'a ciò penso”.
16 “Figliuol mio, dentro da cotesti sassi”,
17 cominciò poi a dir, “son tre cerchietti
18 di grado in grado, come que' che lassi.
19 Tutti son pien di spirti maladetti;
20 ma perché poi ti basti pur la vista,
21 intendi come e perché son costretti.
22 D'ogne malizia, ch'odio in cielo acquista,
23 ingiuria è 'l fine, ed ogne fin cotale
24 o con forza o con frode altrui contrista.

第11歌

- 1 私たちは高き断崖^{きわ}の際にやって来た。崩落により
2 巨岩が無数に積み重なり、ぐると円周をなす縁を形作っていた。
3 遙か下には一段と惨たらしい群れがひしめいていたが、
4 地獄の深淵^{はな}がこの上にまで放^{はな}って来る
5 余りにおぞましい臭気に
6 私たちは後ろへと退き、とある大きな石棺の蓋の方へと
7 近づいた。見ると、石棺^{めい}には銘が刻まれ、
8 こう語っていた。『フォーティーンヌスによって正道を踏み外したる
9 教皇アナスタシウス（二世）を我は見守る。』
- 10 「下に降り^おるのを、遅らすほかあるまい。
11 最初、この邪悪な臭気に感覚が少し慣れ、
12 やがて気にならなくなるまで。」
- 13 師のこの言葉に対して、私は「時が無駄にならないよう、
14 それに見合うものを何か考えて下さい」と彼に言った。
15 すると師は、「私もそれを思案していたところだ」
- 16 と話し始め、「わが息子よ」と言葉を繋いだ。「これら巖の内側には
17 （同心円をなす）三つの圈〔第七圈・第八圈・第九圈〕が収められているが、
18 これまで同様、下に行けば行くほど、その圈は小さくなっている。
19 どの圈も呪われし霊たちに満ち溢れているが、
20 後で、彼らを見ただけで、事足りるよう、
21 彼らが押し込められた理由とその様を、今説明しておこう。
- 22 悪意はなべて天の憎しみを買うが、悪意の目的は（神や人間の）法
23 を蹂躪^{じゅうりん}することにある。暴力や欺瞞^{ぎまん}を用いて他者を悲しませる
24 [他者の権利を蹂躪する] ことこそが、この種の目的のすべてなのだ。

25 Ma perché frode è de l'uom proprio male,
26 più spiace a Dio; e però stan di sotto
27 li frodolenti, e più dolor li assale.
28 Di violenti il primo cerchio è tutto;
29 ma perché si fa forza a tre persone,
30 in tre gironi è distinto e costruito.
31 A Dio, a sé, al prossimo si pòne
32 far forza, dico in loro e in lor cose,
33 come udirai con aperta ragione.
34 Morte per forza e fertute dogliose
35 nel prossimo si danno, e nel suo avere
36 ruine, incendi e tollette dannose;
37 onde omicide e ciascun che mal fiere,
38 guastatori e predon, tutti tormenta
39 lo giron primo per diverse schiere.
40 Puote omo avere in sé man violenta
41 e ne' suoi beni: e però nel secondo
42 giron convien che senza pro si penta
43 qualunque priva sé del vostro mondo,
44 biscazza e fonde la sua facultade,
45 e piange là dov' esser de' giocondo.
46 Puossi far forza ne la deitàe,
47 col cor negando e bestimmiando quella,
48 e spregiando natura e sua bontade;
49 e però lo minor giron suggella
50 del segno suo e Soddoma e Caorsa
51 e chi, spregiando Dio col cor, favella.
52 La frode, ond' ogne coscienza è morsa,

- 25 殊に欺瞞^{ことぎまん}は人間固有の悪であるから、神は（暴力よりも）
 26 一層忌み嫌われる。このため、欺瞞者たちは下（の圏）に
 27 あって、それだけ激しい苦しみに襲われている。
 28 （これから訪れる）最初の圏〔第七圏〕は全員とも暴力者だが、
 29 暴力を加える相手は三者あるため、
 30 その圏は三つに弁別され、三つの環状帯から構成されている。
 31 即ち、《神に》、《自身に》、《隣人に》暴力をふるうことが
 32 あり得るからである。もっと正確に言えば、その相手と
 33 その所有物に対してである。聞けば、その明白な道理から解ろう。
 34 隣人を暴力で死に至らしめたり、重傷を
 35 負わせたり、隣人の所有物を壊したり、
 36 焼いたり、恐喝・強奪したりする者がいるが、
 37 こうした人殺しや悪意から人を傷つける者、
 38 破壊・放火者、略奪者たちはみな、この第一の環状地で
 39 それぞれ異なる群れに分かれて苦しめられている。
 40 人は、また、自らの手で自分自身や
 41 自分の資産に対しても暴力を加えることができる。
 42 このため、第二の環状地で空しく後悔することとなる。
 43 自らを汝らの世から奪う者〔自ら命を絶つ者〕、
 44 博打で財産を蕩尽^{とうじん}に帰す者、すなわち、
 45 喜ばしいはずのあの場所〔現世〕で泣く者は皆そうだ。
 46 人は、また、神に対して暴力を働くことができる、
 47 心の中で神を否定し、言葉で神性を冒瀆することによって、
 48 また、自然とその恵みを蔑ろ^{ないがし}にすることによって。
 49 このため、最小の（第三）環状地はその焼き印を（火の雨で）
 50 押している、男色者^{ソドム}や高利貸^{カオール}しに、
 51 また、心で神を侮蔑しながら話す者に。
 52 人を騙^{だま}して良心の呵責^{かしゃく}を感じぬ者はいないが、

53 può l'omo usare in colui ch 'n lui fida
54 e in quel che fidanza non imborsa.
55 Questo modo di retro par ch'incida
56 pur lo vinco d'amor che fa natura;
57 onde nel cerchio secondo s'annida
58 ipocresia, lusinghe e chi affattura,
59 falsità, ladroneccio e simonia,
60 ruffian, baratti e simile lordura.
61 Per l'altro modo quell' amor s'oblia
62 che fa natura, e quel ch'è poi aggiunto,
63 di che la fede spezial si cria;
64 onde nel cerchio minore, ov' è 'l punto
65 de l'universo in su che Dite siede,
66 qualunque trade in eterno è consunto".
67 E io: "Maestro, assai chiara procede
68 la tua ragione, e assai ben distingue
69 questo baràtro e 'l popol ch'e' possiede.
70 Ma dimmi: quei de la palude pingue,
71 che mena il vento, e che batte la pioggia,
72 e che s'incontran con sì aspre lingue,
73 perché non dentro da la città roggia
74 sono ei puniti, se Dio li ha in ira?
75 e se non li ha, perché sono a tal foggia?".
76 Ed elli a me "Perché tanto delira",
77 disse, "lo 'ngegno tuo da quel che sòle?
78 o ver la mente dove altrove mira?
79 Non ti rimembra di quelle parole
80 con le quai la tua Etica pertratta

- 53 人は、自分を信頼してくれる者も〔第九圏に対応〕
- 54 特別の信を置かぬ者も〔第八圏に対応〕、騙すことができる。
- 55 後者の欺瞞^{ぎまん}は、当然のことながら、人が（他者との間に）
- 56 自然に作り出す愛の絆を切り裂くばかりである。
- 57 それ故、その次の圏〔第八圏〕には巣くっている、
- 58 偽善^{あゆついしやう}、阿諛^{あゆ}追^{つい}従^{しやう}、魔術^{ぼくせん}・ト占^{やから}の輩、
- 59 贗造^{がんぞう}、窃盗、聖職売買、
- 60 女衒^{ぜげん}（誘惑者）、汚職収賄、その他これに類する汚穢^{おわい}が。
- 61 一方、前者の欺瞞は、生まれながら人間に備わる
- 62 友愛の情だけでなく、後に加わる情愛さえも忘却させる、
- 63 その情愛によってこそ（人と人の間に）特別の信頼が生まれるのに。
- 64 それ故、宇宙の中心にある最小の圏〔第九圏〕には
- 65 ディース〔ルチーフエロ〕が座を占め、
- 66 裏切り者は皆ここで、永遠の時をかけて苛^{さいな}まれ続ける。」
- 67 そこで私は言った、「師よ、筋道の立ったご説明はとても
- 68 解り易く、実に鮮やかに区分して下さいました、
- 69 地獄の深淵〔下層地獄〕とそれが所有する民を。
- 70 ですが、どうか教えて下さい、（第五圏のステュックスの）泥沼にいた者、
- 71 （第二圏で）風に拉っし去られ、（第三圏で）雨に打たれていた者、
- 72 （第四圏で）出会い頭にかくも罵倒し合っていた者たちは、
- 73 神の怒りに触れているなら、どうして真っ赤に照り映える
- 74 ^{ディース}都市の中で罰せられていないのでしょうか。また、もし（神の怒り
- 75 に）触れていないのなら、なぜそのような目に遭うのですか。」
- 76 すると師は私に言った、「なぜかくも論理の筋道を外れている？
- 77 いつものおまえらしからぬ理解の仕方だ。
- 78 それとも何か他のことに考えを寄せていたのか？
- 80 おまえの『（ニコマコス）倫理学』の
- 79 例の言葉を忘れたのか。そこに敷衍^{ふえん}されているではないか、

81 le tre disposizion che 'l ciel non vole,
82 incontenenza, malizia e la matta
83 bestialitade? e come incontenenza
84 men Dio offende e men biasimo accatta?
85 Se tu riguardi ben questa sentenza,
86 e rechiti a la mente chi son quelli
87 che sù di fuor sostegnon penitenza,
88 tu vedrai ben perché da questi felli
89 sien dipartiti, e perché men crucciata
90 la divina vendetta li martelli".
91 "O sol che sani ogne vista turbata,
92 tu mi contenti sì quando tu solvi,
93 che, non men che saver, dubbiar m'aggrata.
94 Ancora in dietro un poco ti rivolvi",
95 diss' io, "là dove di' ch'usura offende
96 la divina bontade, e 'l gróppo solvi".
97 "Filosofia", mi disse, "a chi la 'ntende,
98 nota, non pure in una sola parte,
99 come natura lo suo corso prende
100 dal divino 'ntelletto e da sua arte;
101 e se tu ben la tua Fisica note,
102 tu troverai, non dopo molte carte,
103 che l'arte vostra quella, quanto pote,
104 segue, come 'l maestro fa 'l discente;
105 sì che vostr' arte a Dio quasi è nepote.
106 Da queste due, se tu ti rechi a mente
107 lo Genesi dal principio, convene
108 prender sua vita e avanzar la gente;

- 81 《無抑制》、《悪意》、《正気を逸した
82 獣性》という天の嫌われる三つの性向が、
83 また、どうして《無抑制》の罪が
84 神に背く程度も^{けんせき}譴責〔罰〕も、より小さくなるのかが。
85 この見解をしっかりと考量し、
87 上の、ディースの外で罰を受けている者が
86 どんな者たちであったかを思い出すなら、
88 おまえにもよく解るはずだ。彼らがこの邪惡な者たちから
89 なぜ分け隔てられているのか、また、彼らを打ち懲らす
90 神の裁きの手になぜ怒りが減じているかが。
91 おお、心の目からあらゆる^{めいもう}迷妄を吹き払う太陽よ、
92 あなたが疑念を解いて下さり、嬉しくなりません。こうなると、
93 疑問を抱くことも、知ることに劣らぬほど喜ばしいものです。
94 もう一度、話を少し戻って頂けますか」と私は言った、
95 「先ほど、高利貸しは神の恵みを損なうと
96 仰いましたが、どうかこの絡まり〔疑問〕を解きほどいて下さい。」
97 「哲学は」と、師は言った、「それを聞く耳を持つ者には
98 一箇所だけではなく、様々な箇所で教えている、
100 神の知性と神の御技から
99 いかにして自然がその路を進むかを。
101 おまえの『(アリストテレースの) 自然学』を精読するなら、
102 頁を少し繰ったところに出ているのが判るはずだ。
104 ちょうど弟子が師に従うのと同じように、
103 人間の技は、可能な限り、自然に従う。
105 それ故、人間の技は、言わば、神の孫に当たるようなものだ。
108 人間が、自然と技〔労働〕の二つによって生活の糧を得、前に進む
107 べく（神によって）定められていることは、『創世記』の初めを
106 思い起こせば、判るはずだ。

109 e perché l'usuriere altra via tene,
110 per sé natura e per la sua seguace
111 dispregia, poi ch'in altro pon la spene.
112 Ma seguimi oramai che 'l gir mi piace;
113 ché i Pesci guizzan su per l'orizzonta,
114 e 'l Carro tutto sovra 'l Coro giace,
115 e 'l balzo via là oltra si dismonta”.

- 111 しかるに、高利貸しは、他の物〔利子〕に希望を託し、
109 別の道を進むため、自然〔師〕そのものと、
110 自然に付き従うもの〔弟子〕の双方を卑しめる。
112 だが、もう行った方が良かろう、^{そうぎょきゅう}双魚^{ほし}宮の魚たちは
114 水平線の上をぴちぴちと煌^{きら}めき、大熊座〔北斗七星〕のすべての
113 星々は、北西にかかっている。さあ、私に付いて来るがいい。
115 ずっと向こうに、この懸崖^{けんがい}の降^おり口がある。

CANTO XII

1 Era lo loco ov' a scender la riva
2 venimmo, alpestro e, per quel che v'er' anco,
3 tal, ch'ogne vista ne sarebbe schiva.
4 Qual è quella ruina che nel fianco
5 di qua da Trento l'Adice percosse,
6 o per tremoto o per sostegno manco,
7 che da cima del monte, onde si mosse,
8 al piano è sì la roccia discosciosa,
9 ch'alcuna via darebbe a chi sù fosse:
10 cotal di quel burrato era la scesa;
11 e 'n su la punta de la rotta lacca;
12 l'infamia di Creti era distesa
13 che fu concetta ne la falsa vacca;
14 e quando vidi noi, sé stesso morse,
15 sì come quei cui l'ira dentro fiacca.
16 Lo savio mio inver' lui gridò: "Forse
17 tu credi che qui sia 'l duca d'Atene,
18 che sù nel mondo la morte ti porse?
19 Pàrtiti, bestia, ché questi non vène
20 ammaestrato da la tua sorella,
21 ma vassi per veder le vostre pene".
22 Qual è quel toro che si slaccia in quella
23 c'ha ricevuto già 'l colpo mortale,
24 che gir non sa, ma qua e là saltella,
25 vid' io lo Minotauro far cotale;

第12歌

- 1 その崖を降りようと、私たちがやって来た場所は
2 峨^が峨^がとした懸^{けん}崖^{がい}であつたが、そこをさらに険しくしていたのは
3 眼という眼を背けたくなるおぞましい存在だった。
6 地震のせいか、支えを失ったためか、
7 かつてトレントの南で、山頂から
8 平野まで地滑りが生じ、
5 アーディジェ川の岸を
4 山崩れが襲ったことがある。その時、岩壁が割れ砕けたお陰で、
9 上から下へと降りる道がどうにか通じたが、
10 ちょうどそのように、この切り立つ崖から降り道ができていた。
11 陥没した急斜面の突端には
13 偽りの牝牛の中で孕^{はら}まれた
12 クレータ島の恥辱〔ミーノータウロス〕が横たわっていた。
14 私たちを目にすると、ちょうど胸の内が怒りで
15 食い尽くされる者のように、みずからを咬んだ。
16 わが知者は、かのものに向かって叫んだ、
18 「ここへ、上界〔現世〕でおまえに死をもたらした
17 アテネ公がやって来たとでも思ったか。
19 退散しろ、獣^{けだもの}め、ここにいるのは、
20 おまえの姉に策を授けられた者〔テーセウス〕ではない。
21 おまえらの劫^{こう}罰^{ばつ}を見るために進む者〔ダンテ〕だ。」
22 牡牛は（屠殺者から）死の鉄槌^{てつち}を受けて
23 牽^ひき綱から解かれたとき、
24 足取り覚つかず、あちらこちらへと跳ね回るが、
25 ミーノータウロスが怒りに悶える様も見れば、それに似ていた。

26 e quello accorto gridò: “Corri al varco;
27 mentre ch’è ’nfuria, è buon che tu ti cale”.

28 Così prendemmo via giù per lo scarco
29 di quelle pietre, che spesso moviensi
30 sotto i miei piedi per lo novo carco.

31 Io già pensando; e quei disse: “Tu pensi
32 forse a questa ruina, ch’è guardata
33 da quell’ ira bestial ch’i’ ora spensi.

34 Or vo’ che sappi che l’altra fiata
35 ch’i’ discesi qua giù nel basso inferno,
36 questa roccia non era ancor cascata.

37 Ma certo poco pria, se ben discerno,
38 che venisse colui che la gran preda
39 levò a Dite del cerchio superno,

40 da tutte parti l’alta valle feda
41 tremò sì, ch’i’ pensai che l’universo
42 sentisse amor, per lo qual è chi creda

43 più volte il mondo in caòsso converso;
44 e in quel punto questa vecchia roccia,
45 qui e altrove, tal fece riverso.

46 Ma ficca li ochhi a valle, ché s’approccia
47 la riviera del sangue in la qual bolle
48 qual che per violenza in altrui noccia”.

49 Oh cieca cupidigia e ira folle,
50 che sì ci sproni ne la vita corta,
51 e ne l’eterna poi sì mal c’immolle!

- 26 師はこの機を見逃さず、叫んだ、「降り口へ駆け込め。
- 27 奴が怒りに我を忘れている間に、（下へと通じる道を）降りるがいい。
- 28 こうして私たちは、落石の隙間を
- 29 道として下^{くだ}ったが、岩は私の足下で、
- 30 初めての重みのために、幾^{いくたび}度も揺れ動いた。
- 31 私が考え事をしながら進んでいると、師は言った、「さては
- 33 私がさっきその怒りを甲斐なきものにした、あ^{ミーノータウロス}の獣が
- 32 見張っていたこの崩落地に思いを寄せているようだな。
- 34 おまえに教えておこう。私が以前
- 35 この下層地獄に降りてきたとき、
- 36 この岩壁はまだ崩れ落ちてはいなかった。
- 37 私の記憶に間違いがなければ、ルチーフエロの手に落ちた
- 38 大いなる戦利品「義人」を、かの方「キリスト」が上の圏「リンボ」から
- 39 取り戻しにやって来られる、確か、ほんの少し前、
- 40 腐臭あふれる深き谷「地獄の深淵」すべてが
- 41 激しく打ち震えたのだ。このため私は、宇宙（全体）が
- 42 愛を感じ取ったと思った、愛によって世界が
- 43 幾度となく混沌状態に回帰すると信じる人たちが言うように。
- 44 あの瞬間、世界と同じだけ古い（地獄の）岩肌は、
- 45 ここでも他でも、このように崩れ落ちたのだ。
- 46 だが、目を凝らして下を見るがいい、血でできた川が
- 47 近づいてきた。あの川の中では
- 48 暴力によって他者を害した者たちが沸^{ふつ}々^{ふつ}と茹^ゆでられている。」
- 49 おお、人を盲目にする強欲よ、人を狂気へと駆る怒りよ、おまえらは
- 50 われわれを、束の間の（この世の）生で馬車馬の如く駆り立て、
- 51 （来世の）永遠の生で（血の川に）浸け、かくも悶え苦しませる！

52 Io vidi un'ampia fossa in arco torta,
53 come quella che tutto 'l piano abbraccia,
54 secondo ch'avea detto la mia scorta;
55 e tra 'l piè de la ripa ed essa, in traccia
56 corrien centauri, armati di saette,
57 come solien nel mondo andare a caccia.
58 Veggendoci calar, ciascun ristette,
59 e de la schiera tre si dipartiro
60 con archi e asticciuole prima elette;
61 e l'un gridò da lungi: "A qual martiro
62 venite voi che scendere la costa?
63 Ditel costinci; se non, l'arco tiro".
64 Lo mio maestro disse: "La risposta
65 faremo noi a Chirón costà di presso:
66 mal fu la voglia tua sempre sì tosta".
67 Poi mi tentò, e disse: "Quelli è Nesso,
68 che morì per la bella Deianira,
69 e fé di sé la vendetta elli stesso.
70 E quel di mezzo, ch'al petto sì*[si] mira,
71 è il gran Chirón, il qual nodrì Achille;
72 quell' altro è Folo, che fu sì pien d'ira.
73 Dintorno al fosso vanno a mille a mille,
74 saettando qual anima si svelle
75 del sangue più che sua colpa sortille".
76 Noi ci appressammo a quelle fiere isnelle:
77 Chirón prese uno strale, e con la cocca
78 fece la barba in dietro a le mascelle.
79 Quando s'ebbe scoperta la gran bocca,

- 52 環状に弧を描く幅広の濠〔血の川〕が見えたが、
54 先ほどわが導き手から聞いた通り、
53 平野全体を取り巻いていた。
- 55 そしてこの崖の麓と濠〔血の川〕の間を、隊列なして
56 ケンタウロス半人半馬たちが駆けていたが、弓矢を携えるその様は
57 現世で狩りに向かっていたいつもの姿と変わりなかった。
- 58 私たちが降りてくるのを目にすると、皆いっせいに立ち止まった。
60 そして弓と、前もって（矢筒から）選び出した矢を携えて、
59 群れから三頭が出てきた。
- 61 そのうちの一頭が遠くから大音^{だいおんじょう}声で呼ばわった、「おまえら、
62 どんな刑を受けに、崖を降りて来る？
63 そこから動かずに言え、さもないと、矢を射るぞ。」
- 64 わが師は言った、「返事は
65 われわれがそちらに近づいてから、ケイローンにしよう。
66 いつものその軽率^{はや}な逸^は気がおまえに災いを招いたのだ。」
- 67 その後、肘で私をつつき、こう囁いた、「あれがネッソスだ。
68 美しいデーイアネイラが原因^{もと}で死んだが、
69 自身の復讐をみずから成し遂げた。
- 70 あの中央の、真正面から注意深く見つめているのが、
71 巨大なケイローン、アキレウスの育ての親だ。
72 最後に残るはポロス。生前、その中身は怒りばかりだった。
- 73 濠〔血の川〕の周りを数え切れない騎馬軍団が矢を射ながら
75 駆けていく、それぞれの罪に応じて運命が定めた以上に
74 血の川から身体を外に出す者は皆、その的となる。」
- 76 私たちは、その駿馬^{しゅんめ}〔ケンタウロス〕の群に近づいた。
77 ケイローンは矢を一本取ると、その矢筈^{はず}を使って
78 髭を後ろへ、顎にかけてしごき分けた。
79 髭の下から大いなる口が露わになると、

80 disse a' compagni: "Siete voi accorti
81 che quel di retro move ciò ch'el tocca?
82 Così non soglion far li piè d'i morti".
83 E 'l mio buon duca, che già li er' al petto,
84 dove le due nature son consorti,
85 rispuose: "Ben è vivo, e sì soletto
86 mostrar li mi convien la valle buia;
87 necessità 'l ci 'nduce, e non diletto.
88 Tal si partì da cantare alleluia
89 che mi commise quest' officio novo:
90 non è ladron, né io anima fuia.
91 Ma per quella virtù per cu' io movo
92 li passi miei per sì selvaggia strada,
93 danne un de' tuoi, a cui noi siamo a provo,
94 e che ne mostri là dove si guada,
95 e che porti costui in su la groppa,
96 ché non è spirto che per l'aere vada".
97 Chirón si volse in su la destra poppa,
98 e disse a Nesso: "Torna, e sì li guida,
99 e far cansar s'altra schiera v'intoppa".
100 Or ci movemmo con la scorta fida
101 lungo la proda del bollor vermiglio,
102 dove i bolliti facieno alte strida.
103 Io vidi gente sotto infino al ciglio;
104 e 'l gran centauro disse: "E' son tiranni
105 che dier nel sangue e ne l'aver di piglio.
106 Quivi si piangon li spietati danni;
107 quivi è Alessandro, e Dionisio fero

- 80 部下たちに言った、「おまえたち気がついたか、
 81 あの後ろの男〔ダンテ〕は、自分の踏む石を動かしている。
 82 死人の足では、ああはならぬものだ。」
 83 わが頼もしき案内者は、はや、人性と馬性^{じんせい ばせい}という
 84 二つの本性^{せい}が結び合わさった胸元にまで近づいて、
 85 答えた、「確かにこの者〔ダンテ〕は生きている。ただ一人、
 86 彼にだけは、この暗き（地獄の）谷を見せねばならないのだ。
 87 必要に迫られてやって来た、楽しみのため〔物見遊山〕ではない。
 88 ハレルヤを歌う〔神を讃える〕所から降り来た^{ベアトリッチェ}方^{かた}が、
 89 この、かつてなき務めを私にお託しになった。
 90 彼は追い剥ぎでもなければ、私も盗人の魂でもない。
 92 ところで、私がかくも荒涼とした道を進んでいけるのも、
 91 一重に天の御力のお陰。その権能にかけて
 93 おまえたちの一人を、われらの付き添いとして貸してはくれないか。
 94 徒^{かち}で渡れる浅瀬^{あしか}の場所を教えてもらいたい、
 96 また、この者は空中を飛んで行けるような霊ではないため、
 95 背中に乗せて運んでもらいたい。」
 97 ケイローンは自分の右を向いてネッソスに言った、
 98 「引き返して、お二人を、言われたように、ご案内さしあげろ、もし
 99 別の（ケンタウロスの）分隊に出くわしたなら、道を避けさせろ。」
 100 かくして私たちは頼もしい護衛とともに
 101 岸に沿って進んだ。真っ赤に煮えたぎる血の中では
 102 ぐらぐらと茹でられる者たちが金切り声を発していた。
 103 目の所まで深く浸けられている〔額しか出ていない〕人々が見えたが、
 104 巨軀^くのケンタウロス〔ネッソス〕は言った、「あいつらは僭主どもだ。
 105 恣^{ほしいまま}に人の血を流し、力ずくで財を奪い取ったため、
 106 ここで、自らの血も涙もない罪業^{ざいごう}に泣いている。
 107 ここには（テッサリアの僭主）アレクサンドロスや、長きにわたって

108 che fé Cicilia aver dolorosi anni.
109 E quella fronte c'ha 'l pel così nero,
110 è Azzolino; e quell' altro ch'è biondo,
111 è Opizzo da Esti, il qual per vero
112 fu spento dal figliastro sù nel mondo".
113 Allor mi volsi al poeta, e quei disse:
114 "Questi ti sia or primo, e io secondo".
115 Poco più oltre il centauro s'affisse
116 sovr' una gente che 'nfino a la gola
117 pareva che di quel bulicame uscisse.
118 Mostrocci un'ombra da l'un canto sola,
119 dicendo: "Colui fésse in grembo a Dio
120 lo cor che 'n su Tamisi ancor si cola".
121 Poi vidi gente che di fuor del rio
122 tenean la testa e ancor tutto 'l casso;
123 e di costoro assai riconobb' io.
124 Così a più a più si facea basso
125 quel sangue, sì che cocea pur li piedi;
126 e quindi fu del fosso il nostro passo.
127 "Sì come tu da questa parte vedi
128 lo bulicame che sempre si scema",
129 disse 'l centauro, "voglio che tu credi
130 che da quest' altra a più a più giù prema
131 lo fondo suo, infin ch'el si raggiunge
132 ove la tirannia convien che gema.
133 La divina giustizia di qua punge
134 quell' Attila che fu flagello in terra,
135 e Pirro e Sesto; e in eterno munge

- 108 シチリアに虐政をしいた残忍なディオニューシオス一世がいる。
109 真っ黒な髪しか見えないが、あの額は
110 エッツェッリーノだ。もう一人の、金髪は
111 エステ家のオビッツォ二世だ。奴は、実は、
112 上の現世で、人でなしの息子に消された。」
113 これを聞いて私は詩人の方を振り向いた。すると師は言った、
114 「ここではネッソスがおまえの第一人者であり、私は二番手だ。」
115 少し先に進むと、ケンタウロスは立ち止まった。
116 その先を見下ろすと、あの煮えたぎる熱泉〔血の川〕から
117 喉元まで顔を出している人々が見えた。
118 独り、皆から離れている魂を示して、ネッソスは
119 言った、「あいつが、今もおテムズ川の岸で人々から
120 敬われている心臓を、神の胸元〔教会〕で刺し貫いた奴だ。」
121 次に、熱湯から頭のみならず胸全体を
122 出している人々が見えた。
123 その中には、私に見覚えのある者がたくさんいた。
124 こうしてだんだんと血の川は
125 浅くなり、ついには、足を茹でるだけとなった。
126 それで、私たちはそこから川を渡って行った。
127 「これまで（右手に）おまえは、熱泉が
128 常に浅くなっていくのを目にしたが」
129 とケンタウロスは言った、「信じてもらいたいだが、
130 この浅瀬から向こう（の左手）では、川底は
131 次第次第に深くなり、一回りして
132 僭主たちが呻き苦しまねばならぬ（最も深い）所に繋がっている。
133 向こう側〔浅瀬の左側〕では、神の正義がこの世の災厄と恐れられた
134 アッティラや（アキレウスの息子）ピュッロス、（ポンペーユスの息子）
135 セクストゥスを呻吟させ、沸き立つ血潮で、

136 le lagrime, che col bollor diserra,
137 a Rinier da Corneto, a Rinier Pazzo,
138 che fecero a le strade tanta guerra”.
139 Poi si rivolse e ripassossi 'l guazzo.

- 136 その冷血な心をこじ開け、リニエーリ・ダ・コルネートや
137 リニエーリ・パッツォから^{ほとぼし}迸る涙を永遠に搾り取っている。
138 奴らは、道ゆく道をさんざん戦場と化したからだ。」
139 こう言うと、ネッソスは振り向き、再び浅瀬を戻って行った。

CANTO XIII

1 Non era ancor di là Nesso arrivato,
2 quando noi ci mettemmo per un bosco
3 che da neun sentiero era segnato.
4 Non fronda verde, ma di color fosco;
5 non rami schietti, ma nodosi e 'nvolti;
6 non pomi v'eran, ma stecchi con tòsco.
7 Non han sì aspri sterpi né sì folti
8 quelle fiere selvagge che 'n odio hanno
9 tra Cècina e Corneto, i luoghi còlti.
10 Quivi le brutte Arpie lor nidi fanno,
11 che cacciar de le Strofade i Troiani
12 con tristo annunzio di futuro danno.
13 Ali hanno late, e colli e visi umani,
14 piè con artigli, e pennuto 'l gran ventre;
15 fanno lamenti in su li alberi strani.
16 E 'l buon maestro "Prima che più entre,
17 sappi che se' nel secondo girone",
18 mi cominciò a dire, "e sarai mentre
19 che tu verrai ne l'orribil sabbione.
20 Però riguarda ben; sì vederai
21 cose che torrien fede al mio sermone".
22 Io sentìa d'ogne parte trarre guai
23 e non vedea persona che 'l facesse;
24 per ch'io tutto smarrito m'arrestai.
25 Cred' io ch'ei credette ch'io credesse

第13歌

- 1 ネッソスが未だ対岸にたどり着かない
3 うちに、私たちは小径^{みち}の跡一つない
2 森の中に足を踏み入れた。
4 葉は緑ではなく、どす黒く、
5 枝はまっすぐではなく、節くれてねじ曲がり、
6 実はなく、毒々しい棘が生えていた。
9 人里を忌み嫌い、奥深く、チェーチナとコルネートの間に潜む
8 あの獰猛な生き物たちでさえ、かくも身の毛のよだつ茂み、
7 鬱蒼^{いばら}とした茨の藪に、棲みはしない。
10 ここには、かつて、トロイア人に不吉な未来^{わざわい}の禍を予言し、
12 ストロファデスの島々から彼らを追い払った
11 汚く醜怪なハルユピュイアどもが巣くっている。
13 翼は幅広で、人の顔と首を持ち、
14 脚はかぎ爪で、大きな腹は羽毛^{うもう}に覆われ、
15 奇怪な木々の上で、呻^{うめ}きともつかぬ奇妙な鳴き声を発している。
16 すると、優れた師は私に話し始めた、「中に入る前に、
17 心得ておくがいい、今おまえがいるのは第二環状地だ。
19 恐るべき砂漠〔第三環状地〕に着くまで、
18 おまえはずっとこの領域にいることになる。
20 それ故、しっかりと見ておけ、私の言葉など信じられなくなる
21 ほどの物事を、目にするようになるからだ。」
22 至るところから、悲鳴の上がるのが聞こえてきたが、
23 声の主はどこにも見あたらなかった。
24 私はすっかり狼狽^{ぬし}し、立ち止まった。
27 今思うに、あの荊^{いばら}の茂みの間から、私たちに隠れて

26 che tante voci uscisser, tra quei bronchi,
27 da gente che per noi si nascondesse.
28 Però disse 'l maestro: "Se tu tronchi
29 qualche fraschetta d'una d'este piante,
30 li pensier c'hai si faran tutti monchi".
31 Allor porsi la mano un poco avante
32 e colsi un ramicel da un gran pruno;
33 e 'l tronco suo gridò: "Perché mi schiante?".
34 Da che fatto fu poi di sangue bruno,
35 ricominciò a dir: "Perché mi scerpi?
36 non hai tu spirto di pietade alcuno?
37 Uomini fummo, e or siam fatti sterpi:
38 ben dovrebb' esser la tua man più pia,
39 se state fossimo anime di serpi".
40 Come d'un stizzo verde ch'arso sia
41 da l'un de' capi, che da l'altro geme
42 e cigola per vento che va via,
43 sì de la scheggia rotta usciva insieme
44 parole e sangue; ond' io lasciai la cima
45 cadere, e stetti come l'uom che teme.
46 "S'elli avesse potuto creder prima",
47 rispuose 'l savio mio, "anima lesa,
48 ciò c'ha veduto pur con la mia rima,
49 non averebbe in te la man distesa;
50 ma la cosa incredibile mi fece
51 indurlo ad ovra ch'a me stesso pesa.
52 Ma dilli chi tu fosti, sì che 'n vece
53 d'alcun' ammenda tua fama rinfreschi

- 26 このような多くの呻^{うめ}き声を発している者たちがいると
 25 私が思い込んでいると、師は思い出った。
 28 それで、師は私に言った、「もしおまえが、そこの灌木^{かんぼく}の
 29 一つから、小枝^{ひとお}を一折りしてみれば、
 30 おまえの抱く考えもすべて切り落とされてしまうだろう。」
 31 言われたとおり、私は、恐る恐る手を前に伸ばし、
 32 大きな茨の茂みから細い枝を一本手折^{たお}った。
 33 すると、その幹は叫んだ、「なぜ私をもぎ取る？」
 34 次いで、幹（の口）が血で赤黒く染まると、
 35 再び、言葉を継^ついだ、「なぜ私を引きちぎる？」
 36 おまえには、ひとかけらの憐憫の情もないのか？
 37 今は茂みに変えられているが、私たちはかつて人間だった。
 39 たとえ私たちが蛇の魂であったとしても、
 38 おまえの手にはもっと情けがあってもよいはずだ。」
 40 生^{なま}の薪を火にくべると、
 41 一方の端が燃え、もう一方の端から樹液が染み出し、
 42 吹き出す蒸気の漏れざまに、シューシューと音を立てるが、
 43 ちょうどそのように、枝をもがれた幹の口から
 44 言葉と血がともに噴き出してきた。私は、枝を
 45 地に落とし、怯えた人のように立ちすくんだ。
 46 「傷ついた魂よ」と、わが賢者は（その茂みに）答えて言った、
 47 「もしこの者が、自分の目で見る前に
 48 私の詩の中で目にしただけで、信じることができていたならば、
 49 君に手を伸ばすようなことはしなかっただろう。
 50 しかし、余りにも信じがたいことゆえに、このような
 51 振る舞いをさせてしまい、私自身、心痛む思いだ。
 52 だが、君が、生前、何者だったかを彼に教えてくれれば、
 53 幾ばくかの償いとして、彼が上の世界で君の名声を

54 nel mondo sù, dove tornar li léce”.
55 E 'l tronco : “Sì col dolce dir m'adeschi,
56 ch'i non posso tacere; e voi non gravi
57 perch' io un poco a ragionar m'inveschi.
58 Io son colui che tenni ambo le chiavi
59 del cor di Federigo, e che le volsi,
60 serrando e diserrando, sì soavi,
61 che dal secreto suo quasi ogn' uom tolsi;
62 fede portai al glorioso officio,
63 tanto ch'i ne perde' li sonni e ' polsi.
64 La meretrice che mai da l'ospizio
65 di Cesare non torse li occhi putti,
66 morte comune e de le corti vizio,
67 infiammò contra me li animi tutti;
68 e li 'nfiammati infiammar sì Augusto,
69 che ' lieti onor tornaro in tristi lutti.
70 L'animo mio, per disdegnoso gusto,
71 credendo col morir fuggir disdegno,
72 ingiusto fece me contra me giusto.
73 Per le nove radici d'esto legno
74 vi giuro che già mai non ruppi fede
75 al mio signor, che fu d'onor sì degno.
76 E se di voi alcun nel mondo riede,
77 conforti la memoria mia, che giace
78 ancor del colpo che 'nvidia le diede”.
79 Un poco attese, e poi “Da ch'el si tace”,
80 disse 'l poeta a me, “non perder l'ora;
81 ma parla, e chiedi a lui, se più ti piace”.

- 54 ^{あらた}新にしてくれよう。彼は現世に戻ることを許された身なのだ。」
- 55 すると幹の切り口は言った、「これほど甘美な言葉で誘われては、
- 56 黙ってはられない。喜びに捕らえられるあまり、
- 57 つい話が延びて、君たちを煩わせなければよいが。
- 58 私は、（皇帝）フリードリヒ二世の心の
- 59 鍵を二つながら握っていた者だ。その鍵を余りに巧みに回し、
- 60 （その一つで）その心を開け（もう一つで）閉めしたために、
- 61 彼の秘奥^{ひおう}からほとんどすべての人間を私は締め出した。
- 62 ^は栄えある職務に忠信かけて励むあまり、
- 63 私は寝食を忘れ、更には、命脈も失った。
- 64 娼婦が、帝王の住まいから
- 65 その蠱惑^{こわく}の眼差しを逸^そらすことは決してないからだ。
- 66 世に死をもたらし、宮廷を好むこの悪徳は
- 67 私に対する（嫉妬の）炎を、すべての者の胸に燃え上がらせた。
- 68 炎に燃え立った者たちは、さらに、陛下に炎を燃え上がらせ、
- 69 喜ばしき誉れは、悲しき歎きに変じた。
- 70 わが心は、侮蔑の嗜好ゆえに、
- 71 死によって、侮蔑から逃れると思い、
- 72 正しき自分に対し、自分を不正な者とした。
- 73 この木の奇^くしき新たな根にかけて君らに誓うが、
- 74 私は、一度たりとも、わが主君に対する忠誠を破ったことなど
- 75 なかった。主君はそれほどまでに誉れにふさわしいお方だった。
- 76 それで、君らの一方が地上に戻るよう祈っているが、その暁には、
- 77 どうか私についての記憶「評判」を再び立ち上がらせて欲しい。
- 78 嫉妬に打ち倒され、今なお、地に伏したままなのだ。」
- 79 詩人は、しばらく間を置いてから、私に口を開いた。
- 80 「彼は口をつぐんだようだから、時を逸することなく、話し給え。
- 81 もっと訊きたいことがあれば、（今のうちに）訊いておくがよい。」

82 Ond' io a lui; "Domandal tu ancora
83 di quel che credi ch'a me satisfaccia;
84 ch'i non potrei, tanta pietà m'accora".
85 Perciò ricominciò : "Se l'om ti faccia
86 liberamente ciò che 'l tuo dir priega,
87 spirito incarcerato, ancor ti piaccia
88 di dirne come l'anima si lega
89 in questi nocchi; e dinne, se tu puoi,
90 s'alcuna mai di tai membra si spiega".
91 Allor soffìò il tronco forte, e poi
92 si convertì quel vento in cotal voce:
93 "Brevemente sarà risposto a voi.
94 Quando si parte l'anima feroce
95 dal corpo ond' ella stessa s'è disvelta,
96 Minòs la manda a la settima foce.
97 Cade in la selva, e non l'è parte scelta;
98 ma là dove fortuna la balestra,
99 quivi germoglia come gran di spelta.
100 Surge in vermena e in pianta silvestra:
101 l'Arpie, pscendo poi de le sue foglie,
102 fanno dolore, e al dolor fenestra.
103 Come l'altre verrem per nostre spoglie,
104 ma non però ch'alcuna sen rivesta,
105 ché non è giusto aver ciò ch'om si toglie.
106 Qui le strascineremo, e per la mesta
107 selva saranno i nostri corpi appesi,
108 ciascuno al prun de l'ombra sua molesta".
109 Noi eravamo ancora al tronco attesi,

- 82 この言葉に対して私は言った、「私が得心するとお思になることを
83 どうか先生の方からお尋ね下さい。
- 84 私にはとてもできません。哀れでたまらないのです。」
- 85 そのため、師が語を継いだ、「君の希^{こいねが}ったことが、
86 その言葉通り、惜しみなく叶えられんことを。
- 87 だが、囚われの魂よ、もし差し支えなければ、さらに
88 語ってくれないか。（この）魂はどのようにしてこの節くれた
89 茂みに結ばれるのか。そして、もし知っているなら、教えてくれ、
90 こうした四肢からいつの日か解かれる魂があるのかどうかを。」
- 91 すると、幹の折口が激しく息を吹き出すと、
92 その風は、たちまち、次のような声に変わった。
- 93 「君らに手短に答えよう。
- 94 獐^{しやう}猛の魂が、自らの手で、
95 自身を引き抜いた肉体から分かれたると、
96 ミーノースによって第七の口〔圈〕へと送られ、
- 97 この森に堕ちてくるが、場所が予め定まっているわけではない。
98 偶然のおもむくままに飛ばされ、
99 スペルタ小麦の種粒の如く、落ちた所で芽を吹く。
- 100 か細い若枝で起き上がると、（やがて）野生の植物に成長する。
101 すると、ハルピュイアどもが、その葉をついばみ、
102 苦しみを作り出すと同時に、苦しみの窓を作り出す。
- 103 他^{ほか}の魂たちと同様、私たちも自身の亡骸^{なきがら}を取りに（地上に）行くが、
104 誰一人として、それを身につける者はいない。
- 105 自分で脱ぎ捨てたものを着るのは道理に合わないからだ。
- 106 私たちはここまで捨て着を引きずってくるが、その時、森は悲愁に
108 包まれる。私たちの肉体は、それを忌^いみ苛^{さい}む
107 魂でできた茨の灌木に、一つずつ、吊り下げられるからだ。」
- 110 私たちは、他^{ほか}にも話したいことがあるかと、

110 credendo ch'altro ne volesse dire,
111 quando noi fummo d'un romor sorpresi,
112 similmente a colui che venire
113 sente 'l porco e la caccia a la sua posta,
114 ch'ode le bestie, e le frasche stormire.
115 Ed ecco due da la sinistra costa,
116 nudi e graffiati, fuggendo sì forte,
117 che de la selva rompieno ogni rosta.
118 Quel dinanzi: "Or accorri, accorri, morte!".
119 E l'altro, cui pareva tardar troppo,
120 gridava: "Lano, sì non furo accorte
121 le gambe tue a le giostre dal Toppo!".
122 E poi che forse li fallia la lena,
123 di sé e d'un cespuglio fece un groppo.
124 Di dietro a loro era la selva piena
125 di nere cagne, bramose e correnti
126 come veltri ch'uscisser di catena.
127 In quel che s'appiattò miser li denti,
128 e quel dilaceraro a brano a brano;
129 poi sen portar quelle membra dolenti.
130 Presemi allor la mia scorta per mano,
131 e menommi al cespuglio che piangea
132 per le rotture sanguinenti in vano.
133 "O Iacopo", dicea, "da Santo Andrea,
134 che t'è giovato di me fare schermo?
135 che colpa ho io de la tua vita rea?".
136 Quando 'l maestro fu sovr' esso fermo,
137 disse: "Chi fosti, che per tante punte

- 109 なおもその幹に注意を傾けていたが、
111 そのとき、私たちは突然の騒々しい物音に驚き打たれた、
114 犬たちが吠え、枝葉がざわめくのを耳にして、
113 自分の待ち伏せ場所に猟犬に追われた猪が、
112 迫り来るのに気づいた狩人のように。
115 すると、左側から、真っ裸で全身搔き傷だらけの二人の
117 男が、（立ちほだかる）森の枝という枝を片っ端から折りながら、
116 死にものぐるいで逃げてきた。
118 先に行く男が叫んだ、「さあ早く、死よ、助けに来てくれ！」
119 もう一人の男は、自分がずいぶん後れをとっていると気づき、
121 「ラーノ、トッポあたりの槍試合じゃあ
120 おまえの脚はこうも速くはなかったぞ！」と叫ぶと、
122 息が切れたためか、
123 自身と灌木の茂みをひとから一絡まりにして身を隠した。
126 鎖から放たれたばかりの猟犬さながらに、
125 素速く駆けてくる貪婪な黒い雌犬の群れで、
124 二人の背後の森は埋め尽くされた。
127 犬たちは、茂みに身を潜めている男に牙を突き立て、
128 一片また一片と、千々に引き裂くと、
129 苦痛にうごめくその肉片をくわえて立ち去った。
130 それから、わが導者は私の手を取って、
131 その灌木の茂みのもとへ私を連れて行った。
132 茂みは、むなしく血を噴く数々の折れ口を通して泣いていた。
133 「おお、ヤーコボ・ダ・サンタンドレアよ、
134 私を隠れ蓑して、一体何の得があったというのだ？
135 おまえの罪深い人生に対して、私にどんな咎とががあるというのか？」
136 と言うと、師はその灌木の脇に立ち止って
137 言った、「君は（生前）誰だったのか。あちこちの（折れた）幹の

138 soffi con sangue doloroso sermo?”.
139 Ed elli a noi: “O anime che giunte
140 siete a veder lo strazio disonesto
141 c’ha le mie fronde sì da me disgiunte,
142 raccoglietele al piè del tristo cesto.
143 I’ fui de la città che nel Batista
144 mutò ’l primo padrone; ond’ ei per questo
145 sempre con l’arte sua la farà trista;
146 e se non fosse che ’n sul passo d’Arno
147 rimane ancor di lui alcuna vista,
148 que’ cittadin che poi la rifondarno
149 sovra ’l cener che d’Attila rimase,
150 avrebber fatto lavorare indarno.
151 Io fei gibetto a me de le mie case”.

- 138 先から、血とともに悲嘆の言葉を噴き出しているが。」
139 すると、灌木は私たちに答えた、「体から、かくも無惨に
140 枝や葉を引き剥がされ、^{はずかし}辱めを受けた
141 この私を見に来てくれた魂たちよ、
142 枝葉をこの不幸な茂みの足元に集めてくれ。
143 私は、その最初の守護神「マールス」を洗礼者ヨハネに変えた
144 都市^{まち}「フィレンツェ」の者だ。それで、この行いが原因で、
145 ^{マールス}軍神は、その技「戦争」でこの都市^{まち}を絶えず悲嘆に陥れるだろう。
146 もしも、アルノ川に架かる橋「ポンテ・ヴェツキヨ」の上に、
147 この神像のよすがが今なお残っていなかったならば、
148 のちにアッティラによって灰燼^{かいじん}に帰した
149 都市^{まち}を再建した市民の労苦は
150 水泡に帰していただろう。
151 私は、自分の家を自分の絞首台に変えた。」

CANTO XIV

- 1 Poi che la carità del natìo loco
2 mi strinse, raunai le fronde sparte
3 e rende'le a colui, ch'era già fioco.
4 Indi venimmo al fine ove si parte
5 lo secondo giron dal terzo, e dove
6 si vede di giustizia orribil arte.
7 A ben manifestar le cose nove,
8 dico che arrivammo ad una landa
9 che dal suo letto ogne pianta remove.
10 La dolorosa selva l'è ghirlanda
11 intorno, come 'l fosso tristo ad essa;
12 quivi fermammo i passi a randa a randa.
13 Lo spazzo era una rena arida e spessa,
14 non d'altra foggia fatta che colei
15 che fu da' piè di Caton già soppressa.

16 O vendetta di Dio, quanto tu dèi
17 esser temuta da ciascun che legge
18 ciò che fu manifesto a li occhi mei!

19 D'anime nude vidi molte gregge
20 che piangean tutte assai miseramente,
21 e pareva posta lor diversa legge.
22 Supin giacea in terra alcuna gente,
23 alcuna si sedea tutta raccolta,

第14歌

- 1 生まれ故郷を懐かしむ思いに胸が締めつけられ、同郷の^{よし}誼みから
2 私はあたりに散らばった枝葉をかき寄せて、
3 もはや声もかすれ果てていたその木に返してやった。
4 そこから私たちは、第二の環状地と
5 第三の環状地を分かつ境までやって来た。
6 そこから正義の恐るべき^{わざ}業を臨むことができた。
7 かつて見たことも想像したこともない光景を過つことなく示そう。
8 私たちが着いたところは、その面^{おもて}からすべての植生を
9 一掃する殺伐とした平地であった。
10 その周りを（自殺者の）苦患の森が葉飾りのように取り巻き、
11 その森をさらに呵^か責^{しゃく}の濠^{ほり}〔プレゲトーンの血の川〕が^{いじょう}囲繞する。
12 その平地の端の端で私たちは歩みを止めた。
13 地面は乾燥した砂が堅く詰まり、
14 かつて（ウティカの）カトーの足が踏んだ
15 砂地といささかも違わなかった。
- 16 おお、神の応報よ、汝をいかに
17 怖^{かしこ}れ畏むことになろうか、わが目の前に
18 明かされた光景を読む者は誰であれ。
- 19 裸^{もうじや}の亡者たちの群れがここかしこに見えた。
20 みな、哀れむべき様子で、苦痛の極みに泣いていたが、
21 それぞれの群に、異なる掟が課されているのが見て取れた。
22 地面に仰向けに^ふ臥している者たちもいれば、
23 全員、体を丸くすばめてしゃがんでいる者たち、

24 e altra andava continuiamente.
25 Quella che giva 'ntorno era più molta,
26 e quella men che giacëa al tormento,
27 ma più al duolo avea la lingua sciolta.
28 Sovra tutto 'l sabbion, d'un cader lento,
29 piovean di foco dilatate falde,
30 come di neve in alpe senza vento.
31 Quali Alessandro in quelle parti calde
32 d'India vide sopra 'l sùo stuolo
33 fiamme cadere infino a terra salde,
34 per ch'ei provide a scalpitar lo suolo
35 con le sue schiere, acciò che lo vapore
36 mei si stingueva mentre ch'era solo:
37 tale scendeva l'etternale ardore;
38 onde la rena s'accendea, com' esca
39 sotto focile, a doppiar lo dolore.
40 Sanza riposo mai era la tresca
41 de le misere mani, or quindi or quinci
42 escotendo da sé l'arsura fresca.
43 I' cominciai: "Maestro, tu che vinci
44 tutte le cose, fuor che ' demon duri
45 ch'a l'intrar de la porta incontra uscinci,
46 chi è quel grande che non par che curi
47 lo 'ncendio e giace dispettoso e torto,
48 sì che la pioggia non par che 'l maturi?".
49 E quel medesmo, che si fu accorto
50 ch'io domandava il mio duca di lui,
51 gridò: "Qual io fui vivo, tal son morto.

- 24 休みなく歩き続けている者たちがいた。
- 25 歩き回っている者たちが一番多く、
- 26 臥^ふして責め苦を受けている者たちが一番少なかったが、
- 27 神罰に対する（苦情の）口数は一番多かった。
- 30 風のない日の山に雪が舞い落ちるように、
- 28 茫漠^{ぼうばく}とした砂原一面に、ゆっくりと落下しながら
- 29 炎の牡丹^{ぼたん}雪が降りしきっていた。
- 31 アレクサンドロス大王は、インドの熱帯地域で
- 32 自身の軍勢の上に炎が降りかかり、
- 33 地に落ちてても火勢^{かせい}の衰えぬのを目にすると、
- 36 火は単独のう치가消しやすいことから、
- 34 地面（に落ちた火）を
- 35 兵士たちに命じて踏み消させたが、
- 37 ちょうどその時さながら、永劫の火炎が降り注いでいた。
- 39 このため、砂は、火打ち金^{かね}の下^{ほくち}の火口のように
- 38 火を発し、（亡者^{もうじや}たちの）苦痛を倍加していた。
- 40 痛ましくも甲斐のない両手^{もろて}の乱舞^{ひととき}が一時も
- 41 休むことはなかった。ここかと思えば、またあちら、
- 42 次々とわが身に降りかかる、新鮮な火の雨を払い除けていた。
- 43 私は口を切った、「すべての障害に打ち勝つ師よ、
- 45 （ディースの）城門の入り口で私たちに刃向かった
- 44 頑^{かたく}な悪魔たちは別として。
- 46 あの巨漢の男は何者ですか？ 火攻めを意に介さないかのように、
- 47 体をよじって（天を）蔑^{さげす}んで横たわっています。
- 48 （火の）雨の拷問もこの者には効き目がないように見えます。」
- 49 すると、自分のことが訊ねられていると
- 50 気づいたこの亡者は、自分から大声を張り上げて言った、
- 51 「俺は、生きていたときと同様、死んでも変わりませぬ。

52 Se Giove stanchi 'l suo fabbro da cui
53 crucciato prese la folgore aguta
54 onde l'ultimo di percosso fui;
55 o s'elli stanchi li altri a muta a muta
56 in Mongibello a la focina negra,
57 chiamando "Buon Vulcano, aiuta, aiuta!",
58 sì com' el fece a la pugna di Flegra,
59 e me saetti con tutta sua forza:
60 non ne potrebbe aver vendetta allegra".
61 Allora il duca mio parlò di forza
62 tanto, ch'i' non l'avea sì forte udito:
63 "O Capaneo, in ciò che non s'ammorza
64 la tua superbia, se' tu più punito;
65 nullo martiro, fuor che la tua rabbia,
66 sarebbe al tuo furor dolor compìto".
67 Poi si rivolse a me con miglior labbia,
68 dicendo: "Quei fu l'un d'i sette regi
69 ch'assiser Tebe; ed ebbe e par ch'elli abbia
70 Dio in disdegno, e poco par che 'l pregi;
71 ma, com' io dissi lui, li suoi dispetti
72 sono al suo petto assai debiti fregi.
73 Or mi vien dietro, e guarda che non metti,
74 ancor, li piedi ne la rena arsiccia;
75 ma sempre al bosco tien li piedi stretti".
76 Tacendo divenimmo là 've spiccia
77 fuor de la selva un piccol fiumicello,
78 lo cui rossore ancor mi raccapriccia.
79 Quale del Bulicame esce ruscello

52 たとえゼウスが自身の^{ウルカーヌス}鍛冶屋を疲れ果てるまで働かせようとも、
 53 ～怒りに駆られたゼウスが、この鍛冶屋から切っ先鋭い稲妻
 54 を取って、生涯最後の日に俺を撃ったが～。
 58 またゼウスが（巨人族と）プレグラの野で戦った時のように、
 57 たとえ『助けてくれ、^{らつわん}辣腕のウルカーヌスよ、助けてくれ』
 55 と呼ばわっては、エトナの黒い火口に^す棲む^{キュクロプス}他の鍛冶屋どもを
 56 疲れ果てるまで代わる代わる働かせようとも、
 59 あらん限りの力で俺に^{いかづち}雷を射てみせようと、この俺に
 60 対して復讐^{かいさい}の快哉を叫ぶことなど、あいつにできはしない。」
 61 するとわが師は、かつて私が聞いたこともない
 62 激しい口調で話し始めた、
 63 「おお、カパネウスよ、おまえの高慢の火は弱まることを
 64 知らぬ、だからこそ一層厳しく罰せられているのだ。
 65 いかなる責め苦も、おまえ自身の（不毛の）怒り以上に、
 66 おまえの狂った^{しんい}臆^{おそ}恚^いにふさわしい罰はないのだ。」
 67 こう言うと、師は私の方を振り向いて、以前の穏やかな顔つきで
 68 言った、「あの男は、テーバイを包囲した七将の一人だ。
 69 生前も神を見下し、（死んだ）今もなお、あのよう
 70 に見下し、神を蔑^{さげす}んでいるのがよく判るだろう。
 71 だが、私がカパネウスに言ったように、その^{あざけ}嘲りこそが、
 72 この男の胸にまさに似合いの勲章なのだ。
 73 さあ私の後について来るがいい、だが今まで通りこれからも
 74 気をつけて、火を発する熱砂に足を踏み込まぬよう、
 75 常に足を森に向けて歩くのだぞ。」
 76 森に沿って黙々と進んでいくうち、私たちは小川が
 77 （自殺者の）森から外へ^{ほとばし}迸り出ている所へとやって来たが、
 78 その赤さに、今なお、^{りつぜん}慄然とせずにはいられない。
 79 ちょうど、ブリカーメから湧き出てくる熱水を、

80 che parton poi tra lor le peccatrici,
81 tal per la rena giù sen giva quello.
82 Lo fondo suo e ambo le pendici
83 fatt' era 'n pietra, e ' margini dallato;
84 per ch'io m'accorsi che 'l passo era lici.
85 "Tra tutto l'altro ch'i' t'ho dimostrato,
86 poscia che noi intrammo per la porta
87 lo cui sogliare a nessuno è negato,
88 cosa non fu da li tuoi occhi scorta
89 notabile com' è 'l presente rio,
90 che sovra sé tutte fiammelle ammorta".
91 Queste parole fuor del duca mio;
92 per ch'io 'l pregai che mi largisse 'l pasto
93 di cui largito m'avëa il disio.
94 "In mezzo mar siede un paese guasto",
95 diss' elli allora, "che s'appella Creta,
96 sotto 'l cui rege fu già 'l mondo casto.
97 Una montagna v'è che già fu lieta
98 d'acqua e di fronde, che si chiamò Ida;
99 or è diserta come cosa vieta.
100 Rëa la scelse già per cuna fida
101 del suo figliuolo, e per celarlo meglio,
102 quando piangea, vi faceva far le grida.
103 Dentro dal monte sta dritto un gran veglio,
104 che tien volte le spalle inver' Dammiata
105 e Roma guarda come s'io specchio.
106 La sua testa è di fin oro formata,
107 e puro argento son le braccia e 'l petto,

- 80 湯^ゆ女^なたちが自分たちの家に引き入れるように、この熱き小川も
 81 （主流から水路に流れ）熱砂^{よぎ}を横切^{よぎ}って下っていた。
 82 その川床も、兩岸も、また（熱砂の側の）
 83 側面も石でできていた。
 84 それで私は、ここが通り道だと気がついた。
 87 「誰でも、勞せずして、その敷居^{また}を跨ぐことのできる
 86 （地獄の）門をわれらがくぐって以来、
 85 私がおまえに見せたすべてのものの中で、
 89 この小川ほど特筆に値するものを
 88 おまえは目にしたことはない。
 90 この上空では、すべての火が消えてしまうのだ。」
 91 これがわが導者の言葉だったが、これによって
 93 この食べ物に対する食欲がかき立てられた私は
 92 もっと食事を与えて下さるよう、お願いした。
 94 すると、師は答えて言った、「地中海の真ん中に、クレータと
 95 呼ばれる、今は凋^{ちようらく}落せし島がある。太古の昔、この島の（最初の）
 96 王〔サートゥルヌス〕が治めていたとき、世界は清純無垢だった。
 97 島には、イーダと呼ばれる山がある。かつては、
 98 豊かな水で潤い、緑の木々で覆われていたが、
 99 今は、古きものの常として、不毛の山となっている。
 100 女神レアーは、その昔、自分の息子〔ゼウス〕の揺籃^{ようらん}の地として
 101 信頼おけるこの島を選んだ。赤子〔ゼウス〕の泣くたびに、
 102 （祭司^{クーレーテス}団に）大声を上げさせて、うまく子を隠した。
 103 この山の内部には、年ふりた巨人（の像）がまっすぐに立ち、
 104 その背をダミヤート〔エジプトの町〕に向け、
 105 自身の鏡を見るように、ローマ（の方向）を見つめている。
 106 その頭は美しい純金で形作られ、
 107 両腕と胸は純銀でできている。

108 poi è di rame infino a la forcata;
109 da indi in giuso è tutto ferro eletto,
110 salvo che 'l destro piede è terra cotta;
111 e sta 'n su quel, più che 'n su l'altro, eretto.
112 Ciascuna parte, fuor che l'oro, è rotta
113 d'una fessura che lagrime goccia,
114 le quali, accolte, fóran quella grotta.
115 Lor corso in questa valle si diroccia;
116 fanno Acheronte, Stige e Flegetonta;
117 poi sen van giù per questa stretta doccia,
118 infin, là ove più non si dismonta,
119 fanno Cocito; e qual sia quello stagno
120 tu lo vedrai, però qui non si conta".
121 E io a lui: "Se 'l presente rigagno
122 si diriva così dal nostro mondo,
123 perché ci appar pur a questo vivagno?".
124 Ed elli a me: "Tu sai che 'l loco è tondo;
125 e tutto che tu sie venuto molto,
126 pur a sinistra, giù calando al fondo,
127 non se' ancor per tutto 'l cerchio vòlto;
128 per che, se cosa n'apparisce nova,
129 non de' addur maraviglia al tuo volto".
130 E io ancor: "Maestro, ove si trova
131 Flegetonta e Lète? ché de l'un taci,
132 e l'altro di' che si fa d'esta piovà".
133 "In tutte tue question certo mi piaci",
134 rispuose, "ma 'l bollor de l'acqua rossa
135 dovea ben solver l'una che tu faci.

- 108 胸下から股までは銅で、
 109 そこから下はすべて混じりけのない鉄だが、
 110 右足だけは素焼きで、
 111 左足よりも右足に重心を載せて立っている。
 112 黄金の頭部を除いて、首から足までの各部分は
 113 ヒビが入り、その亀裂から涙が滴り、
 114 寄り集まっては、（巨人の置かれた）^{どうけつ}洞穴の岩底に^{うが}穴を穿つ。
 115 涙の流れは、岩から岩へと伝って、この（地獄の）谷まで降り、
 116 アケローン、ステュックス、プレゲトーンを作り出す。
 117 それからこの狭い水路を通して流れ降り、
 118 最後に、もはやこれより下に降りていけないところで、
 119 コーキュートスを形作る。その湖がどのようなものか、
 120 おまえも見ろだろうから、ここでは話さない。」
 121 それで私は師に訊ねた、「もしこの水流が、仰せのように、
 122 地上世界から発しているのなら、なぜこの（第七圏の）
 123 端〔第三環状地〕で初めてわれわれの前に姿を現したのですか？」
 124 これに師は答えた、「おまえも解っているとおり、この場所は
 125 円形をなしている。常に左回りで（地獄の）底に向かって
 126 降りながら、ずいぶん巡って来たとはいえ、
 127 それでもまだ、円周のすべてを回り尽くしたわけではない。
 128 それゆえ、見たことのないものが現れたとしても、
 129 驚く顔をするには及ばない。」
 130 私は重ねて訊いた、「師よ、プレゲトーンとレーターはどこに
 131 あるのですか。後^{レーター}者については何も仰っていません。前^{プレゲトーン}者^{レーター}に
 132 ついてはそれが涙の雨でできているとのご説明だけでした。
 133 「おまえの質問のどれも私にはとても喜ばしい」と
 134 師は答えて言った、「しかし、赤く煮えたぎる水が
 135 おまえの疑問の一つをしっかりと解いてくれていたはずだが。

136 Letè vedrai, ma fuor di questa fossa,
137 là dove vanno l'anime a lavarsi
138 quando la colpa pentuta è rimossa".
139 Poi disse: "Omai è tempo da scostarsi
140 dal bosco; fa che di retro a me vegne:
141 li margini fan via, che non son arsi,
142 e sopra loro ogne vapore si spegne".

- 136 レーテーをおまえは見るだろうが、それは、この深淵の外に
138 おいてだ。罪を悔いて罪が消されたとき、
137 （煉獄の）魂たちがその川に身を^{きよ}浄めに行く。」
139 そして語を^つ継いだ、「もう、この森から離れる時間だ。
140 私の後になるようについて来るがいい。
141 堤は^や灼けてはいないから、そこが道になる。
142 その上では、降り注ぐ火炎はすべて消え去ってしまうからだ。」

CANTO XV

1 Ora cen porta l'un de' duri margini;
2 e 'l fummo del ruscel di sopra aduggia,
3 sì che dal foco salva l'acqua e li argini.
4 Quali Fiamminghi tra Guizzante e Bruggia,
5 temendo 'l fiotto che 'nver' lor s'avventa,
6 fanno lo schermo perché 'l mar si fuggia;
7 e quali Padoan lungo la Brenta,
8 per difender lor ville e lor castelli,
9 anzi che Carentana il caldo senta:
10 a tale imagine eran fatti quelli,
11 tutto che né sì alti né sì grossi,
12 qual che si fosse, lo maestro félli.
13 Già eravam da la selva rimossi
14 tanto, ch'ï non avrei visto dov' era,
15 perch' io in dietro rivolto mi fossi,
16 quando incontrammo d'anime una schiera
17 che venian lungo l'argine, e ciascuna
18 ci riguardava come suol da sera
19 guardare uno altro sotto nuova luna;
20 e sì ver' noi aguzzavan le ciglia
21 come 'l vecchio sartor fa ne la cruna.
22 Così adocchiato da cotal famiglia,
23 fui conosciuto da un, che mi prese
24 per lo lembo e gridò : "Qual meraviglia!".
25 E io, quando 'l suo braccio a me distese,

第15歌

- 1 今や、堅固^{けんこ}な堤^{つみ}が、私^{わたし}たちを連れてゆく。
- 2 小川^{せがわ}から立ち上^{のぼ}る蒸^し気^{やへい}が上空^{うくう}で遮^{しやへい}蔽^{へい}してくれるため、
- 3 川^{かわ}と堤^{つみ}は炎^{えん}から護^{まも}られていた。
- 5 フランドル人^{フランドルじん}は、満潮^{まんしやう}時に押^おし寄^よせる高潮^{かうしやう}を怖^{おそ}れ、
- 4 ヴィッサン^{ヴィッサン}からブリュージュ^{ブリュージュ}に至^{いた}るまで
- 6 海^{うみ}が逃^にげ去^さる「退^ひく」ようにと堤防^{ていぼう}を築^{つく}き、
- 8 パードヴァ人^{パードヴァじん}は、自分^{自分}たちの町^{まち}と城塞^{じやうさい}を護^{まも}ろうと、
- 9 トレント^{トレント}の山^{やま}々^々が暑^{あつ}さを感じる^{かんじ}る「春^{はる}になる」前に、
- 7 ブレンタ川^{ブレンタがわ}に沿^{したが}って堤^{つみ}を築^{つく}くが、
- 10 あの堤^{つみ}も、こうした似姿^{にそ}にできていた。
- 12 ただし、造^{つく}った工^{マエ}匠^{ストロ}が誰^{たれ}であれ、
- 11 これらのように高^{たか}くもな^なければ、厚^{あつ}くもな^なかった。
- 13 そうこうするうち、私^{わたし}たちは、すでに森^{もり}からずいぶんと
- 15 遠^{とほ}ざかり、振^ふり返^{かへ}ってみた^{とて}とて、
- 14 その在^あ処^{りか}「森^{もり}」はもはや見^みえな^なかつた^たらう。
- 16 その時^{とき}、私^{わたし}たちは、堤^{つみ}に沿^{したが}ってや^やつて来^きる
- 17 一^{いっ}群^{ぐん}の魂^{たま}たちに出^で会^あつた。誰^{たれ}もが、
- 18 私^{わたし}たちをしげしげと眺^{なが}め入^いつていた。ちやうど宵闇^{よいやみ}の新月^{しんげつ}の下^{した}、
- 19 （相^あ手^てを見^み定^{さだ}めよう^と）互^{たが}いに顔^{かお}を見^み合^あわ^わせる者^{もの}たち^のように、
- 20 眉^{まゆ}を寄^よせて私^{わたし}たちに眼^めを凝^こら^らすさ^さまは、
- 21 年^{とし}老^らいた仕立屋^{しだちや}が針^{はり}の穴^{あな}に糸^{いと}を通^{とお}そうとする時^{とき}のよう^{よう}だ^だつた。
- 22 こ^こんな^{んな}ふ^ふうにこ^この^の一^{いっ}族^{しゆ}が、私^{わたし}をじろじろと見^みま^まわ^わして^{して}いると、
- 23 ある男^{おとこ}が私^{わたし}を見^み覚^さえ、私^{わたし}の裾^{すそ}を掴^{つか}んで、
- 24 叫^{こゑ}んだ、「お^おお、何^{なに}という奇跡^{きせき}！」
- 25 私^{わたし}に伸^のば^ばさ^された腕^{うで}に驚^{おど}いた私^{わたし}は、

26 ficcà li occhi per lo cotto aspetto,
27 sì che 'l viso abbrusciato non difese
28 la conoscenza sù al mio 'ntelletto;
29 e chinando la mano a la sua faccia,
30 rispuosi: “Siete voi qui, ser Brunetto?”.
31 E quelli : “O figliuol mio, non ti dispiaccia
32 se Brunetto Latino un poco teco
33 ritorna 'n dietro e lascia andar la traccia”.
34 I' dissi lui : “Quanto posso, ven preco;
35 e se volete che con voi m'asseggia,
36 farò, se piace a costui che vo seco”.
37 “O figliuol”, disse, “qual di questa greggia
38 s'arresta punto, giace poi cent' anni
39 sanz' arrostarsi quando 'l foco il feggia.
40 Però va oltre : i' ti verrò a' panni;
41 e poi rigiugnerò la mia masnada,
42 che va piangendo i suoi eterni danni”.
43 Io non osava scender de la strada
44 per andar par di lui; ma 'l capo chino
45 tenea com' uom che reverente vada.
46 El cominciò : “Qual Fortuna o destino
47 anzi l'ultimo dì qua giù ti mena?
48 e chi è questi che mostra 'l cammino?”.
49 “Là sù di sopra, in la vita serena”,
50 rispuos' io lui, “mi smarri' in una valle,
51 avanti che l'età mia fosse piena.
52 Pur ier mattina le volsi le spalle:
53 questi m'apparve, tornand' io in quella,

- 26 その^{ただ}爛れた容貌に眼差しを深く打ち込んだ。
27 顔が^や灼け焦げていようと、
28 彼が誰か、私の記憶が見^{あやま}過つことはなかった。
29 私はとっさに手をその顔に差し伸べて
30 答えた、「ブルネット先生、あなたがここにいらっしゃる？」
31 すると、彼は言った、「おお、わが息子よ、もし差し支えなければ、
32 このブルネット・ラティーニが、列を先に行かせて
33 君とともに、今少し、道を引き返してもよろしいか。」
34 私は「願ってもありません、是非、お願い致します」と、彼に
35 答えた、「もしここに立ち止まるようお望みでしたら、
36 私とともに歩むこの方の許しを乞うて、おそばに座りますが。」
37 「おお、息子よ」と彼が言った、「この群の誰であれ、
38 一瞬でも足を留めれば、そのあと百年もの間、打ちつける
39 炎から身を守ることなく、横たえていなければならないのだ。
40 だから、そのまま先へ進んでくれ、私が君のそばについていく。
42 後でまた、永劫の刑罰に泣きながら進む
41 私の仲間のもとに戻ろう。」
43 私は（堤の）道から降りて、彼と肩を並べて歩きたかったが
44 それは叶わぬ願いだったので、せめてもと
45 うやうやしく歩む人のように、頭を^{こうべ}垂れて進んだ。
46 彼は話し始めた、「いかなる巡り合わせが、それとも運命が
47 最後の日を迎える前にこの下界へと君を導いているのだろうか？
48 また、道を指し示すこの方は誰であろう？」
49 「あの地上の、光あふれる晴朗な人生において」と
51 私は彼に答えた、「^{よわい}齢満ちる〔三十五歳になる〕前に
50 私はとある谷〔暗い森〕へと迷い込み、
52 昨日の朝、その谷に背を向けたばかりです。
53 私が再びそこへ舞い戻ろうとしたその時、この方が現れて、今、

54 e reducemmi a ca per questo calle”.
55 Ed elli a me: “Se tu segui tua stella,
56 non puoi fallire a glorioso porto,
57 se ben m'accorsi ne la vita bella;
58 e s'io non fossi sì per tempo morto,
59 veggendo il cielo a te così benigno,
60 dato t'avrei a l'opera conforto.
61 Ma quello ingrato popolo maligno
62 che discese di Fiesole *ab* antico,
63 e tiene ancor del monte e del macigno,
64 ti si farà, per tuo ben far, nimico;
65 ed è ragion, ché tra li lazzi sorbi
66 si disconvien fruttare al dolce fico.
67 Vecchia fama nel mondo li chiama orbi;
68 gent' è avara, invidiosa e superba:
69 dai lor costumi fa che tu ti forbi.
70 La tua fortuna tanto onor ti serba,
71 che l'una parte e l'altra avranno fame
72 di te; ma lungi fia dal becco l'erba.
73 Faccian le bestie fiesolane strame
74 di lor medesme, e non tocchin la pianta,
75 s'alcuna surge ancora in lor letame,
76 in cui riviva la sementa santa
77 di que' Roman che vi rimaser quando
78 fu fatto il nido di malizia tanta”.
79 “Se fosse tutto pieno il mio dimando”,
80 rispuos' io lui, “voi non sareste ancora
81 de l'umana natura posto in bando;

- 54 この^{みち}徑を通して私を家へと連れ戻して下さっているのです。」
- 55 すると彼は言った、「もし君が、自身の星に従うならば、
- 57 そして、^{うるわ}麗しの世での私の見立てが正しかったならば、
- 56 君は、必ずや栄光の港に着くことができる。
- 59 天がかくも情け深く君の味方をされるのを見ていた以上、
- 58 私をもっと長生きしていたならば、
- 60 君の仕事を励ましたことだろう。
- 62 だが、^{いにしえ}古の時代に、フィエーゾレから降りてきた
- 61 例の邪悪な忘恩の民は、
- 63 今なお、山と岩の性質を保ち続けている。
- 64 君が正しきことを行うが故に、君に敵対し、君を憎むようになる。
- 65 それも当然のこと、酸っぱいナナカマドの実の間に
- 66 甘いイチジクの実がなる道理はないからだ。
- 67 昔からの諺にあるように、彼らは《^{めし}盲目ども》と呼ばれてきた。
- 68 貪欲にして、嫉妬深く、高慢な輩だ。
- 69 ゆめゆめ彼らの習俗に染まる事なかれ。
- 70 君の運命は、非常な栄誉を君に用意している、（黒派・白派の）
- 71 両派とも君（への憎しみ）に飢え、^{むさぼ}貪ろうとするほどの。
- 72 だが、草はヤギから遠くにあつて食まれることはない。
- 73 フィエーゾレの獣たちには、互いを^{まぐさ}秣とさせておくが いい、
- 75 だが、彼らの堆肥の中で、なおも植物が芽吹いてきたなら、
- 74 それを獣たちに触れさせてはならぬ。
- 78 巨悪の^{そうくつ}巢窟〔フィレンツェ〕が創建されたとき、
- 77 その地に留まったあのローマ人の
- 76 聖なる^{たね}種子がその植物の中で生き続けているのだから。」
- 79 「もしも私の願いが完全に叶えられていましたなら」と
- 80 私が答えた、「人間の生から未だ
- 81 追われてはいらっしゃらなかったでしょうに。

82 ché 'n la mente m'è fitta, e or m'accora,
83 la cara e buona imagine paterna
84 di voi quando nel mondo ad ora ad ora
85 m'insegnavate come l'uom s'eterna:
86 e quant' io l'abbia in grado, mentr' io vivo
87 convien che ne la mia lingua si scerna.
88 Ciò che narrate di mio corso scrivo,
89 e serbolo a chiosar con altro testo
90 a donna che saprà, s'a lei arrivo.
91 Tanto vogl' io che vi sia manifesto,
92 pur che mia coscienza non mi garra,
93 ch'a la Fortuna, come vuol, son presto.
94 Non è nuova a li orecchi miei tal arra:
95 però giri Fortuna la sua rota
96 come le piace, e 'l villan la sua marra".
97 Lo mio maestro allora in su la gota
98 destra si volse in dietro, e riguardommi;
99 poi disse: "Bene ascolta chi la nota".
100 Né per tanto di men parlando vommi
101 con ser Brunetto, e dimando chi sono
102 li suoi compagni più noti e più sommi.
103 Ed elli a me: "Saper d'alcuno è buono;
104 de li altri fia laudabile tacerci,
105 ché 'l tempo sarìa corto a tanto suono.
106 In somma sappi che tutti fur cherci
107 e letterati grandi e di gran fama,
108 d'un peccato medesimo al mondo lerci.
109 Priscian sen va con quella turba grama,

84 現世で、折あるごとに、
85 人はいかにして永遠となるかを教えて下さったときの、
83 先生の、慈父のような愛しい面影が心に深く
82 刻まれていますので、今は、心が苦しくてなりません。
86 私が先生にどれほど感謝しているか、
87 生きている限り、私の言葉を通して示し続けるつもりです。
88 私の行く末について先生がお話しになられたことを心に銘記し、
89 他の予言と共に、解することのできるかの女性^{かた}に解き明かして
90 頂きましょう、その御許にまで参ることが許されますならば。
91 これだけはお知りおき頂きたいのですが、
93 私の良心が咎めない限り、運命の望むまま
92 いかなる巡り合わせも甘受する覚悟ができております。
94 かかる証〔預言〕は耳新しいものではありません。
95 それゆえ、フォルトゥーナには運命の輪を回させ、
96 田夫^{でんぶ}には鋤^{くわ}を、好きなように、振り回せましょう。」
97 すると、わが師〔ウェルギリウス〕は右頬を
98 後ろへと向け、私を見つめて、それから言った、
99 「心に銘記する者こそ、よく聞く者だ。」
100 行く末の気がかりを措^おいて、私はブルネット先生と
101 話ながら歩み続け、その連れの中で
102 誰が最も名高く、最も位の高い者たちなのかを訊ねた。
103 それで、彼は答えた、「何人かについては知っておくのが有益だが、
104 その他の者たちについては黙^{もろ}しておく方が宜しかろう。
105 というのも、多くを語るには、時は余りに短い。
106 要するに、皆、聖職者や
107 大いなる名声の偉い学者たちばかりだったが、
108 現世で、同じ一つの罪^{けが}に穢れた。
109 あの惨めな集団とともに進むのはプリスキアーヌス、

110 e Francesco d'Accorso anche; e vedervi,
111 s'avessi avuto di tal tigna brama,
112 colui potei che dal servo de' servi
113 fu trasmutato d'Arno in Bacchiglione,
114 dove lasciò li mal protesi nervi.
115 Di più direi; ma 'l venire e 'l sermone
116 più lungo esser non può, però ch'ì veggio
117 là surger nuovo fummo del sabbione.
118 Gente vien con la quale esser non deggio.
119 Sieti raccomandato il mio Tesoro,
120 nel qual io vivo ancora, e più non cheggio".
121 Poi si rivolse, e parve di coloro
122 che corrono a Verona il drappo verde
123 per la campagna; e parve di costoro
124 quelli che vince, non colui che perde.

- 110 フランチェスコ・ダッコルソもいる。^{かいせん たぐい}疥癬の類を
111 ^{しょうもう}ご所望だったなら、あの群れの中に見ることができたのだが。
112 その男[アンドレア・デ・モッツィ]^{しもべ}は、^{しもべ}僕の中の僕[教皇(ボニファーティウス八世)]によって
113 アルノ川（の町）からバッキリオーネ川（の町）へ左遷され、
114 その地^{きつりつ}に、^ま悪徳へ^ら屹立した^{のこ}魔羅を遺した。
115 もっと話したいのだが、一緒に歩むも、ともに語らうも、
116 もはやこれまでだ。向こうの熱砂から
117 新たな砂煙がわき上がるのが見えるからだ。
118 人々がやって来る、私は彼らと一緒にいてはならないのだ。
119 わが^{テソーロ}『宝典』を宜しく頼む。
120 その中で私はまだ生きている。それ以外もはや頼みはない。」
121 こう言って後ろを向くと、その（走りゆく）姿は、
122 緑の優勝旗を競って、ヴェローナの野を
123 駆けゆく者たちのように見えた。しかも、その中の
124 敗者ではなく、勝者のように見えた。

CANTO XVI

1 Già era in loco onde s'udia 'l rimbombo
2 de l'acqua che cadea ne l'altro giro,
3 simile a quel che l'arnie fanno rombo,
4 quando tre ombre insieme si partiro,
5 correndo, d'una torma che passava
6 sotto la pioggia de l'aspro martiro.
7 Venian ver' noi, e ciascuna gridava:
8 "Sòstati tu ch'a l'abito ne sembri
9 essere alcun di nostra terra prava".
10 Ahimè, che piaghe vidi ne' lor membri,
11 ricenti e vecchie, da le fiamme incese!
12 Ancor men duol pur ch'i' me ne rimembri.
13 A le lor grida, il mio dottor s'attese;
14 volse 'l viso ver' me, e "Or aspetta",
15 disse, "a costor si vuole esser cortese.
16 E se non fosse il foco che saetta
17 la natura del loco, i' dicerei
18 che meglio stesse a te che a lor la fretta".
19 Ricominciar, come noi restammo, ei
20 l'antico verso; e quando a noi fuor giunti,
21 fenno una rota di sé tutti e trei.
22 Qual sogliono i campion far nudi e unti,
23 avvisando lor presa e lor vantaggio,
24 prima che sien tra lor battuti e punti,
25 così, rotando, ciascuno il visaggio

第16歌

- 1 すでに私は水音のざわめきが聞こえてくる地点へ
3 さしかかっていた。向こうでは、蜜蜂の巣箱が立てる羽音^{は おと}のように、
2 小川が次の（第八）圈へと流れ落ちていたが、
4 そのときである。三人の魂が、
6 苛烈^{かれつ}な苦患^{くげん}の雨の下を通っていく隊列から
5 ともに離れ、ともに駆けてきた。
7 私たちの方へやって来ると、揃^{そろ}って叫んだ。
8 「止まれ、その服装から、
9 君はわれらと同じ、背徳の地〔フィレンツェ〕の生まれに見えるが。」
10 ああ、何と痛ましい傷が、彼らの全身に見えたことか。
11 炎に焼き焦^やがされ、肉の剥^むき出た真新しい傷もあれば、
12 古い火傷^{やけど}の痕もあった。思い出だけで、なおも心が痛む。
13 わが賢者は、彼らの叫び声に注意を留めると、
14 私の方へと顔を向け、「待ちなさい」と言った。
15 「この人たちには、礼^{もつ}を以て接する必要がある。
16 炎の矢を降らせる
17 場所柄^{がら}でさえなければ、彼らではなく、
18 おまえの方が駆けつけるに似つかわしいところだ。」
19 私たちが立ち止まるや、彼らは
20 いつもの動きに戻り、私たちのところにやって来ると、
21 三人で一つの輪を描いた。
22 油を塗った裸のレスリング選手たちは、
23 殴りあい傷つけあう前に、相手^{つか}を先に掴んで
24 有利に立とうと、虎視眈々^{こ し たんたん}と相手を狙うものだが、
25 ちょうどそのような目つきで、三人とも、廻りながら、

26 drizzava a me, sì che 'n contraro il collo
27 faceva ai piè continüo viaggio.
28 E “Se miseria d'esto loco sollo
29 rende in dispetto noi e nostri prieghi”,
30 cominciò l'uno, “e 'l tinto aspetto e brolo,
31 la fama nostra il tuo animo pieghi
32 a dirne chi tu se', che i vivi piedi
33 così sicuro per lo 'nferno fregghi.
34 Questi, l'orme di cui pestar mi vedi,
35 tutto che nudo e dipelato vada,
36 fu di grado maggior che tu non credi:
37 nepote fu de la buona Gualdrada;
38 Guido Guerra ebbe nome, e in sua vita
39 fece col senno assai e con la spada.
40 L'altro, ch'appresso me la rena trita,
41 è Tegghiaio Aldobrandi, la cui voce
42 nel mondo sù dovria esser gradita.
43 E io, che posto son con loro in croce,
44 Iacopo Rusticucci fui, e certo
45 la fiera moglie più ch'altro mi nuoce”.
46 S'i fossi stato dal foco coperto,
47 gittato mi sarei tra lor di sotto,
48 e credo che 'l dottor l'avria sofferto;
49 ma perch' io mi sarei bruciato e cotto,
50 vinse paura la mia buona voglia
51 che di loro abbracciar mi faceva ghiotto.
52 Poi cominciai: “Non dispetto, ma doglia
53 la vostra condizion dentro mi fisse,

- 26 私の方へ顔を向けていた。このため、（彼らの）
 27 首は絶えず足とは逆の方向へ動き続けていた。
 28 すると、一人が口を切った、「この軟弱な地の悲惨さゆえ、
 29 また黒焦げて、皮むき爛^{ただ}れた姿ゆえ、
 30 われらと同様、われらの頼みを見下^さげてしまおうとも、
 31 われらの名望^{めいぼう}を聞けば、君も心を屈^{かが}めて、われらに教える
 32 気になろう。君は何者だ、生きた足を（地）に擦^すりつけながら、
 33 何の怖れもなく無傷のまま地獄を歩いてゆくが。
 34 見ての通り、私がその足跡を踏んでいくこの方は
 35 （今は）裸で、皮も毛も剥^はがれていようとも
 36 君の思いも寄らぬほど高い身分の方だった。
 37 徳の誉れ高きグアルドラータ婦人の孫であった
 38 この方の名は、あのゲイード・グエッラ。その生涯において
 39 賢と剣とによって、数々の大事を成し遂げた。
 40 一方、私の後ろで砂を踏みしだき進むは、
 41 テッギアーヨ・アルドブランディ。その声が
 42 現世で、喜んで聞き容れられるべき方だった。
 43 彼らとともに十字架に架けられ「責め苛^{さいな}まれ」ているこの私は、
 44 ヤーコボ・ルスティクッチだった。何を隠そう、
 45 ほかの何にもまして、猛妻のために、私は身を損なった。」
 46 もし炎（の雨）が降りかかりさえしなかったならば、
 47 私は、（堤の）下の、彼らの許^{もと}に身を投じていただろう。
 48 そして、賢者「ウエルギリウス」もそれを認めて下さったに違いない。
 49 だが、そうすれば、焼け焦げてしまうため、
 51 彼らを抱き締めたいという
 52 私の熱意も、恐怖に打ち負かされてしまった。
 53 今度は、私が話し始めた、「侮蔑どころか、皆さんの
 54 様子を目にし、私の心は、いつまでも拭^{ぬぐ}い去られることのない

54 tanta che tardi tutta si dispoglia,
55 tosto che questo mio signor mi disse
56 parole per le quali i' mi pensai
57 che qual voi siete, tal gente venisse.
58 Di vostra terra sono, e sempre mai
59 l'ovra di voi e li onorati nomi
60 con affezion ritrassi e ascoltai.
61 Lascio lo fele e vo per dolci pomi
62 promessi a me per lo verace duca;
63 ma 'nfin al centro pria convien ch'i' tomi".
64 "Se lungamente l'anima conduca
65 le membra tue", rispuose quelli ancora,
66 "e se la fama tua dopo te luca,
67 cortesia e valor di se dimora
68 ne la nostra città sì come suole,
69 o se del tutto se n'è gita fora;
70 ché Guglielmo Borsiere, il qual si duole
71 con noi per poco e va là coi compagni,
72 assai ne cruccia con le sue parole".
73 "La gente nuova e i sùbiti guadagni
74 orgoglio e dismisura han generata,
75 Fiorenza, in te, sì che tu già ten piagni".
76 Così gridai con la faccia levata;
77 e i tre, che ciò inteser per risposta,
78 guardar l'un l'altro com' al ver si guata.
79 "Se l'altre volte sì poco ti costa",
80 rispuoser tutti, "il satisfare altrui,
81 felice te se sì parli a tua posta!

- 53 多大な苦しみに、深く刻み込まれてしまいました。
- 55 こちらのわが主から、先ほどお聞きした
- 57 言葉より、皆さんのような立派な方が
- 56 おいでになると察しておりました。
- 58 私もあなた方と同郷の者です。常々、
- 59 あなた方の業績と誉れ高き名を、
- 60 愛着をもって語り、傾聴してきました。
- 61 私は、今、苦きを去り、真^{まこと}の先導者が約束して下さった
- 62 甘美な果実へと向かっておりますが、
- 63 その前に（世界の）中心「地獄の底」へと降りゆかねばなりません。」
- 64 「魂が君の四肢を長く導かんことを」と、
- 65 先ほどの魂が、さらに答えて言った、
- 66 「そして、君の名声が、君の後も輝かんことを。
- 67 それで、教えてくれ給え、惜しみなき精神と徳とが、
- 68 かつてのように今もわれらの都市^{まち}「フィレンツェ」に宿っているのか、
- 69 それとも、完全に消え去ってしまったのか。というのも
- 71 向こうで仲間と進み、われらと共に塗炭^{とたん}の苦しみを
- 70 舐^なめるようになって日の浅いグリエルモ・ボルスイエーレ
- 72 の知らせに、われらは悲憤やるかたないのだ。」
- 73 「新参者と俄儲^{あぶくぜに}け「虚業」とが、フィオレンツァよ、
- 75 汝の中に、倨傲と無節操を植え付けたために、
- 74 汝はすでにその結果に泣いている」と、
- 76 私は顔を上に挙げて「地上に向けて」叫んだ。
- 77 すると、この言葉を（質問の）答えと解した三人は、
- 78 おのの^{おのの}戦^{もつ}きを以て真実を見つめる人のように、互いに顔を見合わせた。
- 79 「他の時にも、他者^{ほか}の質問にこれほど苦もなく
- 80 答えられるなら」と、（三人）皆が言った、
- 81 「自身の心に従って臆^{おく}することなく話す君は幸いなるかな。

82 Però, se campi d'esti luoghi bui
83 e torni a riveder le belle stelle,
84 quando ti gioverà dicere "I' fui",
85 fa che di noi a la gente favelle".
86 Indi rupper la rota, e a fuggirsi
87 ali sembiar le gambe lor isnelle.
88 Un amen non sarìa possuto dirsi
89 tosto così com' e' fuoro spariti;
90 per ch'al maestro parve di partirsi.
91 Io lo seguiva, e poco eravam iti,
92 che 'l suon de l'acqua n'era sì vicino,
93 che per parlar saremmo a pena uditi.
94 Come quel fiume c'ha proprio cammino
95 prima dal Monte Viso [Veso] 'nver' levante,
96 da la sinistra costa d'Apennino,
97 che si chiama Acquacheta suso, avanti
98 che si divalli giù nel basso letto,
99 e a Forlì di quel nome è vacante,
100 rimbomba là sovra San Benedetto
101 de l'Alpe per cadere ad una scesa
102 ove dovea per mille esser recetto;
103 così, giù d'una ripa discoscata,
104 trovammo risonar quell' acqua tinta,
105 sì che 'n poc' ora avrìa l'orecchia offesa.
106 Io avea una corda intorno cinta,
107 e con essa pensai alcuna volta
108 prender la lonza a la pelle dipinta.
109 Poscia ch'io l'ebbi tutta da me sciolta,

- 82 それなればこそ、君が、この^{とこよ}常夜の地を無事に脱して地上に戻り、
 83 ふたたび美しい星々を仰ぎ見んことを。いつの日か
 84 『私は（地獄に）行った』と言うのが君の喜びとなるそのとき、
 85 どうか地上の人々にわれらのことを語ってもらいたい。」
 86 こう言うと、三人は輪を解いて、走り去っていったが、
 87 その素速い足には羽が生えているかのように思えた。
 89 『アーメン』一つ唱えることさえできぬほど
 88 瞬く間に、三人は姿を消した。
 90 これを受けて、師にはもうここを離れる頃合いに思われた。
 91 私は先達^{せんだつ}の^{うしろ}後に付き従った。それからしばらく進むと、
 93 話しかけたとしても、ほとんど聞き取れないほどまで
 92 水音が近くに迫ってきた。
 95 ヴェーゾ山から東に向かい、
 96 アペニン山脈の左裾から、最初の川として
 94 自立した道を持つ「直接海に流れ込む」あの（モントーネ）川は、
 98 谷を降り下り、平野へ入って、
 99 フォルリーでその名を失うまで、
 97 上流では《^{アックワケータ}静かなる川》と呼ばれ、
 100 聖ベネディクト・デ・ラルベ修道院の上あたりで、
 102 千条に分岐すべきであったところを、
 101 一条の滝となって落下し、轟音を立てるが、
 104 ちょうどそのように、血の色に染まったあの水は
 105 はや耳^{ろう}を聳さんばかりの轟をあげて、
 103 峨峨^{がが}とした懸崖^{けんがい}から流れ落ちていた。
 106 私は腰に縄帯を締めていたが、
 108 それで斑^{まだら}目の皮をした豹を
 107 捕まえようと、かつて思ったことがある。
 110 私は先達に命じられるまま、

110 sì come 'l duca m'avea comandato,
111 porsila a lui aggroppata e ravvolta.
112 Ond' ei si volse inver' lo destro lato,
113 e alquanto di lunge da la sponda
114 la gittò giuso in quell' alto burrato.
115 "E' pur convien che novità risponda",
116 dicea fra me medesmo, "al novo cenno
117 che 'l maestro con l'occhio sì seconda".

118 Ahi quanto cauti li uomini esser dienno
119 presso a color che non veggion pur l'ovra,
120 ma per entro i pensier miran col senno!
121 El disse a me: "Tosto verrà di sovra
122 ciò ch'io attendo e che il tuo pensier sogna;
123 tosto convien ch'al tuo viso si scovra".
124 Semper a quel ver c'ha faccia di menzogna
125 de' l'uom chiuder le labbra fin ch'el puote,
126 però che senza colpa fa vergogna;
127 ma qui tacer nol posso; e per le note
128 di questa comedia, lettor, ti giuro,
129 s'elle non sien di lunga grazia vòte,
130 ch'ì vidi per quell' aere grosso e scuro
131 venir notando una figura in suso,
132 maravigliosa ad ogne cor sicuro,
133 sì come torna colui che va giuso
134 talora a solver l'àncora ch'aggrappa
135 o scoglio o altro che nel mare è chiuso,
136 che 'n sù si stende e da piè si rattrappa.

- 109 腰から縄帯をすっかり解き^と外^{はず}すと、
111 丸く巻き束^{たば}ねて先達に手渡した。
112 すると、先達は右側に体を向け、
113 崖っぶちから幾分離れたところから
114 あの深い峽谷^{きょうこく}の中へそれを投げ込んだ。
117 「師があれほど熱心に目で追っていらっしゃる
116 この前代未聞の合図に対して」と、私は心の中で言った、
115 「きっと、見たこともない不思議な事が起こるに違いない。」
- 118 ああ、何と気をつけねばならないことか、
119 （外に表れた）行為だけでなく、内なる考えの中まで
120 その透徹^{とうてつ}した視力で射抜く人の傍^{そば}にいるときは！
121 師は私に言った、「じきにここに浮かび上がって来よう、私の
122 待ち受けているもの、そしておまえが頭の中で夢見ている
123 ものが、すぐに、おまえの目の前に正体を現すはずだ。」
124 偽りの顔をした真実に対しては
125 できる限り、いつも口をつぐんでいる方が善い。口にすれば、
126 嘘をついていないのに、恥をかくだけだからだ。
127 だが、こればかりは黙ってはいられない。それで、読者よ、
128 この『喜劇^{コメディー}』の詩曲にかけて誓って言うが、
129 ～どうかこの詩曲が末永く愛されんことを～
130 私は見たのだ、あの濃い闇の中を通して、
132 どんな肝の持ち主にも驚愕を呼び覚す
131 得体の知れないものが、上がって来るのを。
135 あたかも、海底に隠れた暗礁か何かに
134 引っ掛^{いかり}かった錨^{はず}を外すために海に潜った水夫が、
136 上体を上に伸ばし、脚を引っ込めながら
133 （海面に）浮上してくるように、（宙を）泳いでやって来た。

CANTO XVII

1 “Ecco la fiera con la coda aguzza,
2 che passa i monti e rompe i muri e l'armi!
3 Ecco colei che tutto 'l mondo appuzza!”.
4 Sì cominciò lo mio duca a parlarmi;
5 e accennolle che venisse a proda,
6 vicino al fin d'i passeggiati marmi.
7 E quella sozza imagine di froda
8 sen venne, e arrivò la testa e 'l busto,
9 ma 'n su la riva non trasse la coda.
10 La faccia sua era faccia d'uom giusto,
11 tanto benigna avea di fuor la pelle,
12 e d'un serpente tutto l'altro fusto;
13 due branche avea pilose insin l'ascelle;
14 lo dosso e 'l petto e ambedue le coste
15 dipinti avea di nodi e di rotelle.
16 Con più color, sommesse e sovrapposte
17 non fer mai drappi Tartari né Turchi,
18 né fuor tai tele per Aragne imposte.
19 Come talvolta stanno a riva i burchi,
20 che parte sono in acqua e parte in terra,
21 e come là tra li Tedeschi lurchi
22 lo bivero s'assetta a far sua guerra,
23 così la fiera pessima si stava
24 su l'orlo ch'é di pietra e 'l sabbion serra.
25 Nel vano tutta sua coda guizzava,

第17歌

- 1 「見よ、尾の尖った獣を、
2 山々を越え、城壁も、堅い守りも打ち砕く。
3 見よ、全世界をその悪臭で満たすかのものを。」
4 わが導師は、私にこう言うと、（私たちが）
6 歩いてきた大理石〔堤〕の端近くの
5 絶壁の縁に来よう、獣に合図した。
7 すると、あの穢^{けが}れた欺^ぎ瞞^{まん}の生き写しが
8 浮かび来たりて、その頭と胸とを接岸させたが、
9 堤の上に尾をもたげようとはしなかった。
10 その顔は、義人の顔だった。
11 たいそう善人そうな外^{そとづら}面をしていたが、
12 残りの胴体はすべて蛇だった。
13 かぎづめ 鈎爪生えた両脚は、胴の付け根まで毛で覆われていた。
14 （蛇皮の）背にも、胸にも、両脇にも
15 様々に入り組んだ線と輪の模様が彩色されていた。
16 タタール人やトルコ人でさえ、これほど多彩で豊かな背景と
17 浮き織りの布を織^{ため}った例しもなければ、このような織物が
18 アラクネーによって作り上げられたこともなかった。
19 ちょうど脰^{はしけ}が、時折、岸辺で
20 半ば水の中、半ば陸に乗り上がっているように、
21 また、鯨飲^{げいいん}馬食^{ばしょく}のドイツ人の地で、海狸^{ビーバー}
22 獲物を獲ろうと（水と陸の間に）身構えているときのよう、
23 その極悪の獣は、砂地を取り囲む境界石の
24 縁にじっと留まっていた。
27 さそり 蠍の如く、その先端を武器とする

26 torcendo in sù la venenosa forza
27 ch'a guisa di scorpion la punta armava.
28 Lo duca disse: "Or convien che si torca
29 la nostra via un poco insino a quella
30 bestia malvagia che colà si corca".
31 Però scendemmo a la destra mammella,
32 e diece passi femmo in su lo stremo,
33 per ben cessar la rena e la fiammella.
34 E quando noi a lei venuti semo,
35 poco più oltre veggio in su la rena
36 gente seder propinqua al loco scemo.
37 Quivi 'l maestro "Acciò che tutta piena
38 esperienza d'esto giron porti",
39 mi disse, "va, e vedi la lor mena.
40 Li tuoi ragionamenti sian là corti;
41 mentre che torni, parlerò con questa,
43 che ne conceda i suoi omeri forti".
43 Così ancor su per la strema testa
44 di quel settimo cerchio tutto solo
45 andai, dove sedea la gente mesta.
46 Per li occhi fora scoppiava lor duolo;
47 di qua, di là soccorrien con le mani
48 quando a' vapori, e quando al caldo suolo:
49 non altrimenti fan di state i cani
50 or col ceffo or col piè, quando son morsi
51 o da pulci o da mosche o da tafani.
52 Poi che nel viso a certi li occhi porsi,
53 ne' quali 'l doloroso foco casca,

- 26 二又の毒針を巻き上げながら、
 25 尾全体が、虚空^{こくう}の中を、くねっていた。
 28 師は言った、「ここで、われらの道を
 29 少し曲げて、向こうで伏している
 30 あの邪惡な獣のところまで行かなければならない。」
 31 それで、私たちは（堤から）右手に降りてゆき、
 32 熱砂と炎の雨が十分に除けられるよう、
 33 境界石の上に沿って十歩ほど歩いた。
 34 そして私たちが獣のところによって来たとき、
 35 少し向こうの熱砂の上、虚空^{こくう}〔峡谷〕のすぐ近くに、
 36 人々が座っているのが見えた。
 37 ここで師が言った、「この圏での
 38 体験を完全なものとするよう、
 39 行って、彼らの有り様を見てくるがよい。
 40 長話は無用だ。おまえが戻って来るまでに、
 42 私は、その強き肩を貸してくれるよう
 41 こいつと話をつけておこう。」
 43 こうして私は、第七圏の境界の上を
 44 更に先へ、たった独り赴いた、
 45 懊惱^{おうのう}する人々が座しているところへと
 46 目を通して、彼らの苦しみは、外へと迸^{ほとばし}り出ていた。
 47 ある時は火焰^{かえん}に、ある時は焦土にと、せわしく
 48 あちこちへ救いの手を差し伸ばしていたが、
 49 その様^{さま}は、夏、蚤や蠅^{のみ}や虻^{あぶ}に
 50 苛^{さいな}まれて、鼻面^{づら}や足で
 51 犬が体を搔くのにそっくりだった。
 53 苦患^{くげん}の炎が降りかかる彼らの、
 52 幾人かの顔に私は眼をそばだてた。

54 non ne conobbi alcun; ma io m'accorsi
55 che dal collo a ciascun pendea una tasca
56 ch'avea certo colore e certo segno,
57 e quindi par che 'l loro occhio si pasca.
58 E com' io riguardando tra lor vegno,
59 in una borsa gialla vidi azzurro
60 che d'un leone avea faccia e contegno.
61 Poi, procedendo di mio sguardo il curro,
62 vidine un'altra come sangue rossa,
63 mostrando un'oca bianca più che burro.
64 E un che d'una scrofa azzurra e grossa
65 segnato avea lo suo sacchetto bianco,
66 mi disse: "Che fai tu in questa fossa?
67 Or te ne va; e perché se' vivo anco,
68 sappi che 'l mio vicin Vitaliano
69 sederà qui dal mio sinistro fianco.
70 Con questi Fiorentin son padoano:
71 spesse fiate mi 'ntronan li orecchi
72 gridando: «Vegna 'l cavalier sovrano,
73 che recherà la tasca con tre becchi!»".
74 Qui distorse la bocca e di fuor trasse
75 la lingua, come bue che 'l naso lecchi.
76 E io, temendo no 'l più star crucciasse
77 lui che di poco star m'avea 'mmonito,
78 torna'mi in dietro da l'anime lasse.
79 Trova' il duca mio ch'era salito
80 già su la groppa del fiero animale,
81 e disse a me: "Or sie forte e ardito.

- 54 誰一人、誰だか判らなかつたが、^{だれ} ^{かれ}誰も彼も
 55 首から一つの^{かね}金袋をぶら下げているのに気がついた。
 56 ^{ざいのう}財嚢はそれぞれ特定の色と家紋を有していたが、
 57 皆、その財嚢で目を養っているように見えた。
 58 それで、彼らをしげしげ眺めわたしているうち、
 60 ^{きんじ}金地の財嚢の上に、獅子の顔と^{したい}姿態の付いた
 59 青い紋章「ジャンフィリアツツイ家」が見て取れた。
 61 さらに、視線を移していくうち、
 62 血のように赤い、もう一つの財嚢が見て取れたが、
 63 その上にはバターよりも白い^{がちょう}鶯鳥「オブリアーキ家」が描かれていた。
 64 すると、腹の大きい青い雌豚を
 65 白い^{きんちやく}巾着の印としていた男「レジナルド・デッリ・スクロヴェンニ」が
 66 私に言った、「おい、この^{ほり}濠で何してる？
 67 とととと消え失せろ、おまえはまだ生きているから、
 68 教えておこう、わしの同郷「近親」のヴィタリアーノ（デル・デンテ）は
 69 ここでもわしの左側に座ることになるはずだ。
 70 この並み居るフィレンツェ人に伍しているわしはパードヴァの者だ。
 72 奴らが、しょっちゅう『来たれ、至高「最も偉大な高利貸し」の騎士
 73 「ジョヴァンニ・プイアモンティ」よ、三匹の雄ヤギが付いた金袋「ベッキ家」を携え』
 71 と^{わめ}喚くから、うるさくてたまらん。」
 75 こう言うなり、鼻^な舐めずりする牛のように
 74 口を歪めて、舌を出した。
 76 これ以上留まれば、長居は無用と
 77 ^{いさ}諫めていた師を煩わせはせぬかと心配になり、
 78 （苦患の炎に）打ちひしがれた魂たちから踵を返した。
 79 見ると、先達はすでに、身の毛もよだつ
 80 生き物の上に^{またが}跨って、
 81 私に命じた、「さあ、気を強く持ち、勇気を出せ、

82 Omai si scende per sì fatte scale;
83 monta dinanzi, ch'ï' voglio esser mezzo,
84 sì che la coda non possa far male".
85 Qual è colui che sì presso ha 'l riprezzo
86 de la quartana, c'ha già l'unghie smorte,
87 e triema tutto pur guardando 'l rezzo,
88 tal divenn' io a le parole porte;
89 ma vergogna mi fé le sue minacce,
90 che innanzi a buon signor fa servo forte.
91 I' m'assettai in su quelle spallacce;
92 sì volli dir, ma la voce non venne
93 com' io credetti: "Fa che tu m'abbracce".
94 Ma esso, ch'altra volta mi sovvenne
95 ad altro forse, tosto ch'ï' montai
96 con le braccia m'avvinse e mi sostenne;
97 e disse: "Gerïòn, moviti omai:
98 le rote larghe, e lo scender sia poco;
99 pensa la nova soma che tu hai".
100 Come navicella esce di loco
101 in dietro in dietro, sì quindi si tolse;
102 e poi ch'al tutto si sentì a gioco,
103 là 'v' era 'l petto, la coda rivolse,
104 e quella tesa, come anguilla, mosse,
105 e con le branche l'aere a sé raccolse.
106 Maggior paura non credo che fosse
107 quando Fetone abbandonò li freni,
108 per che 'l ciel, come pare ancor, si cosse;
109 né quando Icaro misero le reni

- 82 今から、この階段を使って、下に降りるぞ。
83 おまえは（私の）前に乗るがいい、おまえが尾に
84 傷つけられることのないよう、私が間に入る。」
88 私は、こう言葉をかけられると、
85 まさに、四日熱〔マラリア〕の悪寒が近づき、
86 爪から血の気が失せ、
87 日陰を見るだけで全身に震えの走る患者のようになった。
90 だが、羞恥心に駆られ、意を決した。雄々しい主人を
89 前にすると、僕も恥ずかしさから強くなるものだ。
91 私は、あのおぞましい両肩に座った。
92 本当は「私をしっかり抱いていて下さい」と
93 言いたかったのだが、思ったように声が出なかった。
94 しかし、他の時にも、別の危険を察知して救いを
95 差し伸べた師は、私が乗るや、
96 私の体に両腕を回してしっかりと支え、
97 「ゲーリュオーンよ、さあ進め」と、命じた。
99 「おまえが負うている希有^{けう}の荷に気をつけて
98 大きく輪を描き、少しずつ降りて行け。」
100 小舟が岸からそろりそろりと後ずさりしていくように、
101 ゲーリュオーンはこの縁から離れた。
102 やがて完全に身の自由を感じると、
103 先ほど胸があったところへ尾を巡らした。次いで、
104 尾を伸ばすと、ウナギのように、尾をくねらせ、
105 二本の爪足で大気を体に搔き集めながら進んでいった。
107 パエトーンが手綱^{たな}を手放したときも、～そのため、
108 天は焼け焦げてしまい、今もその痕〔天の川〕が見えるが～
109 また、哀れなイーカロスが、熱で蠟^{ろう}が溶けてしまい、
111 ～そのとき、父は彼に「道を間違えているぞ！」と叫んだが～

110 senti spennar per la scaldata cera,
111 gridando il padre a lui “Mala via tieni!”,
112 che fu la mia quando vidi ch’i’ era
113 ne l’aere d’ogne parte, e vidi spenta
114 ogne veduta fuor che de la fera.
115 Ella sen va notando lenta lenta;
116 rota e discende, ma non me n’accorgo
117 se non che al viso e di sotto mi venta.
118 Io sentìa già da la man destra il gorgo
119 far sotto noi un orribile scroscio,
120 per che con li occhi ’n giù la testa sporgo.
121 Allor fu’ io più timido a lo stoscio,
122 però ch’i’ vidi fuochi e senti’ pianti;
123 ond’ io tremando tutto mi raccoscio.
124 E vidi poi, ché nol vedea davanti,
125 lo scendere e ’l girar per li gran mali
126 che s’appressavan da diversi canti.
127 Come ’l falcon ch’è stato assai su l’ali,
128 che senza veder logoro o uccello
129 fa dire al falconiere “Omè, tu cali!”,
130 discende lasso onde si move isnello,
131 per cento rote, e da lunge si pone
132 dal suo maestro, disdegnoso e fello;
133 così ne puose al fondo Gerione
134 al piè al piè de la stagliata rocca,
135 e, discarcate le nostre persone,
136 si dileguò come da corda cocca.

- 110 両肩から翼を失うのを感じたときですら、
106 この時、私が味わった恐怖には及ばなかっただろう。
112 周りはみな空気ばかりとなり、
113 すべての視界は消え失せ、
114 獣の体以外、見えるものは何もなかった。
115 ゲーリュオーンは、泳ぎながら、ゆっくりゆっくりと進む。
116 円を描いて降りていくのが、ただ、顔に吹き寄せる風と同時に
117 下から吹き上げる風から判った。
118 やがて、右手に、滝壺が
119 凄まじい轟を立てるのが、下から聞こえてきた。
120 それで私は、頭を突き出し、下に眼を凝らした。
121 すると、私は今まで以上に落下するのが怖くなった。
122 炎が見え、歎き声が聞こえたからだ。
123 私は、わなわなと震え、両脚で必死にしがみついた。
124 今までは目に見えなかったが、ようやく
125 旋回しながら降りてゆくのが見え、大いなる責め苦が
126 四方八方から私たちに近づいてきた。
127 長らく飛び続けた鷹^{たか}が、（鷹を呼び戻す合図となる）
128 呼び返し^{おとり}罠や獲物を見つけもしないうちに、
129 鷹^{たか}匠^{じょう}から「ああ、（高度が）落ちてるぞ！」と言われ、
130 勢いよく飛び立った場所へ
131 百度も輪を描きながら元氣なく舞い戻り、主人から
132 遠く離れた所にむつつりと不機嫌そうに身を置くように、
133 ゲーリュオーンは降り立って、私たちを谷底の
134 切り立った崖の、まさに^{きわ}際に降ろした。
135 そして、積み荷のわれらを厄介^{やっかい}払いするや、
136 ^{ゆづる}弓弦から飛び立つ矢のように消え去った。

テキストの底本には、

Dante Alighieri, *La Divina Commedia secondo l'antica vulgata, Inferno*, a cura di Giorgio Petrocchi, Società Dantesca Italiana Edizione Nazionale, Mondadori, 1975.

を使用したか、いくつかの箇所において訳者の解釈に従って異なる読みを採用している。次のテキストは参照するに留めた。

Dantis Alagherii Comedia, edizione critica per cura di Federico Sanguineti, Galluzzo, Firenze, 2001.

なお、翻訳に参考とした註釈書は以下のものである。

参考文献

【現代の注釈書（21世紀～18世紀）】（新しい順）

1) Inglese

Commedia. Inferno. Revisione del testo e commento di Giorgio Inglese, Carocci, Roma, 2007.

2) Garboli

La Divina Commedia. Inferno, a cura di Cesare Garboli, Einaudi, Torino, 2004.

3) Hollander

Inferno, Translated by Robert Hollander & Jean Hollander, A Division of Random House, New York, 2000.

4) Chiavacci Leonardi

Commedia. Inferno, con il commento di Anna Maria Chiavacci Leonardi, Zanichelli, Bologna, 1999.

5) Durling

The Divine Comedy of Dante Alighieri. Inferno, Edited and

Translated by Robert M. Durling, Oxford University Press, New York-Oxford, 1996.

6) Bondioni

La Divina Commedia. Inferno, a cura di Gianfranco Bondioni, Principato, Milano, 1998.

7) Craveri

La Divina Commedia. Inferno, commento di Marcello Craveri, Il Girasole, Napoli, 1995.

8) Bosco & Reggio

La Divina Commedia. Inferno, a cura di Umberto Bosco e Giovanni Reggio, Le Monnier, Firenze, 1988.

9) Pasquini & Quaglio

Commedia, a cura di Emilio Pasquini e Antonio Quaglio, Garzanti, Milano, 1987.

10) Di Salvo

La Divina Commedia. Inferno, a cura di Tommaso di Salvo, Zanichelli, 1985.

11) Chimenz

La Divina Commedia. Inferno, a cura di Siro A. Chimenz, Unione, Torino, 1976.

12) Mattalia

La Divina Commedia. Inferno, a cura di Daniele Mattalia, Rizzoli, Milano, 1975.

13) T. Casini & S. A. Barbi & A. Momigliano

La Divina Commedia. Inferno, con i commenti di Tommaso Casini-Silvio Adrasto Barbi e di Attilio Momigliano, Sansoni, Firenze, 1972.

14) Singleton

The Divine Comedy, Translated, with a Commentary, by Charles S.

Singleton, Routledge & Kegan Paul, London, 1971.

15) Sapegno

La Divina Commedia. Inferno, a cura di Natalino Sapegno, La Nuova Italia, Firenze, 1968 2 ed..

16) Vandelli

La Divina Commedia, testo critico della Società Dantesca Italiana, riveduto, col commento scartazziniano rifatto da Giuseppe Vandelli, Hoepli, Milano, 1937.

17) Del Lungo

La Divina Commedia, commentata da Isidoro Del Lungo, Le Monnier, Firenze, 1926.

18) Scartazzini

La Divina Commedia di Dante Alighieri, riveduta nel testo e commentata da G. A. Scartazzini, F. A. Brockhaus, Leipzig, 1900.

19) Tommaseo

Commedia di Dante Alighieri, con ragionamenti e note di Niccolò Tommaséo, Milano, 1954.

20) Venturi

La Divina Commedia di Dante Alighieri, Col Comento del M. R. P. Pompeo Venturi, Venezia, 1772.

【古註（14～16 世紀）】（時代の古い順）

21) Iacopo Alighieri（1300 頃-1348 ?）

Chiose all'«Inferno», a cura di Saverio Bellomo, Antenore, Padova, 1990.

22) Graziolo de' Bambaglioli（1291-1343 頃）

Commento all'«Inferno» di Dante, a cura di Luca Carlo Rossi, Scuola Normale Superiore, Pisa, 1998.

23) Iacopo della Lana (13-14 世紀)

Comedia di Dante degli Allagherii col commento di Jacopo di Giovanni dalla Lana bolognese, a c. di Luciano Scarabelli, Civelli, Milano, 1864-1865.

24) Guido da Pisa (13-14 世紀)

Expositiones et Glose super Comediam Dantis or Commentary on Dante's Inferno, Edited with Notes and an introduction by Vincenzo Cioffari, Boston University President, The Dante Society of America, 1967-1973, Albany (New York), State University of New York Press, 1974.

25) Ottimo (1280 頃-1360 頃)

L'Ottimo commento della Divina Commedia. Testo inedito d'un contemporaneo di Dante, a c. di Alessandro Torri, Capurro, Pisa, 1827-1829.

26) Chiose latine anonime

Vincenzo Cioffari, *Anonymous Latin Commentary on Dante's Commedia. Reconstructed Text*, Centro Italiano di Studi sull'Alto Medioevo, Spoleto, 1989.

27) Pietro Alighieri (1300 頃-1364)

Il «Commentarium» di Pietro Alighieri nelle redazioni Ashburnhamiana e Ottoboniana, trascrizione e c. di Roberto della Vedova e Maria Teresa Silvolti, Olschki, Firenze, 1978.

28) Giovanni Boccaccio (1313-1375)

Esposizioni sopra la Comedia di Dante, a c. di Giorgio Padoan, in *Tutte le opere di Giovanni Boccaccio*, VI, Mondadori, Milano, 1965.

29) Benvenuto da Imola (1320/30-1387/88)

Comentum super Dantis Aldigherij Comoediam, nunc primum integre in lucem editum sumptibus Guilielmi Warren Vernon, curante

Iacobo Philippo Lacaita, Barbera, Firenze, 1887.

30) Chiose Ambrosiane

Le Chiose Ambrosiane alla «Commedia», edizione e saggio di commento a c. di Luca Carlo Rossi, Scuola Normale Superiore, Pisa, 1990.

31) Francesco da Buti (1315 頃-1406)

Commento di Francesco da Buti sopra la Divina Comedia di Dante Allighieri, pubblicato per cura di Crescentino Giannini, Nistri, Pisa, 1858-1862.

32) Filippo Villani (1325-1407/9)

Expositio seu comentum super «Comedia» Dantis Allegherii, a c. di Saverio Bellomo, Le Lettere, Firenze, 1989.

33) Anonimo Fiorentino (14 世紀)

Commento alla Divina Commedia d'Anonimo Fiorentino del secolo XIV, a c. di Pietro Fanfani, Romagnoli, Bologna, 1866-1874.

34) Cristoforo Landino (1424-1498)

Comento sopra La Comedia, a c. di Paolo Procaccioli, Salerno, Roma, 2001.

35) Chiose Filippine (14~15 世紀)

Chiose Filippine, a c. di Andrea Mazzucchi, Salerno, Roma, 2002.

36) Bernardino Daniello (1500 頃-1565)

L'espositione di Bernardino Daniello da Lucca sopra la Comedia di Dante, Edited by R. Hollander & J. Scnapp with K. Brownlee & N. Vickers, University Press of New England, Hanover and London, 1989.

37) Ludovico Castelvetro (1505-1571)

Sposizione di Lodovico Castelvetro a XXIX canti dell'Inferno dantesco, Antica Tipografia, Modena, 1886.

なお、訳出に参考にした論文や著作は、数百点にのぼるため紙幅の関係から割愛した。